グローバル社会における平和構築のための大学間ネットワークの創成
ー女性の役割を見据えた知の国際連携ー

令和６（2024）年度　実施報告書

2025 年 3 月

お茶の水女子大学グローバル協力センター

グローバル社会における平和構築のための大学間ネットワークの創成

―女性の役割を見据えた知の国際連携―

令和６（2024）年度　実施報告書

2025 年３月

お茶の水女子大学グローバル協力センター

はじめに

本報告書は「グローバル社会における平和構築のための大学間ネットワークの創成―女性の役割を見据えた知の国際連携―」事業とその他の資金による令和６（2024）年度のグローバル協力センターの活動実績を取りまとめたものです。

グローバル協力センターは、国際協力・平和構築を中心とした国際的な課題に関する教育研究とこれらを通じた女性リーダーの育成、開発途上国の女子教育・幼児教育に関する支援を２つの柱としています。この２つの柱のもと、開発途上国や国際協力の現場から学ぶ授業、大学院生の海外調査支援、各種セミナー・公開講演会、幼児教育分野の人材育成のための研修等に取り組むとともに、「共に生きる」スタディグループを通じ、学生による自主活動の支援なども行ってきました。

当センターは、国際社会において議論・実践が進む「持続可能な開発のための 2030 アジェンダ・持続可能な開発目標（SDGs：Sustainable Development Goals）」を重視し、平成 29（2017）年度から公開講座（SDGs セミナー）を開催しています。今年度も、紛争地域などでの取材、和平支援、開発途上国の衛生環境・栄養・学校教育改善、国内の放課後支援施設運営・弱者寄り添い、カンボジア教育スタートアップ、ブータンの開発・国際協力、JICA 海外協力隊等、幅広いテーマでセミナーを計 10 回開催しました。SDGs セミナーに加え、南アジアに位置するブータン王国の開発の現状と課題、そのあり方を考える地域研究型セミナー「ブータン連続セミナー」を計 15 回開催し、多くの参加者を得ました。さらに、開発途上国（ブータン、カンボジア）へのスタディツアー、日本海の離島である島根県隠岐郡海士町への「五女子大学合同国内スタディツアー」の実施や、JICA（独立行政法人国際協力機構）の委託事業である課題別研修「乳幼児ケアと就学前教育」での開発途上国人材の来日を実現することができました。

学内外の関係者の皆様のご支援・ご協力により、上記のように各種事業・活動を実施し、相応の成果を上げることができました。改めて心よりお礼申し上げる次第です。今後も、これまでの事業・活動で得た平和構築と途上国の社会経済開発のためのネットワークと人材育成にかかわる知見や成果を活用し、更なる知の集積・発信と教育研究に取り組んでいきたく、引き続きのご支援をよろしくお願いいたします。

2025 年 3 月

国立大学法人お茶の水女子大学
グローバル協力センター長　由良　敬

グローバル社会における平和構築のための大学間ネットワークの創成
―女性の役割を見据えた知の国際連携―

令和６（2024）年度　実施報告書　目次

I. 事業の概要 1

II. 令和６（2024）年度の活動の概要 5

１．活動の概要 7

２．各活動の概要 8
2.1　国際的な課題に関する教育・研究、これらを通じた同課題に取り組む女性リーダーの育成 8
2.2　開発途上国の女子教育・幼児教育に関する支援事業（教育・研究成果の国際社会への還元） 9

III.　国際的な課題に関する教育・研究、これらを通じた同課題に取り組む女性リーダーの育成 11

１．グローバル協力センター教員担当科目 13
1.1　平和と共生演習 13
1.2　国際協力特論 13
1.3　NPO 入門 15
1.4　NPO インターンシップ（実習） 16
1.5　国際共生社会論実習・国際共生社会論フィールド実習 16

２．グローバル協力センター主催セミナー 25
2.1　持続可能な開発目標（SDGs）セミナー 25
2.2　2024 年度ブータン連続セミナー 40

３．途上国研究・国際協力分野海外調査支援 66
3.1　実施概要 66
3.2　今年度の募集と選考結果 66
3.3　調査報告書要約 68

４．大学間連携イベント・活動 71
4.1　五女子大学コンソーシアム合同国内スタディツアー 71

4.2　国際協力・開発途上国・SDGs に関する単位互換（津田塾大学・奈良女子大学） 72

５．その他の国際協力関連活動 74
5.1　海外・日本国内各機関との連携 74

5.2　学生の国際協力活動支援 80

Ⅳ. 開発途上国の女子教育・幼児教育に関する支援事業（教育・研究成果の国際社会への還元）
..... 91

１．乳幼児ケアと就学前教育研修（独立行政法人国際協力機構（JICA）課題別研修） 93
1.1　概要 93
1.2　研修背景 93
1.3　2024 年度の実施内容 93

２．アフガニスタン向け絵本作成・配布（野々山基金） 100

V. その他 103

１．　グローバル協力センター図書室運営 105

２．情報発信（ウェブでの発信、パンフレット更新など） 106
2.1　ホームページによる情報発信 106
2.2　メーリングリストによる情報発信 106
2.3　大学メールマガジン、公式 SNS 等による情報発信 106
2.4　パンフレットによる情報発信 106

VI. 資料 109
１．各種イベント・案内のポスター 111

２．「途上国研究・国際協力分野海外調査支援」採択者報告書 120

I. 事業の概要

Ⅰ．事業の概要

【事業名】
「グローバル社会における平和構築のための大学間ネットワークの創成
―女性の役割を見据えた知の国際連携―」

【事業期間】
平成 22（2010）年度～令和 6（2024）年度

平成 22（2010）年度に文部科学省特別経費事業として 4 年計画で開始し、平成 23（2011）年度から大学一般経費事業に組み替え継続。

【概要】
グローバル社会における平和構築を目指して、先進国及び開発途上国の大学等との国際的ネットワークを創成する。このネットワークは、女性の役割を見据えた知的国際連携であり、先進国と開発途上国の大学等が共同して、開発途上国、特にアフガニスタンをはじめとするポスト・コンフリクト国・地域における女性と子どもへの支援の調査・研究と支援活動を行うとともに、ネットワークに基づく教育（人材育成）の実践の場とする。

【事業実施主体】
国際本部グローバル協力センター

【目的・目標】
本事業は、現代のグローバル社会における最重要課題である開発途上国、特にアフガニスタンをはじめとするポスト・コンフリクト国・地域における女性と子どもへの支援を目指した、知的国際連携による教育・研究・社会貢献を目的とするものである。
ポスト・コンフリクト国・地域を含む開発途上国では、女性は経済的・社会的弱者であり、中等・高等教育を受けることが非常に難しいのが現状である。お茶の水女子大学は、大学の基本的な目標として「すべての女性がその年齢・国籍等にかかわりなく、個々人の尊厳と権利を保障され、自由に自己の資質能力を開発し、知的欲求の促すままに自己自身の学びを深化させること」を掲げている。さらに世界の女子大学の多くもまた、「自らの知見を世界の平和のために使う」ことを建学の精神としている。本事業では、こうした世界の女子大学がもつ建学の理念を実現するために、女子大学がひとつになって平和を築くための活動を行うことを目的とする。
本事業の取組みは、お茶の水女子大学が拠点となり、日本及び世界の女子大学とネットワーク（フォーラム）を形成し、大学の構成員（教職員、学生・大学院生、卒業生の組織）による大きなネットワークによって開発途上国の女性と子どもへの支援、紛争によって傷ついた女性と子どもへのサポートを行うものである。また、こうした活動は、大学の使命である教育・研究・社会貢献を活性化し、この分野の人材育成活動に資することが考えられる。

本事業を通じて、大学間国際連携に基づくグローバル社会における平和構築の知的ネットワークの形成と、これに基づく教育・研究活動システムの創成を目指す。

【グローバル協力センター　2024 年度構成員】

職名	氏名
センター長／教授	由良　敬
副センター長／特任准教授	小田　亜紀子
講師	平山　雄大
センター員／教授	須藤　紀子
センター員／教授	浜野　隆
センター員／教授	森　義仁
センター員／准教授	荒木　美奈子
センター員／准教授	脇田　彩
センター員／講師	佐々木　元子
センター員／附属高等学校副校長	溝口　恵
センター員／附属小学校副校長	片山　守道
センター員／附属幼稚園副園長	髙橋　陽子
アカデミック・アシスタント	駒田　千晶
アカデミック・アシスタント	コブラ・ラヒミ（2024.4-6）

II. 令和 6（2024）年度の活動の概要

Ⅱ．令和 6（2024）年度の活動の概要

１．活動の概要

グローバル協力センターは、国際的な課題に関する教育研究とこれらを通じた女性リーダーの育成、開発途上国の女子教育・幼児教育に関する支援を 2 つの柱としてきている。今年度は、その柱の 1 つ「女性リーダーの育成」に関わる主要事業である「国際共生社会論実習」・「国際共生社会論フィールド実習」（開発途上国スタディツアー）を実施した（海外実習は令和 6（2024）年 8 月、9 月に各 1 回実施）。また、2 つ目の柱に関わる事業のうち、JICA（独立行政法人国際協力機構）の委託事業である課題別研修「乳幼児ケアと就学前教育」も、11 か国の研修員の来日を得て令和 6（2024）年 11～12 月にかけ実施した。

本学は、津田塾大学、東京女子大学、奈良女子大学および日本女子大学とともに「五女子大学コンソーシアム」を構成し、平成 14（2002）年からアフガニスタン女子教育支援に取り組んでおり、現在はその支援対象を開発途上国・紛争国に広げている。今年度は、令和 4（2022）年度 11 月に支援 20 周年を記念し開催された「紛争地域の女子教育支援を通した国際協力のあり方」シンポジウムを契機とし、令和 5（2023）年度より再開した「五女子大学コンソーシアム」の連絡協議会を引き続き開催した。連絡協議会では、「五女子大学コンソーシアム」の新たな連携活動・事業について様々な協議が行われ、「五女子大学コンソーシアム合同国内スタディツアー」や津田塾大学・奈良女子大学との単位互換に結実した。

さらに、当センターは、国際社会において議論・実践が進む「持続可能な開発のための 2030 アジェンダ・持続可能な開発目標（SDGs: Sustainable Development Goals）」を重視し、平成 29（2017）年度から公開講座（SDGs セミナー）を開催するとともに、SDGs に関連するイベントを SDGs 推進研究所とも連携しつつ行っている。今年度も、紛争地域などでの取材、和平支援、開発途上国の衛生環境・栄養・学校教育改善、国内の放課後支援施設運営・弱者寄り添い、カンボジア教育スタートアップ、ブータンの開発・国際協力、JICA 海外協力隊等、幅広いテーマでセミナーを開催した。SDGs セミナーに加え、南アジアに位置するブータン王国の開発の現状と課題、そのあり方を考える地域研究型セミナー「ブータン連続セミナー」を計 15 回開催し、多くの参加者を得た。

その他、センター教員による国際協力・開発途上国・SDGs に関連する授業の実施、本学大学院生による途上国研究・国際協力分野の海外調査の支援、英国、セネガル、ウズベキスタン各国の教育関係者・研究者による学内施設視察支援、JICA・島根県隠岐郡海士町など国内関係機関との連携活動、学生自主活動の支援など、冒頭の２つの柱に基づく多様な事業・活動を展開し、その内容をウェブサイトやメーリングリスト、SNS を通じ幅広く発信した。

２．各活動の概要

2.1　国際的な課題に関する教育・研究、これらを通じた同課題に取り組む女性リーダーの育成

(1) 全学共通科目「平和と共生演習」において、SDGs 各ゴールの進捗と課題、独立行政法人国際協力機構(JICA)を中心とした開発途上国の SDGs 推進に向けた取組みの実例を、講義・議論を通じて理解し、現場の視点で考える機会を提供した。

(2) グローバル文化学環設置科目「国際協力特論」において、講義や議論を通じ、開発途上国の社会経済の課題と国際協力について、具体例を紹介しつつ履修生の考察を深めた。また、開発途上国の現場で活躍する専門家等から直接話を聞く機会を積極的に設けた。

(3) 全学共通科目「NPO 入門」において、NPO を通して現代の社会問題を知り、その解決の方向性を探った。NPO を巡る諸相を多角的に取り上げると同時に、NPO で活躍するゲスト講師からお話を伺う機会を設けた。また、現代の社会問題と対応策についてグループワークを行い、架空の NPO の事業計画に関する発表を行った。

(4) 分離融合リベラルアーツ（LA）科目「生活世界の安全保障 23　NPO インターンシップ（実習）」において、学生が NPO の現状や役割、抱えている課題等を具体的に学ぶ機会を提供した。履修生は、NPO 法人セブンスピリット、hiro あおぞらプロジェクトにて実習を行った。

(5) 全学共通科目「国際共生社会論実習」及び共通科目（大学院博士前期課程）「国際共生社会論フィールド実習」において、履修生は①事前学習、②現地調査、③事後学習を通して、貧困、教育、地域間格差等のグローバルな課題についての理解を深めた。現地調査は 2024 年 8 月 20 日～28 日（合計 9 日間、現地滞在 7 泊 8 日）にブータン、2024 年 9 月 20 日～27 日（合計 8 日間、現地滞在 7 泊 8 日）にカンボジアで行った。履修生は各自が設定した研究課題の遂行のため、関連機関への訪問や人々へのインタビューを実施した（今年度は「フィールド実習」履修生なし）。

(6) 「持続可能な開発目標（SDGs）セミナー」を計 10 回（第 38 回～第 47 回）開催した。各回のテーマは、紛争地域などでの取材、和平支援、開発途上国の衛生環境・栄養・学校教育改善、国内の放課後支援施設運営・弱者寄り添い、カンボジア教育スタートアップ、ブータンの開発・国際協力、JICA 海外協力隊等、多岐に渡った。

(7) 「2024 年度ブータン連続セミナー」（全 15 回）を通じて、参加者とともにブータンの開発政策や国・地域の在りかたを考えた。毎回ブータンを扱った国内外の新旧映像作品を取り上げ、映像作品の紹介と視聴、発表者（コメンテーター）からの解説、質疑応答という流れで実施した。

(8) 途上国研究・国際協力分野海外調査支援では、「2024 年花蓮地震における被災者の生活ニーズが満たされた避難所運営体制とボランティアの支援活動について」「トンガ王国・エウア島における短期還流型労働者がもたらす多面的な影響」「開発途上国における個別排水処理（On-Site Sanitation）の周辺土壌のウイルス調査」の 3 件の海外調査を採択・支援した。

(9) 2024 年 9 月、「五女子大学コンソーシアム」に基づく活動の一環として、日本海の離島である島根県隠岐郡海士町の協力を得て、「五女子大学コンソーシアム合同国内スタディ

ツアー」を同町で実施した。ツアーには本学、東京女子大学、奈良女子大学および日本女子大学から各２名、計８名の学生が参加し、地域創生と国際協力に取り組む海士町の視察や関係者との意見交換などを行った。

(10) 2024 年６月、「五女子大学コンソーシアム」協定に基づき、津田塾大学との間で国際協力・開発途上国・SDGs に関する単位互換覚書が締結され、令和６（2024）年度後期から単位互換に基づく学生の履修が開始された。さらに、2025 年１月、奈良女子大学との間でも同様に単位互換覚書が締結され、令和７（2025）年度前期から同制度に基づく学生の履修が予定されている。

(11) アフガニスタン女子教育支援の目的で平成 14（2002）年に調印され、その後対象を開発途上国の女子教育支援に広げ継続してきた「五女子大学コンソーシアム」（本学、津田塾大学、東京女子大学、奈良女子大学、日本女子大学）の具体的な事業・活動を検討する機構である五女子大学コンソーシアム連絡協議会は、昨年度の会議再開以降、今年度も５・10 月に開催され、上記の「五女子大学コンソーシアム合同国内スタディツアー」や単位互換という具体的な連携活動に結びついた。さらに、五女子大学間の情報共有の枠組（メーリングリスト、ファクトシート、ウェブサイト上のページ）が整備され、効率的な情報共有体制が整備された。

(12) 英国幼児教育研究者、ウズベキスタン就学前・学校教育省関係者、セネガル教育大臣等、海外の教育関係者による本学附属学校園への視察依頼があり、グローバル協力センターが国際協力の窓口として各学校園との連絡調整やサポートを担った。

(13) 島根県隠岐郡海士町が実施する JICA 草の根技術協力事業「地域活性化に向けた教育魅力化プロジェクト―ブータン王国における地域課題解決学習（PBL）展開事業―」のプロジェクトメンバーとして、グローバル協力センター講師がブータンでの活動設計に携わると同時に、島根県立隠岐島前高等学校の課外活動「グローバル探究」の実施に貢献した。また、JICA 地球ひろばが主催したブータン関連の映画上映・講演会に協力した。

(14) 2024 年８月、都内渋谷区にある JICA の関東地方の事業拠点である JICA 東京より、夏期休暇期間に実施される特設インターンシッププログラムの提供があり、学内公募の結果、学部２年生・４年生・博士前期課程２年の３名が参加した。

(15) 国際協力に関心をもち活動する学生のグループである「共に生きる」スタディグループの説明会を実施するとともに、スタディグループメンバー学生の自主活動（STUDY FOR TWO、「お茶大パレスチナを想う会」、セカンドハンド等）を支援した。

(15) 2024 年 11 月に開催された徽音祭（大学祭）において、「国際共生社会論実習」履修生、「五女子大学コンソーシアム合同国内スタディツアー」に参加した本学学生、JICA 東京特設インターンシッププログラム参加学生等による活動の展示・発表を行った。

2.2　開発途上国の女子教育・幼児教育に関する支援事業（教育・研究成果の国際社会への還元）

(1) 2024 年 11－12 月、乳幼児の保護と教育の観点から国際的にニーズが高まっている幼児教育分野の人材育成のため、アジア・アフリカ・中東 11 ヵ国の行政官、視学官、指導主事等 14 名を対象に「乳幼児ケアと就学前教育」研修（JICA 課題別研修）を対面で実施した。

III. 国際的な課題に関する教育・研究、これらを通じた同課題に取り組む女性リーダーの育成

Ⅲ. 国際的な課題に関する教育・研究、これらを通じた同課題に取り組む女性リーターの育成

１．グローバル協力センター教員担当科目

1.1　平和と共生演習

2015 年 9 月の国連総会で、今後の国際社会、また開発途上国、先進国を含む各国の社会の方向性を考えるためのマイルストーンである「持続可能な開発のための 2030 アジェンダ・持続可能な開発目標（SDGs: Sustainable Development Goals）」が全会一致で採択された。SDGs は、「誰一人取り残さない」持続可能で多様性と包摂性のある社会の実現のため、2030 年を年限とする 17 の国際目標である（目標は、貧困、飢餓、保健、教育、ジェンダー、イノベーション、気候変動等）。

本科目では、SDGs の各ゴールについて、その概要及び特に開発途上国の現場の状況を理解するための文献・資料を取り上げ、議論を通じて考察を深めた。さらに、独立行政法人国際協力機構(JICA)を中心とした SDGs 推進に向けた取組みの実例を、講義・議論を通じて理解し、現場の視点で考える機会を提供した。

【アクティブ・ラーニング・アワー（ALH）概要①】

- ■ テーマ：「人間の安全保障と緒方貞子さんについて」（書籍購読・映像視聴・展示視察とディスカッション）
- ■ 日　時：2024 年 5 月 15 日（水）～5 月 22 日（水）
- ■ 内　容：元国連高等弁務官・JICA 理事長の故・緒方貞子氏と人間の安全保障に関する書籍・映像・展示のいずれかを選択し講読・視聴・視察後、内容と所感を 5 分程度のスライドにまとめて提出・発表させ、授業内でディスカッションを実施。

【ALH 概要②】

- ■ テーマ：「多文化共生」（書籍購読・映像視聴とディスカッション）
- ■ 日　時：2024 年 6 月 5 日（水）～6 月 12 日（水）
- ■ 内　容：多文化共生に関する書籍・映像のいずれかを選択し講読・視聴後、内容と所感を 5 分程度のスライドにまとめて提出・発表させ、授業内でディスカッションを実施。

【国際協力事業に従事する外部講師を招き、学内公開講座 SDGs セミナーとして実施】

※詳細は、「Ⅲ.　2.　2.1　持続可能な開発目標（SDGs）セミナー」を参照。

- ■ 第 39 回 SDGs セミナー「トイレを通じて 1 億人の衛生環境の改善を目指す～SATO が取り組むグローバルな衛生課題の解決」
- ■ 第 40 回 SDGs セミナー「世界の栄養問題：地球も人々も健康になる食事の実現に向けて」

1.2　国際協力特論

本科目では、開発途上国の現状、SDGs、人間の安全保障等、国際協力上の課題や国際協力の歴

史を総論として取り上げつつ、分野・課題別の具体事例、国際協力の一環としての海外の日系社会支援、日本国内の多文化共生の取組み（外国人労働者支援等）などについても理解を深め、全体を俯瞰する視座が養われるよう試みた。これらテーマについての参考文献、映像資料を取り上げ、講義、プレゼンテーション、議論を通じて、開発途上国が直面する課題について理解を深めるとともに、日本が抱える課題とも密接に関係する、その背景や構造的な要因にも目を向けた。また、可能な限り、政府施策やODAプロジェクト等の事例を紹介することで、理論と実務双方の検討、相互関係の考察を試みた。一時帰国中の JICA 海外事務所長や開発途上国出身の本学研究生による特別講義、外部講師による多角的な情報と考察（学内公開講座「SDGs セミナー」として実施）、そして書籍購読・映像視聴とディスカッションを行ったアクティブ・ラーニング・アワー（ALH）も、現場に根差した理解に繋がったものと考える。

【一時帰国中の JICA 海外事務所長・開発途上国出身の本学研究生による特別講義】

■　テーマ：中央アジアと JICA 事業について

■　開催日時：2024 年 11 月 27 日（水）16：40～18：10

■　講師：JICA タジキスタン事務所長　今井成寿（いまい　せいじゅ）氏、「国際協力特論」聴講生　シュクロナ・ショディエヴァ氏

■　概要（センターのウェブサイト掲載記事より）：

今井さんは中央アジア地域の JICA 事務所などへの赴任が長く、同地域の JICA 事業の専門家です。今回は一時帰国の機会を捉え、現在ご赴任中のタジキスタンをはじめとする中央アジアの国々の概要と JICA 事業についてお話いただきました。

タジキスタンご出身のシュクロナさんは、中央アジアのキルギスタンで JICA プロジェクトのインターンを経験するなどした後、現在はお茶の水女子大学で研究生として学んでいます。今回は、ご自身が深く関わられたキルギスタンの JICA 一村一品プロジェクトについて詳しくご紹介いただきました。

講義では、履修生にとっては未知の地域である中央アジアの歴史、経済、日本との関係などについて、今井さんのわかりやすい解説がありました。また、シュクロナさんの説明では、一村一品プロジェクトで開発された地元の伝統・資源を生かし地元の女性たちなどの生計向上に資する産品の紹介や実際に生産している様子などが詳しく紹介されました。

講義後の質疑応答では、タジキスタンで現在建設されている新規の大型水力発電所と気候変動対策との関係について（雪解け水が気候変動の影響で増えているとのことだが、新水力発電所は雪解け水が増える前提で建設されているのか）、一村一品プロジェクトの持続性（若者に技術等がきちんと受け継がれていくのか）やキルギスの他産品と比較しての価格設定などについて履修生から質問がありました。

中央アジア地域と JICA 事業について解説する今井さん

キルギス一村一品プロジェクトについて
紹介するシュクロナさん

【国際協力事業に従事する外部講師を招き、学内公開講座 SDGs セミナーとして実施】
※詳細は、「Ⅲ. 2. 2.1 持続可能な開発目標（SDGs）セミナー」を参照。

- 第 46 回 SDGs セミナー「モザンビーク国新しい学校教育制度に対応したカリキュラム普及プロジェクト–JICA による開発途上国の現場での具体的な取り組み–」
- 第 47 回 SDGs セミナー「平和と開発－JICA のミンダナオ和平支援－」

【ALH 概要】

- テーマ：「多文化共生」（書籍購読・映像視聴とディスカッション）
- 日　時：2024 年 12 月 4 日（水）～12 月 11 日（水）
- 内　容：多文化共生に関する書籍・映像のいずれかを選択し講読・視聴後、内容と所感を 5 分程度のプレゼンテーションにまとめて提出させ、授業内で発表・ディスカッションを実施。

1.3　NPO 入門

全学共通科目「NPO 入門」において、①NPO の活動理念や特徴を知り、その存在が社会に与えている影響を理解すること、②NPO の役割やその背景に潜む社会問題について、自らの考えを自分自身の言葉で述べることができるようになること、③NPO による社会問題解決の方法を、グループワーク（事業計画書の作成）を通して学び、提案力、行動力を身につけること、④授業で学び得た知識を、履修生自身の実践や社会貢献活動に繋げることを到達目標に、全 15 回の授業を行った。NPO の定義と全体像、海外と国内における NPO の位置づけ、NPO の行政・企業との協働等 NPO を巡る諸相を多角的に取り上げると同時に、ゲスト講師からお話を伺う機会を設けた。また、現代の社会問題と対応策についてグループワークを行い、架空の NPO の事業計画に関する発表を行った。

【ゲスト講師による講義　概要】

- テーマ：「心の安心安全基地とそこで働く人」
- 日　時：2024 年 6 月 3 日（月）13:20～14:50
- 講　師：中島彩乃 氏（認定特定非営利活動法人カタリバ職員）

※第 41 回持続可能な開発目標（SDGs）セミナーとして実施。

■　テーマ：「ちいさな声に耳をすます世界を―“よりそうとは何か”を問い続ける―」
■　日　時：2024 年 6 月 10 日（月）13:20～14:50
■　講　師：石川歩 氏（任意団体 comarch 理事／対話の場“あわいろ”主宰）
※第 42 回持続可能な開発目標（SDGs）セミナーとして実施。

1.4　NPO インターンシップ（実習）

文理融合リベラルアーツ（LA）科目「生活世界の安全保障 23　NPO インターンシップ（実習）」において、実際に NPO の活動に参加することにより、NPO の現状や役割、抱えている課題等を具体的に学んだ。今年度の履修生は、NPO セブンスピリット、hiro あおぞらプロジェクにてそれぞれ実習を行い、第 1 回目標管理シート、第 2 回目標管理シート、実習日誌、報告書を作成しながらその体験を言語化した。12 月 9 日（月）には報告会を実施した。

1.5　国際共生社会論実習・国際共生社会論フィールド実習

※詳細は、「2025 年 1 月　お茶の水女子大学グローバル協力センター　令和 6（2024）年度「国際共生社会論実習」「国際共生社会論フィールド実習」スタディツアー（ブータン、カンボジア）実施報告書」を参照。同報告書はグローバル協力センターのウェブサイトに掲載（全文ダウンロード可能）。

全学共通科目「国際共生社会論実習」及び共通科目（大学院博士前期課程）「国際共生社会論フィールド実習」において、①事前学習、②現地調査、③事後学習を通して、貧困、ジェンダー、地域間格差等のグローバルな課題についての理解を深めた（「～フィールド実習」の履修生はなし）。

具体的には、①事前学習において、資料の購読・発表、外部有識者による講演等を通して訪問国の歴史・政治経済・社会等に関する理解を深めるとともに、履修生各自が興味関心・問題意識に則した研究課題を設定し現地調査の計画を策定した。②現地調査は 2024 年 8 月 20 日～28 日（合計 9 日間、現地滞在 7 泊 8 日）にかけてブータン、2024 年 9 月 20～27 日（合計 8 日間、現地滞在 7 泊 8 日）にかけてカンボジアで行い、各自の研究課題に関連する諸機関の訪問・見学、都市部・農村部に暮らす人々へのインタビュー等を行うと同時に、その国に根づく文化・価値観・生活様式に触れ、異文化への、もしくは開発途上国への自分なりの対峙の仕方を模索した。帰国後は、③事後学習を通して現地調査の内容を振り返り、研究課題に分析・考察を加え報告書を作成するとともに、徽音祭（大学祭）での発表を行った。

本年度の履修生はカンボジア４名･ブータン５名で計９名､内訳はカンボジアが学部１年１名、２年２名、４年１名、ブータンが学部１年３名、２年１名、３年１名であった。現地調査の引率は小田グローバル協力センター副センター長と平山同センター講師が行った。

【現地調査スケジュール】ブータン

No.	月日	主な活動内容	宿泊地
0	8月19日（月）	・ 羽田空港集合	―
1	8月20日 （火）	・ 羽田空港出発 ・ バンコク・スワンナプーム空港到着 ・ パロ空港到着 ・ ティンプー市内散策／各自の研究活動（インタビュー等）	ティンプー
2	8月21日 （水）	・ キリスト教の教会訪問 ・ JICA ブータン事務所訪問 ・ JICA ブータン事務所ナショナル・スタッフの方々へインタビュー ・ ブータン日本語学校訪問 ・ ブータン日本語学校の学生と交流 ・ ティンプー市内散策／各自の研究活動（インタビュー等）	ティンプー
3	8月22日 （木）	・ 私立幼稚園・小学校訪問 ・ 織物博物館訪問 ・ 教育・技能開発省教育局カリキュラム課職員へインタビュー ・ 伝統技芸院訪問 ・ 国立図書館訪問 ・ ヒンドゥー寺院訪問 ・ 公立高校校長、教育・技能開発省職員のかたと懇談	ティンプー
4	8月23日 （金）	・ 公立小学校訪問 ・ 農家ホームステイ／ホストファミリーと交流	ハ
5	8月24日 （土）	・ 農家の仕事の手伝い ・ ラカン・カルポ（寺院）、ハ・ゾン訪問 ・ JICA 海外協力隊のかたと懇談 ・ ハ市内散策／各自の研究活動（インタビュー等） ・ 農家ホームステイ／ホストファミリーと交流	ハ
6	8月25日 （日）	・ ドゥンツェ・ラカン、キチュ・ラカン（寺院）訪問 ・ パロ市内散策／各自の研究活動（インタビュー等）	パロ
7	8月26日 （月）	・ タクツァン僧院訪問 ・ JICA 海外協力隊の方と懇談	パロ
8	8月27日 （火）	・ 公立幼稚園訪問 ・ パロ・ゾン訪問 ・ パロ空港出発 ・ バンコク・スワンナプーム空港到着	機内
9	8月28日 （水）	・ 羽田空港到着・解散	―

【現地調査スケジュール】カンボジア

No.	月日	主な活動内容	宿泊地
0	9月19日（木）	・ 羽田空港集合	―
1	9月20日 （金）	・ 羽田空港出発 ・ バンコク・スワンナプーム空港到着 ・ プノンペン空港到着 ・ Wonderfy（株）カンボジア法人経営の私立幼稚園、Wonderfy が普及する教育アプリ「Think Think!」を導入する公立小学校・幼稚園視察・インタビュー ・ Wonderfy カンボジア法人代表・幼稚園園長との懇談	プノンペン

2	9月21日 （土）	・　トゥール・スレン虐殺博物館・王宮視察 ・　プノンペン → シェムリアップ移動	シェムリアップ
3	9月22日 （日）	・　アンコール・ワット寺院、タ・プローム寺院視察 ・　トンレサップ湖（水上生活者）視察 ・　市場視察	シェムリアップ
4	9月23日 （月）	・　NPO 法人 SALASUSU 工房視察・工房で働く女性へのインタビュー・家庭訪問 ・　SALASUSU 日本人スタッフとの懇談	シェムリアップ
5	9月24日 （火）	・　シェムリアップ → タケオ移動 ・　（株）エコロギー社訪問・日本人スタッフ・現地スタッフへのインタビュー ・　エコロギー社日本人スタッフとの懇談	タケオ
6	9月25日 （水）	・　エコロギー社と協力するコオロギ養殖農家訪問・インタビュー ・　タケオ → プノンペン移動 ・　市内視察（市内の民家など）	プノンペン
7	9月26日 （木）	・　カンボジア日本人材開発センター（CJCC）訪問・学生とのインタビュー・交流 ・　JICA カンボジア事務所訪問・現地スタッフへのインタビュー ・　市内視察（市場・フランス統治時代の街並みなど）	プノンペン
8	9月27日 （金）	・　プノンペン空港出発 ・　バンコク・スワンナプーム空港到着 ・　羽田空港到着・解散	―

【履修生の所感（抜粋）】

（ブータン現地調査に参加した履修生）

- 文献調査だけでなく実際に自分で体験することで得られる情報があった。一方で、インタビューの仕方にも工夫が必要で、実際の状況や本音を聞くことの難しさを実感した。質問の仕方によって答えを誘導してしまったり、抽象的な質問で建前の様なことしか聞くことが出来なかったり、英語力の低さ故に知りたい情報を得ることが出来なかったりもしたが、感情や考えだけでなく実際にどのようなことを行っているのかを聞くことで実態を理解できることを知ることも出来た。
- 今回のスタディツアーは私にとって非常に有意義であり、特に初めての海外経験として大きな刺激を受けた。不安も多かったが頼もしいガイドやチームメンバー、何よりも温かく迎えてくれたブータンの方々のおかげで充実したものにすることができた。また、研究プロセスを学び実際に体験できたことは非常に有益であった。テーマ設定では自分の興味・関心について深く考えどのように具体的な研究テーマに落とし込むかを模索し、調査では自分の考えていることを言語化し、人にインタビューすることの難しさを実感した。現地では英語力の不足も痛感し、現地の人々との円滑で深層的なコミュニケーションが取れなかったことは非常に悔やまれた。しかし、ブータンでの経験を通じて 日本の文化や生活が持つ魅力を改めて感じ、日本への愛着が一層深まったことも大きな収穫である。今後もこの経験を活かしさらに成長していきたい。
- 元々チベット仏教に興味があったため、今回のスタディツアーに参加できたことを大変嬉しく思う。また、調査をしてさまざまな人の意見を聞いていく中で、自分自身の宗教観がブータンの人ほど確立されていないことに気がついた。宗教とは何をもたらすのか、自分の考え

をしっかりと明確化する必要があるように思った。さらに、ブータンにはボン教と呼ばれる民族宗教も現代に受け継がれており、その影響は今でも残っていると現地ガイドの方から聞くことができたが、事前準備不足で知識がなく十分な調査をすることができなかった。ブータンの宗教について理解するためには不可欠な側面だと思うので、今後はその方面からも調査をしていきたい。

- 私は今回の現地調査で、現地に行かなければ得ることのできない情報を得たり経験をたくさんしたりすることを目標に参加した。その中で、インタビュー活動はもちろん、実際の小学校や ECCD センターを見学し、子どもたちと遊ぶことによってさまざまな経験を得ることができた。その中で感じたことは、子どもたちには夢や希望がたくさんつまっているということだ。私たちのような知らない外国人にもたくさん話しかけてくれ、狭い教室や校舎の中を存分に駆け回っている姿が印象に残っている。彼らのもつ夢や希望を諦めさせることがないような教育が必要だと感じたし、私自身も子どもたちの夢を一緒にかなえることができるような教員になりたいと強く思った。私が一つの目標としている青年海外協力隊として実際に働いている方からもお話を聞くことができ、曇り気味だった私の将来へ一筋の光が差した気がした。決して恵まれているとは言えない環境で暮らしている子どもたちの支えになりたい、と強く思った 8 泊 9 日だった。
- ECCD センター訪問で出会った子どもたちは、突然やってきた私たちにも警戒せず、抱きついたり膝の上に乗ってきたりして、ブータンの子どもたちの人懐こさに驚いた。調査中は現地の子どもたちと一緒に遊び、そのたびに幸せな気持ちになった。子どもには、喜びや幸せを与えてくれる不思議な力があるのは世界共通であり、私はそんな存在のために生きる人でありたいと、改めて心から思った。渡航前はチベット仏教が根付く雰囲気を想像できなかったが、ガイドやお坊さんの話を通じてチベット仏教の価値観を少しずつ理解した。カラフルな旗やマニ車、数珠を持って歩く人々の姿から、信仰が日常に根付いていることを感じ、現地を訪れることの重要性を改めて実感した。また、王家の写真が街中や家々に飾られており、どの場面にもチベット仏教と王家の息づかいが感じられた。

（カンボジア現地調査に参加した履修生）

- カンボジアで特徴的な家族・親戚のつながりが形成される背景には、カンボジアが抱える経済的、社会的な課題や悲惨な過去の記憶がある。しかし、それらの困難を抱えながらも情熱をもって生きる姿、無条件に見せてくれた無邪気な笑顔を私は忘れることができない。カンボジアの人々にとって、強くて温かい家族・親戚の絆が生きる原動力だった。物質的に豊かな国、いわゆる先進国に住んでいる私たちが、途上国から学ぶべきことは沢山ある。私は、人のつながりの大切さを改めて学ぶことができた。今回の実習で得られた気づきを忘れることなく今後の人生に生かしていきたい。
- 今回調査に参加してカンボジアで IT 分野の発展が急速に進んでいることを感じた。一方で工業製品は輸入頼りという話を聞いて、ハード面よりもソフト面が先に発展しているのが日本との違いだなと感じた。そして強く思ったのは日本の技術は素晴らしいということだ。今まで当たり前に感じていたことが素晴らしい、と感じ、自分の専攻である理系分野の学問に

より興味を持つきっかけとなった。

- 勉強ができて飛び級をした学生、自身が教育を充分に受けられず子どもに宿題を教えるのが難しい母親、大卒の人、勉強ができず先生が怖かったために中退した人など、様々な教育状況の人に出会った。カンボジア国内でも、それぞれ見える景色は違っていて、それぞれに違った苦労があると感じた。
- 同じインタビュー内容を、十数人もの人に直接質問する機会はとても貴重で、学びが多かった。特に、カンボジアという、これまであまり知らなかった文化圏で、「人」に関する調査をしたことで、カンボジアの「人」についてより詳しく知ることができ、とても興味深かった。ただ、インタビュー項目を適宜再構成しながら調査を進めるのに、はじめは戸惑いもあった。本当に欲しいデータを集められているのか、データをうまく分析することができるのかを不安に感じていた。しかし、日々インタビューをしたときのことを振り返り、根気よく調査を進められたことで、最終的には、傾向を見出すことができて、やりがいがあった。今回一番重要だったのが、カンボジアのことをよく知っている現地ガイドさんの存在だ。通訳をしてもらっただけではなく、現地の価値観や事実などの補足を適宜入れてもらったり、自身の調査不足である点を教えてもらったりしたことで、より混乱のないインタビューをすることができた。また、インタビューを受ける人の負担のことを考えても、現地の人を通す安心感は大きく、ガイドさんあって成り立つ調査であったと実感する。

【写真】

【ブータン】

ブータン到着後の履修生たち

キリスト教の教会でのインタビュー

JICA ブータン事務所でのインタビュー

ブータン日本語学校での交流会

私立小学校でのインタビュー

伝統技芸院の学生へのインタビュー

ヒンドゥー寺院でのインタビュー

公立小学校訪問

ホームステイ先の農家

ホームステイ先での交流

アーチェリー（国技）見学

ホームステイ先のお父さん・お母さんと

標高 3,800m の峠

タクツァン僧院訪問

公立幼稚園でのインタビュー

パロ・ゾン（県庁兼僧院）訪問

【カンボジア】

私立幼稚園でのインタビュー

Wonderfy の教育アプリ導入現場（公立小学校）

公立小学校訪問

王宮

タ・プローム寺院

アンコール・ワット寺院

トンレサップ湖視察の様子

トンレサップ湖の水上生活者住居

SALASUSU 工房見学

SALASUSU で働く女性の家庭訪問

英語でのインタビューの様子

エコロギー社のスタッフへのインタビュー

タケオ市場視察

コオロギ養殖農家でのインタビュー

カンボジア日本人材開発センターでのインタビュー・交流

JICA カンボジア事務所でのインタビュー

２．グローバル協力センター主催セミナー

2.1　持続可能な開発目標（SDGs）セミナー

本セミナーは、「グローバル社会における平和構築のための大学間ネットワークの創成―女性の役割を見据えた知の国際連携―」事業の一環として 2017 年度より実施している。今年度は、SDGs 推進研究所の後援のもと、以下の通り計 10 回開催した（参加者：のべ合計 210 名）。また各回の実施報告をグローバル協力センターのホームページに掲載した。

（1）第 38 回持続可能な開発目標（SDGs）セミナー

【概要】

■　テーマ：紛争地域の現場で起こっていることを伝える
■　日　時：2024 年 4 月 22 日（月）16:40～18:10
■　講　師：ジャーナリスト　堀　潤　氏
■　参加人数：25 名

【参加学生による報告】

2024 年 4 月 22 日国際交流留学生プラザ 2 階多目的ホールにて、ジャーナリストの堀潤さんをお招きし、第 38 回持続可能な開発目標（SDGs）セミナー「紛争地域の現場で起こっていることを伝える」が開催されました。

セミナーでは、堀さんが代表を務める市民ニュースサイト「8bitNews」やインターナルコミュニケーションの実践に焦点を当てた「わたしをことばにする研究所」のご紹介とともに、ジャーナリズムに対する堀さんご自身の哲学を語っていただきました。さらに、セミナー終盤の質疑応答の時間には参加者からのたくさんの質問があり、それら一つひとつに丁寧にお答えいただきました。

また、堀さんご自身で監督・出演・制作を行った映画『わたしは分断を許さない』の映像の一部を視聴しました。堀さんが長年取材をされる中で浮かび上がってきたのが、どうしようもない分断、大きい分断が生まれるという構造であったとおっしゃいます。映画の中に映るのは、福島や香港、シリア、パレスチナといった土地に生きる/生きた人々です。取材を通して当事者の方々の生の声を丁寧に掬い上げていく堀さんの姿が見受けられました。

ここ数年の間に、「分断」というたった 2 文字がもつ意味はますます重層性を増したように思います。この言葉が、政治的・文化的な軋轢や思想の対立、特定の人々の孤立の意味を含む言葉として世界を形容するようになりました。そこではときに、私と同じこの世界に生きる誰かの血や涙や叫びが、強大なインパクトとともに語られ、ソーシャルメディアやジャーナリズムの海に瞬く間に広がっていきます。では、一人ひとりが言葉の担い手となる今日の時代に、私たちはどのようにして「分断」のその先の未来を信じることができるのでしょうか。堀さんは、「分断を生み

出すのは『誰』か」という問いを立てた上で、大きい主語よりも小さい主語を使うことが大切であるとおっしゃいました。例えば、震災後の報道において「被災地では多くの人が苦しんでいる」と語られることがありますが、堀さんは、それは誤ったレッテル貼りであると指摘します。「被災者」といった大きい主語で語ることはときに線引きをする装置になることがあります。そこで、個人名の主語まで落とし込み、一人ひとりの語りに焦点を当てることができれば、分断を防ぐことができるとおっしゃいました。

不条理な現実や分かり合えない他者との対立、災禍の記憶を「分断」という漢字 2 文字で表現するのはとても簡単です。しかし、この言葉を使用して出来事を形容すること自体に当事者の方々に向けてある種の暴力性が伴うこと、そして当事者一人ひとりの心の内にある言葉にならない感情や想いこそが真実であることを何度も思い返したいと感じます。

（文教育学部人文科学科 3 年　平子七海）

多くの写真と映像でお話くださる堀潤さん

会場からは多くの質問が出された

（2）第 39 回持続可能な開発目標（SDGs）セミナー

【概要】

- テーマ：トイレを通じて 1 億人の衛生環境の改善を目指す～SATO が取り組むグローバルな衛生課題の解決
- 日　時：2024 年 5 月 8 日（水）16:40～18:10
- 講　師：株式会社 LIXIL　SATO 事業部　下條彰仁氏
- 参加人数：約 20 名

【参加学生による報告】

5 月 8 日（水曜日）16 時 40 分～18 時 10 分、お茶の水女子大学の国際交流留学生プラザ 2 階の多目的ホールにて、第 39 回持続可能な開発目標（SDGs）セミナーが開かれました。今回のセミナーでは、日本を代表する住宅設備メーカー株式会社 LIXIL の SATO 事業部から下條彰仁さんを講師にお招きし、「トイレを通じて 1 億人の衛生環境の改善を目指す～SATO が取り組

むグローバルな衛生課題の解決」というテーマでお話を伺いました。今回の講演会を通して、下條さん自身のご経験や LIXIL の取り組みから保健衛生の重要性を考え直すことができたように思います。

LIXIL はその存在意義として「世界中の誰もが願う、豊かで快適な住まいの実現」を掲げ、キッチンやお風呂、水栓、窓などの商材を中心に、国内外で多彩なブランドを展開する大手住宅設備メーカーです。そんな LIXIL は、SDGs に関する取り組みにも力を入れています。その代表的な例が、「SATO」です。「SATO」とは、開発途上国向けに開発された簡易式トイレシステムのことです。「SATO」は、低価格で節水や衛生面の配慮が叶えられるだけではなく、コンパクトな設計で取り付けも簡単な製品で、特に安全で衛生的なトイレが不足するアジアやアフリカの農村部などでの利用を想定して、開発されました。「SATO」事業はバングラデシュから始まり、各地の文化や生活様式に対応できるよう製品展開を拡充しながら、今では世界中で 45 ヶ国、約 750 万台が出荷され、4,500 万人の衛生課題を改善しています。

現状世界には、安全に管理・整備されたトイレを利用できない人が 35 億人、屋外で排泄をしている人が 4.1 億人、自宅で手洗い設備を利用できない人が 20 億人、不衛生な水と劣悪な衛生環境が起因する疾患で命を落とす 5 歳未満の子どもが 1 日当たり 1000 人いると言われています。生活環境にトイレがあっても管理が行き届いておらず、悪臭や病原菌を媒介する虫が蔓延していたり、トイレが使える状態ではないために道端の草むらなどで用を足したりするという事例は依然として多くあります。特に学校のトイレなどがこのような状態だと、衛生環境が原因でトイレに行きたくても行けずに子どもが病気になったり、トイレという場面においてプライバシーが守られていないことで女性が性被害に遭ったりと、衛生環境の未整備は様々な問題を引き起こします。

下條さんも実際にフィリピンを訪問したときに、目の前で幼い女の子が野外排便をしているところを目撃したと言います。下條さんが訪問したフィリピンは、国民の平均年齢が 24 歳と若く人口が多い国です。下條さんは、そのような人口が多く子どもの割合が高い国の衛生環境を整備することができれば、人々の寿命が延び、それに伴い国家としてのさらなる発展も望めるのではないかと、改めて SATO 事業の意義、そして世界の衛生環境の底上げの重要性を認識したと語ります。

しかし、同時に下條さんは現地で SATO 製品を売ることの難しさを教えてくれました。現地の方々にとっては、野外排泄が日常的でトイレで用を足すという習慣がありません。そのため、SATO 製品の魅力を伝えることに苦労するそうです。確かに、私たち日本人にとってはトイレといえば建物に備え付けられている大きな水洗設備を思い浮かべるため、安価で簡単に備え付けられる SATO の魅力を理解することは容易なことです。しかし、現地の方にとってのトイレは私たちが思い浮かべるものとは大きく異なる上に、保健衛生の重要性の理解度も浅いため、SATO の特長を魅力と捉えることは難しいでしょう。そのため SATO を開発途上国で普及させるため

にはまず、根本的に保健衛生に関する正しい知識を教育するところから始めなければならないと言います。しかし最近では国際機関や政府機関との協力で、住民たちに対する教育活動に力を入れており、少しずつ住民の理解も進んでいると言います。

下條さんは最後に、価値観の違いを超えて SATO の魅力を伝えることは大きな苦労が伴うが、その魅力が伝わり実際に設置が叶ったときの達成感は何にもかえられないと語ってくれました。私も実際にフィリピンの田舎町でホームステイをした経験があり、その際に向こうのトイレなど水回りの環境の劣悪さに衝撃を受けました。しかし、それ以上に彼らがその環境に何の疑問ももっていないことにさらに驚かされたのを覚えています。保健衛生に対する価値観の違いはどうすれば埋まるのだろうと疑問に思っていたところ、今回の講演を受けて、教育面から地道にアプローチすることの重要性を認識することができました。根本的に価値観を変える取り組みは非常に時間がかかる上に困難も多いとは思いますが、様々なアクターを巻き込んで人々の生活を改善するために奮闘する日本人がいるということに非常にワクワク感を覚えました。私も将来、SATO 事業のような野心的な事業に関わりたいと強く思いました。この度はお忙しい中、貴重なお話をありがとうございました。

（文教育学部言語文化学科 3 年　北澤希帆）

ペットボトルを活用する手洗いステーション「SATO Tap」について実物をもとに説明をする下條さん

実際に「SATO Tap」を手に取りその特徴を確かめる参加者

（3）第 40 回持続可能な開発目標（SDGs）セミナー

【概要】

- テーマ：世界の栄養問題：地球も人々も健康になる食事の実現に向けて
- 日　時：2024 年 5 月 15 日（水）16:40～18:10
- 講　師：独立行政法人国際協力機構（JICA）国際協力専門員　野村真利香氏
- 参加人数：約 30 名

【参加学生による報告】

5 月 15 日、独立行政法人国際協力機構（JICA）国際協力専門員の野村真利香さんをお招き

し、第 40 回持続可能な開発目標（SDGs）セミナー「世界の栄養問題：地球も人々も健康になる食事の実現に向けて」が開催されました。栄養不良とは何かという基本的な知識から、低中所得国の課題と取り組み、環境に配慮した食事の最新報告まで、広く深い学びを得ることができました。

始めに見た、重度急性栄養不良になってしまったイエメンの 7 ヶ月の女の子の写真はとても衝撃的でした。母乳をあげていたお母さんが暗い時間に水くみに行き、崖から転落して亡くなってしまったそうです。このことから、栄養問題は十分な栄養を与えるだけで解決できるものではなく、女性が毎日の水くみや暗い時間の移動をしなければならないといった、背景にある複雑で根本的な課題にも目を向けなければならないと感じました。

次に、栄養不良とは何かについて学びました。SDGs のゴール 2 ターゲット 2 には、「2030 年までにあらゆる形態の栄養不良を終わらせる」とあります。この「栄養不良」とはエネルギーや栄養を摂取する際の不足、過剰、不均衡のことで、栄養が足りない低栄養と栄養を取り過ぎた過栄養の両方が含まれます。さらに低栄養の中にも様々な症状や原因があることが分かりました。

最も興味深かったのは、ソロモン諸島の「ヘルシービレッジ推進プロジェクト」についてのお話です。このプロジェクトは、健康推進ボランティアを育成し、低栄養と過栄養、マラリア、水と衛生の問題の解決を目指すものです。ソロモン諸島では新鮮な野菜などよりも保存の利くツナ缶やカップ麺、米やお菓子が普及しており、飲み物は水より安い炭酸飲料が好まれているそうです。そこでまず、野菜を食事に取り入れることができるよう、家庭菜園の支援を行いました。こうした取り組みを経て、子どもの野菜摂取量が増加したとのことです。そして食べた後に食品の袋や缶を放置することでゴミが川にたまりマラリア蚊の発生要因となっていたため、清掃活動も行いました。食べることに関する行為も改善することが、他の衛生問題の解決にもつながるのが驚きでした。健康的な食事ができるようにするための根本的な施策を考える点や、現地の人が健康の大切さを学び自ら主体的に活動し現地で広めることができるようにする点が、持続可能な取り組みにつながると感じました。

最後に、地球環境に配慮しつつ健康を守る食事をする「プラネタリーヘルス」の考え方を学びました。地域により差はあるものの肉類や卵、じゃがいもなどの消費量は地球に悪影響を及ぼしうる生産量の目安をはるかに超えていることが、資料のグラフから分かりました。特に先進国で赤身肉の摂取を減らし野菜や豆類等の摂取を増やした食事に改める必要があるのは環境のためでもありますが、私たちが将来も健康を保つことができるようにするためなのだと感じました。

今回のお話を聞き、食べ物の不足や偏りの背景にさらに社会的な問題があり、根本的な課題に対処すべきであること、栄養問題は途上国だけではなく先進国も含めた地球全体の問題であることが分かりました。食は人間に身近で環境や健康に直結する重要なもので、生活者ひとりひとりが意識と行動を変えていく必要があると感じました。参加者からの多くの質問にも丁寧にお答え

くださり、学びの多い充実したセミナーとなりました。

（生活科学部人間生活学科生活文化学講座 3 年　山田有紗）

世界の栄養問題についてご自身の
経験を踏まえお話する野村さん

活発な質疑応答の様子

（4）第 41 回持続可能な開発目標（SDGs）セミナー

【概要】

- テーマ：心の安心安全基地とそこで働く人
- 日　時：2024 年 6 月 3 日（月）13:20～14:50
- 講　師：認定特定非営利活動法人カタリバ職員　中島彩乃 氏
- 参加人数：約 20 名

【参加学生による報告】

6 月 3 日（月曜日）、「第 41 回 SDGs セミナー」として認定 NPO 法人カタリバで働かれている中島彩乃さんからご講演いただきました。講演の中では、カタリバのコンセプトやカタリバの放課後支援施設の概要だけでなく、ご本人がなぜカタリバに転職され、現在どのような気持ちで勤めていらっしゃるのか、また現在募集されているインターンやボランティアの詳細についてのお話をお聞きしました。

まず、カタリバの中のアダチベースという場所についてのお話をしていただきました。アダチベースは足立区に住む家庭環境に問題を抱える中高生に対して第三の拠点を提供する空間です。そのお話の中で「ナナメの関係」を団体の強みとして掲げていることが印象に残りました。保護者や教師のような縦の関係でもなく、友人のような横の関係でもないからこそ、状況に応じた子どもに対する適切な支援を行えるという点がとても良いと思いました。カタリバでは「どんな関係に生まれ育っても、未来を創り出す力を育める社会」を実現するために「意欲と創造性を全ての 10 代へ」という使命を掲げています。変化する時代であり、予測不可能な未来が待ち受けてい

る私たちは指示を待つだけではなく自分で世の中を作り上げられるように成長していく必要があります。カタリバはそんな必要とされる子どもの自主性を高めてくれる場所であると感じました。

カタリバの具体的な支援についてのお話の中では、子どもの自主性を尊重している印象を強く感じました。一方的に学習面をサポートしてあげよう、話を聞いてあげようという姿勢ではなく、子どもが自主性をもって様々なことに意欲的、創造的に取り組めるようにするためのきっかけを作ろうという姿勢がすごく良いと思いました。学習するスペースに関しても子どもの意見を反映し、過ごしやすい環境づくりをなさっているのが印象的でした。一人一人に対する丁寧な関わり方やコロナウイルス感染拡大下において迅速に柔軟に対応する力というのも NPO だからこそできるのだと思いました。

後半は、なぜ中島さんがこの仕事をしているのかについてお話をお聞きしました。「学校や家庭でうまくいかなければ人生終わりってことではない」という言葉には私も勇気づけられました。自分を受け入れてくれる安心できる場所を作ることは悩んでいる中高生にとって大きな助けになると思います。また、人材系の会社から転職なさってカタリバで働くことを決めたというご自身のキャリアについてのお話も伺いました。「なんとなく生きているより好きなことをやって生きた方が良いのではないか」と考えて踏み切れたとおっしゃっていて、すごく今の自分に刺さりました。私も自分が今何をしたいのかを考えて、やりたくないのにだらだらと続けてきてしまっていることを終わりにしたいと思いました。もっと自分のキャリアのために様々な経験を積んでいきたいです。NPO で実際に活躍している方の経験をお聞きすることができて大変貴重な経験になりました。

（文教育学部人文科学科 2 年　塩野愛菜）

講師の中島氏

セミナーの様子

（５）第 42 回持続可能な開発目標（SDGs）セミナー

【概要】

■　テーマ：ちいさな声に耳をすます世界を―“よりそうとは何か”を問い続ける―

■　日　時：2024 年 6 月 10 日（月）13:20～14:50
■　講　師：任意団体 comarch 理事／対話の場“あわいろ”主宰　石川歩 氏
■　参加人数：約 20 名

【参加学生による報告】

2024 年 6 月 10 日（月曜日）、対話の場「あわいろ」を主宰する石川歩さんをお招きし、「ちいさな声に耳をすます世界を―“よりそうとは何か”を問い続ける―」をテーマにご講演いただきました。「あわいろ」をはじめとした石川さんのご活動、そして自分自身や周りの人の声とは何なのか、寄り添うことの難しさとは何なのかということに関してお話しいただき、また、参加者からの疑問・質問への石川さんの回答をいただきました。

講演の冒頭では、「いまのあなたの心の声はどんな声ですか？」という問いとともに、紙にクレヨンで心の色を表してみるというワークショップが行われました。これは、言葉では表現できない感情を色によって表現しようというものです。参加者それぞれが描いたものを見合い、皆違って当たり前だということが再確認できました。

石川さんは、例えば「悲しい」という感情は、その裏にその人にとって大切なものがあるということを教えてくれるため、人の感情は負の感情も含めすべて大切にしたいとお話しになりました。負の感情は、自分への気づきにとって重要な役割を担っていたのだと感じました。

今回のセミナーのタイトルにもある「寄り添うとは何か」についても触れられました。ここでは、「相手への願い≠相手の願い」だという話がありました。相手に対し、幸せになってほしいという思いであっても、それが相手にとって幸せかは分かりません。ただし、相手に幸せになってほしいというその思いはとても尊いものです。寄り添うことは簡単なものではないと痛感し、そのうえで相手への温かい想いは大切にしようと思いました。それに加え石川さんは、「本質的な支援とは、自分の価値観を押し付けないことなのではないか」と指摘されました。これは、寄り添うことに限らず、人と関わるうえで意識すべき点であると感じました。

「あわいろ」の活動は、「一人ひとりがありたいあり方に寄り添う、その人がその人らしく居られる居場所」をテーマにしているそうです。お話の中で、石川さんは「話すときには沈黙も大切にしている」とおっしゃっていました。それは、沈黙はその人がその人の言葉を探している時間だからです。私は、沈黙は少し気まずい時間としか捉えたことがなかったのですが、このお話を聞いて、その人をより理解をするためにも大切な時間なのだと解釈が変わりました。ゴールを目指す場所や提供する場ではなく、ただ心を紡いでいく、互いの心が解れていく。自分の身近にあるようでない空間で、今回お話を聞いただけで行ったこともないのにどこか安心感を覚えました。

石川さんの、任意団体 comarch や認定 NPO 法人豊島子ども WAKUWAKU ネットワークなどでの活動について、そしてボランティアを始めた経緯についてもお話しいただきました。「ボラン

ティアは共に生きること、100%誰かのためでも自分のためでもない」という言葉が印象的でした。私たちは単に問題解決のために動いているのではなく、答えのない心の奥を大切にしていたのだと改めて感じました。そして、答えがないからこそ、自分なりに問い続けてみようと思います。石川さんが実際に体験し、時に苦悩を味わったからこそ紡ぎだされた言葉で、どの話題のときも、ハッと新たに気づきがあったり、自分の心のモヤモヤが軽くなったり、お話の中に自分にとってのヒントがたくさん散りばめられていました。石川さんの優しさや謙虚さが滲み出てくる、そして想いが伝わってくる講演でした。素敵なご講演をありがとうございました。

（生活科学部心理学科 1 年　曾根有利）

冒頭のワークショップ

セミナーの様子

（6）第 43 回持続可能な開発目標（SDGs）セミナー

【概要】

- テーマ：国際協力最前線：カンボジアでの教育スタートアップの取り組み
- 日　時：2024 年 6 月 19 日（水）10：40～12:10
- 講　師：ワンダーファイ株式会社カンボジア法人 CEO　渡邉大貴氏
- 参加人数：約 20 名

【参加学生による報告】

2024 年 6 月 19 日（水曜日）、ワンダーファイ株式会社カンボジア法人 CEO の渡邉大貴さんをお招きし、第 43 回持続可能な開発目標（SDGs）セミナー「国際協力最前線：カンボジアでの教育スタートアップの取り組み」がオンラインで開催されました。はじめにワンダーファイ株式会社とカンボジアでの教育事業について、その後、ご自身のキャリアについてお話いただきました。

ワンダーファイ株式会社は、花まる学習会を母体に 2014 年に設立され、世界中の子どもが本来もっている知的なワクワクを生み出し、社会に影響を与えることを使命として教材やコンテンツを開発・運営しています。そのコンテンツの 1 つに「シンクシンク」アプリがあり、世界 150 ヵ国で 300 万人もの人々が利用しており、子どもの属性や親の収入、学歴などに関係なく、偏差値、

IQ、非認知能力の向上に効果があることが分かっています。

カンボジアでは、ポル・ポト政権時に多くの人が虐殺され、教育システムが崩壊しました。その後、小学校の就学率はほぼ 100%にまで達するほどに大幅な改善が見られたものの、家庭や仕事の事情で中退率が高くなっています。また、OECD 加盟国を中心に実施される国際的な学力テストでは最下位となり、教育の質の向上も喫緊に取り組むべき課題です。そのような教育状況の中、シンクシンクなどワンダーファイのもつ教育的な知見は、カンボジアの抱える教育課題の解決に大いに期待され、カンボジア政府の全面的な協力のもと、渡邉さんは 2017 年からカンボジアでの事業に関わられています。

渡邉さんらワンダーファイ株式会社カンボジア法人は、まず、カンボジアの公立学校に「シンクシンク」を導入することから始め、現在はオンライン授業、塾などさまざまな事業を手がけています。特に興味深かったのが 2024 年から始まった幼児教育スタートアップの取り組みです。渡邉さんは、塾授業を進め、現地の子どもたちと関わっている中で、比較的裕福な家庭の子どもたちが、甘やかされて育ち、生活の自立ができていないこと、さらには母親も子育てについての知識がないことに気づいたと言います。そこで渡邉さんは、幼児教育のアプローチを根本的に変えていく必要があると考え、日系インターナショナル幼稚園を開設されました。日系インターナショナル幼稚園で学んだ子どもたち、先生たちが、その経験を生かしてカンボジアの未来を変えていくことが夢だ、と渡邉さんは語ります。私は、国際協力の現場において、現地の人々の生活をよく観察しながら、真のニーズに気づける力、多様な関係者と協働して、真のニーズに応えられる新たな制度や事業を自ら考えて創りだしていく力が大切だと感じました。国際協力の最前線で活躍される渡邉さんのお話を聞いて、国際協力の在り方について考えを深めることができたように思います。

キャリアについてのお話では、ご自身の人生を変えるきっかけとなった苦悩や出来事を「〇〇事件」と表し、楽しくお話していただきました。私は、渡邉さんの行動力に息をのむほど圧倒されました。その場その場で感じた気持ちを原動力にして行動し、他人の視点に左右されず、自分軸で生きる姿は本当にかっこよく、感銘を受けました。講演の中で、渡邉さんが何度も「ワクワク楽しんでやっている」と語っておられことが印象的でした。渡邉さんのように目の前の問題にポジティブに対処しながら、常にワクワク精神で様々なことにチャレンジしていきたいと思いました。

今回は、カンボジアで行われている教育事業を通して国際協力の在り方を学ぶとともに、実際に国際協力の最前線で活躍されている渡邉さんの生き方から、私自身が大切にしていきたい人生訓も得ることができました。私自身、この夏にカンボジアでのフィールドワークを予定しており、今回のお話で得られた知見を生かしていきたいと思います。

（文教育学部人文科学科 1 年　酒井友里）

ワンダーファイ株式会社カンボジア法人の概要を説明する渡邉さん

カンボジアでのバックパッカー時代の経験を語る渡邉さん

（７）第 44 回持続可能な開発目標（SDGs）セミナー

【概要】

■　テーマ：ブータンの開発課題と日本の国際協力

■　日　時：2024 年 7 月 10 日（水）13:20～14:50

■　講　師：JICA ブータン事務所企画調査員　須藤伸 氏

■　参加人数：約 30 名

【参加学生による報告】

7 月 10 日（水曜日）13 時 20 分～14 時 50 分、本学のグローバル協力センターが主催する第 44 回持続可能な開発目標（SDGs）セミナーが開かれました。今回のセミナーでは、JICA ブータン事務所企画調査員の須藤さんを講師にお招きし、ブータンの開発課題と日本の国際協力の現状について伺い、ブータンの発展について理解を深めました。

まず、ブータンの国柄についてお話を伺いました。チベット仏教が国に広く根付いており、建物や民族衣装などユニークな点が多いのも魅力です。また、ブータンは国民総幸福量(GNH)という国民全体の幸福度を示す指標を用いた開発指針を提唱しており、インタビューの手法を用いた GNH 調査の結果は、政策立案や予算配分にも利用されています。

次に、ブータンの現状や開発課題に関して、現地の人々の声も交えた多面的な視点から伺いました。ブータンは GDP の大幅な成長、貧困率の減少、平均寿命の増加など急速な成長を遂げています。現地の人も、特にインフラ整備によって移動時間が短縮されたことで生活水準の向上を実感しているようです。しかし課題もあり、その最たるものは都市と地方の格差の拡大だと言います。農村部は都市部に比べて貧困率が極度に高い状態になっているそうです。より良い経済機会、教育、医療環境を求めて農村から都市への移住が増加しており、都市では地価の高騰、地方では過疎化が進んでいます。しかし、最新の GNH 調査から読み取れる幸福度では、前回の調査に比べ全体は 3.3%、農村部も 5.6%上昇しましたが、都市部は 1.8%減少しており、都市に出た人が多くの困難に直面していることが読み取れます。また、この幸福度の変化はコロナの影響もあると

いいます。ブータン政府はコロナ対応として厳格なロックダウンと水際対策、迅速なワクチン接種を行っており、死者数は 21 名に抑えました。この対応が国際社会で高い評価を受ける一方で都市では深刻な経済の停滞をもたらし、若者の失業率をはね上げ、それに伴ってロックダウン後から若者の海外流失が後を絶たず、それがブータンの深刻な社会課題のひとつになっています。

最後に、日本のブータン協力についてお話を伺いました。日本は「農村と都市のバランスの取れた自立的かつ持続可能な国づくりの支援」を基本方針に掲げ、農業・インフラ整備・保健について様々な支援を行っています。特に日本製の橋はその高品質性に高い評価を受けており、今まで 26 の橋梁を整備しています。このように、日本からブータンへ国家間・国民間の友好関係の基盤となるような様々な支援が行われていることが分かりました。

今回の講義を踏まえて、GNH の理念に基づいた政策運営や急速な経済成長の一方で、都市と農村の格差や若者の海外流出などの課題が浮き彫りになり、数値だけでは測れない満足度や幸福度があることが分かりました。これからのブータンにどのような発展・支援が必要なのか深く考えさせられました。貴重なご講演ありがとうございました。

（共創工学部人間環境工学科 1 年　小山舞桜）

講師の須藤氏

セミナーの様子

（8）第 45 回持続可能な開発目標（SDGs）セミナー

【概要】

- テーマ： JICA 海外協力隊
- 日　時：2024 年 11 月 1 日（金）16:40～18:10
- 講　師：JICA 海外協力隊経験者　川口恵氏、公益社団法人青年海外協力協会（JOCA）　原浩治氏
- 参加人数：15 名

【実施報告】

11 月 1 日（金曜日）、グローバル協力センターは、JICA（独立行政法人国際協力機構）の協力を得て、公開講座「第 45 回 SDGs セミナー：JICA 海外協力隊セミナー」を開催しました（於：お茶の水女子大学国際交流留学生プラザ 2 階多目的ホール）。セミナーでは、カリブ海に浮かぶ島国・セントルシアで環境省に配属され、小・中学校での環境問題に関する授業や、中学校の校庭でコンポストを作成するなどの活動を行った JICA 海外協力隊経験者の川口恵さんの体験談や、公益社団法人青年海外協力協会（JOCA）の原浩治さんによる JICA 海外協力隊の概要説明などを行いました。

お茶の水女子大学の学生、そしてお茶の水女子大学が開発途上国の女子教育支援で連携をしている津田塾大学、東京女子大学の学生など、約 15 名の参加者は、原さんによる JICA 海外協力隊の概要説明や、協力隊に応募したきっかけ、現地での活動・生活の様子などについての川口さんのお話に熱心に聞き入っていました。後半は会場のイスを移動して川口さんを囲む座談会形式とし、川口さんと参加者の間では、リラックスした雰囲気で活発にやり取りが行われました。

参加者からは、「とても楽しく学びが多い時間でした。JICA 協力隊に参加することで世界が開けたとおっしゃっていたのが印象的で、周りの環境を変える大切さやチャレンジする大切さを改めて感じると共に、自分も挑戦してみたいという想いが大きくなりました。」「自分のキャリアについて考えるいい機会になりました。JICA 海外協力隊に参加したい気持ちがわいてきました。」といった感想が聞かれました。川口さんや原さんのお話を通じて、開発途上国の人々と生活し活動する JICA 海外協力隊に対する具体的なイメージがわき、参加してみたい、という意欲が高まったようです。

JOCA の原さんによる JICA 海外協力隊制度説明

カリブ海のセントルシアでの
海外協力隊体験談を語る川口さん

（9）第 46 回持続可能な開発目標（SDGs）セミナー

【概要】

- テーマ：モザンビーク国新しい学校教育制度に対応したカリキュラム普及プロジェクト
  –JICA による開発途上国の現場での具体的な取り組み–
- 日　時：2024 年 11 月 13 日（水）16:40～18:10

■　講　師：株式会社コーエイリサーチ＆コンサルティング主席コンサルタント　太田美穂氏
■　参加人数：約 20 名

【参加学生による報告】

2024 年 11 月 13 日（水曜日）、株式会社コーエイリサーチ＆コンサルティング主席コンサルタントの太田美穂さんを講師にお招きし、第 46 回 SDGs セミナー「モザンビーク国新しい学校教育制度に対応したカリキュラム普及プロジェクト–JICA による開発途上国の現場での具体的な取り組み–」が開催されました。はじめにこれまでに経験された JICA 教育協力について、その後モザンビーク国での教育支援プロジェクトにフォーカスして、活動の現状や成果、困難など多岐にわたって詳しくお話しいただきました。

まず太田さんは私たち受講生全員に、どのようなことに疑問や関心があるのかということをお聞きくださり、講演の端々でその疑問にお答えくださいました。お茶の水女子大学のご出身ということもあり、受講生からはキャリア選択に関する質問も多く挙がりました。

モザンビーク国での教育支援プロジェクトとは、初等算数・理科のカリキュラム改訂とそれに合わせた教科書の改訂、教師教育等を成果に掲げたプロジェクトであり、モザンビーク国教育省と連携しながら、2021 年 3 月～2027 年 4 月を協力期間として活動しています。それまでのモザンビーク国では理科を読み物で教えるなど、実質的な教育環境が整っていない状態であったため、観察や実験といった教育が出来るよう、教材の改訂とそれを教える教員の養成・研修が進められたそうです。プロジェクトに従事する中での困難として、プログラム開始当初はコロナ禍真っ只中であったこともあり、オンラインでの打ち合わせのみで計画を立てなければならなかったことなどをお話しいただきました。

今回の講演の中で最も興味深かったのは、太田さんが「自分は教科専門家ではない」ということを常に意識しながら仕事に取り組んでいるとお話しされていたことです。理科や算数教育の専門家と調査や業務調整役のコンサルタントが、チームとしてプロジェクトに取り組む中で、教科専門家にしか分からない部分とコンサルタントの立場からできることの棲み分けを行なっているというお話しでした。現在参加されているプロジェクトではメンバー間のトラブルなどがないとおっしゃられており、そういったメンバーそれぞれのフィールドを尊重し合う姿勢が円滑なチーム運営に繋がっているのではないかと感じました。

今回のお話を聞き、一つのプロジェクトを遂行するために、計画から実行までにいかに多くの人が関わり、緻密な計画が練られ、試行錯誤が繰り返されているのかを知ることができました。金銭的援助のみの支援ではなく、現地に入っての中身に踏み込んだ援助を重要視する JICA の支援の形とそれを可能にするコンサルタントの仕事の重要性を感じました。貴重なご講演ありがとうございました。

（文教育学部言語文化学科 3 年 今野春子）

講義冒頭で JICA の教育分野の
協力方針概略を説明

プロジェクト現場でのご苦労を
詳しくお話しくださる太田さん

（10）第 47 回持続可能な開発目標（SDGs）セミナー

【概要】

■ テーマ： 平和と開発－JICA のミンダナオ和平支援－

■ 日　時：2024 年 12 月 4 日（水）16:40～18:10

■ 講　師：JICA 落合直之氏

■ 参加人数：15 名

【参加学生による報告】

12 月 4 日（水曜日）、JICA（独立行政法人国際協力機構）に所属されている落合直之さんをお招きし、第 47 回持続可能な開発目標（SDGs）セミナー「平和と開発－JICA のミンダナオ和平支援－」が開催されました。落合さんが長年関わってこられたフィリピンの南方に位置するミンダナオ島で半世紀以上続いた紛争の平和構築支援に関して、JICA の役割や「人間の安全保障」を中心に詳しくお話しいただきました。

冒頭で提示された「43.6%」という数値、これは紛争の勃発後に和平合意に至ったにもかかわらずその後紛争が再発してしまう確率ということでした。およそ 2 件に 1 件が再発してしまうということを聞き非常に衝撃的でした。JICA が関係する国際平和協力の経済・社会的枠組みにおいて、開発援助を通じて紛争の再発防止に努めることの重要性を感じました。

JICA の平和構築の中で最も重要とされていることの一つに「紛争要因を助長しない（Do No Harm）」が存在し、その中でも「特定の民族やグループに偏らない」という部分が印象的でした。平時の開発協力とは異なり、善意で行ったことが一方のグループへの偏りに捉えられる可能性があるという点が平和協力の難しさを物語っていると思いました。

最も印象的であったのがミンダナオ和平プロセスのなかでの武装解除に関するお話でした。武装・動員解除の中で武器の取り上げは不可欠ですが、現地では武器と兵士の間には強い関係があり、自己の一部となっていることが多いことから武器の破壊が自分の一部の破壊として受け取られてしまうため、破壊するのではなくコンテナに保管して武器そのものを使用できないようにするという方法が興味深かったです。破壊よりもコンテナへの保管の方法が時間を要するということでしたが、現地の兵士の精神面にも配慮した和平プロセスが行われることで、段階的ながらも紛争の再発防止に寄与できているのではないかと思いました。

最後に、ファミリー間の抗争によって右腕を失ってしまった男性のお話がありました。その方は自分自身が被害に遭っても「やられたらやり返す」といった考え方では事態の収拾はつかないと考え、「やり返さないために」という考えのもと公民館設置や農業組合での共働のなかでどうにか和解しようと模索していたとのことでした。自分が抗争の被害に遭っても次世代に被害が及ばないよう社会を良くする方向に動く人が増えてきたという点に希望を見出すことができ、ミンダナオの人々が相手との対話の中で和平を進めることができるように JICA 含めた第三者の視点から対話の場所や機会を提供することがいかに重要であるかを感じました。

今回、ミンダナオで行われている JICA の和平支援を通して平和構築のあり方を学ぶとともに最前線で活躍された落合さんの経験を具体的なエピソードを交えた形でお聞きすることができ、多くの知見を得ることができました。貴重なご講演ありがとうございました。

（文教育学部言語文化学科グローバル文化学環 2 年　齊藤美月 ）

紛争後の和平合意の維持の難しさを語る落合さん

「平和は（援助機関ではなく）自ら（当事者間）で作るもの」と強調する落合さん

2.2　2024 年度ブータン連続セミナー

本セミナーは、①南アジアに位置するブータン王国を巡る諸相に触れること、②それらから開

発政策や国・地域の在りかたを考えることを目的とした、全 15 回のオンラインセミナーである（参加者：のべ合計 670 名）。日本ブータン研究所との共催という形式を採り、同研究所が 2013 年 4 月より続けているブータン勉強会（第 186 回～第 200 回）を兼ねた。

毎回ブータンを扱った国内外の新旧映像作品を取り上げ、映像作品の紹介と視聴、発表者（コメンテーター）からの解説、質疑応答及び意見交換という流れで実施した。取り上げる映像作品の選定にあたっては協力団体である海士ブータンプロジェクトの学生と協働し、各回のテーマに偏りが生じないよう工夫した。また、協力団体の日本ブータン友好協会には、主に広報に関して協力をいただいた。

（1）2024 年度第 1 回ブータン連続セミナー

【概要】

■ 日　時：2024 年 4 月 26 日（金）15:00～16:30

■ 題　目：「映像作品を通してブータンの諸相を学ぶ（46）―『シリーズ　アジアに生きる』「バタフライ・ブータン」（2023 年）―」

■ 発表者：津川智明 氏（元 JICA 専門家（地方行政）／日本ブータン友好協会副会長）
松原保 氏（ドキュメンタリー・フィルムメーカー）
平山雄大（グローバル協力センター講師）

■ 参加者：約 65 名

【参加者からの感想・コメント（抜粋）】

・ 「祈りの旗と環境問題」という具体的な問題に関して知ることができてよかった。
・ ブータンの文化だけでなく、世界中どこでもありそうな人々の葛藤の内容であった。
・ 全体の構成が非常によく、わかりやすいセミナーでした。コメンテーターのお話も、ゆったりとした雰囲気で、すんなり頭に入りました。
・ テーマが具体的で興味深かった。
・ ルンタが若木の成長を阻害するという環境問題があり、それに取組んでいるブータン人がいる、という大きな学びが得られました。
・ 美しい山岳の国と思っていたブータンの宗教文化と環境問題の葛藤を知ることができた。
・ ルンタの負の側面を初めて知り、考えるきっかけとなったことがとても有意義でした。
・ ブータン文化を知る上で参考になった。
・ とてもいいテーマで、考えさせられました。
・ ブータンが今抱える課題について、映像を通して理解が深まった。
・ コンテンツがよかった。単に美しい自然、原風景の保護という映像でなく、伝統的慣習が引き起こしている実情、それを一人であっても行動を起こしていく人間の姿を通して、どの世界も単純なことなんてないことを十分に伝えており、価値あるドキュメンタリーだと思った。
・ 直近のブータンを知れてよかったです。
・ ひとつひとつの質問に丁寧にご回答いただけた。
・ 昔からブータンに興味があったのですが、なかなか知る機会がなかったので、今回ブータンに

ついて学ぶことができてよかった。私は津田塾大学の学生なのですが、自分の大学ではない機関のセミナーに参加できるような機会を頂けて有難いと感じている。

- ブータンの山を歩いていると、思わぬところで、幾つものルンタやダルシンが連なって風に吹かれている所に出くわすことがありました。しかし、それらがそのまま放置され、山の若木の生育の妨げになったり、そのまま古くなって厄介なゴミとなることを、考えたことはありませんでした。今回のドキュメンタリー映画は、この問題に関する実態を明らかにし、なんらかの自然保護政策に役立つ考え方を見出そうとしているものと思われました。
- 番組を視聴するだけでなく、それを制作したスタッフの方のお話を色々と伺うことができたのは大変有意義でしたし、番組に厚み（深み？）を与えてくれたと思います。また JICA の方からも、実際に現地で仕事をしていらした方ならではのお話が聞けてよかったです。
- 信仰や伝統と自然保護問題という、世界のどこでも起こりうるテーマでもあり、とても興味深く拝聴いたしました。特に、ルンタが綿から化繊混じりになっているのも、環境破壊につながっている現状として興味深かったです。ブータンの僧侶の間でも、そのことが話し合われているのも興味深く、時代の変化がもたらすものとは何かを考えるきっかけともなると思いました。
- 宗教を盲目に信じるのがブータン仏教と思っていたので、カウンターの考えがでてきているのが興味深かったです。
- ルンタに関する問題が、宗教と環境に関係しており、仏教の教えか環境のどちらを守るかという葛藤があるという話が印象に残った。
- 私はブータンの人々のような仏教信仰を持っているわけではないが、ソナムさんが祈りの旗を取り外す場面は、胸が締め付けられるような感じがした。信仰を持っている人からしたら、目を背けたくなるような場面なのではないかと思ったからだ。ソナムさんが自然を大切にすることもまた仏教の教えの一つであるし、未来のために環境を大切にするべき、というソナムさん自身の信仰でもあると思う。仏教と環境のせめぎ合いというよりは仏教と仏教、または信仰と信仰のせめぎ合いのように感じた。個人的な考えとしてはいかなる信仰も大切にしたいと考えているので、どちらの信仰も大切にするには、やはり木々を傷つける可能性のある旗を外し、傷つけないような旗の付け方に変える、というソナムさんの取り組みが最も良い方法なのだと思う。また、メディアや SNS で取り上げてもらったり、多くのボランティアを動員したりして、ブータンの人々に祈りの旗の化学繊維や付け方について考えさせて、環境にとって良い付け方を周知させる機会を作るということが、ブータンの未来にとって効果的なのだと思う。
- 本日は、貴重な機会をいただき、ありがとうございました。今回のセミナーを通じて、ブータンの仏教や環境問題について、より学びたいと感じました。

取り上げた映像の紹介

プロデューサーの松原保氏（右）

（２）2024 年度第 2 回ブータン連続セミナー

【概要】

■ 日　時：2024 年 5 月 24 日（金）15:00～16:30

■ 題　目：「映像作品を通してブータンの諸相を学ぶ（47）―『Mountain Man』（ブータン・2022 年）他―」

■ 発表者：安西舞子 氏（広島大学総合科学部学生）
平山雄大（グローバル協力センター講師）

■ 参加者：約 60 名

【参加者からの感想・コメント（抜粋）】

・ 映画の紹介も良かったですが、RTC 留学体験談に非常に興味を惹かれました。
・ ブータンに留学なさった方のお話をもう少し時間をかけてしていただいた方が良かった。
・ 氷河湖の研究者という珍しいテーマであったため、満足した。
・ 若い人の留学経験のお話も興味深かったのですが、今オーストラリアへの移住者が多いということ、最近の氷河の変化、ブータンも大きな変化のさなかにいることがよく理解できました。
・ 日頃疑問に思っていたことが、何となく理解できた。
・ 『Mountain Man』は短編ながら見ていて楽しめました。安西さんのお話も現地に留学した方ならではの内容で、面白かったです。盛沢山でした。
・ 高校生や大学生が参加されたところが面白かった。
・ 留学経験の話は、大学の今の実際の設備や授業の様子が少し見ることができて良かった。
・ 映画監督の過去の作品を知ることができました。さらに、映像についての解説で注目ポイント（言語、文化、宗教、インターネット・近代化）を教えていただき理解を深めることができました。
・ 留学した安西さんのお話から、最近のブータン事情や学生生活を知ることができました。
・ ブータン留学の話で盛り上がることができた。
・ 留学生活の一端を知ることができた。
・ ブータンの映像だけでなく、安西さんや島前高校の話が聞けてためになりました。とくに安西さんのお話は直近のブータンのお話でよかったです。
・ Bhutan の監督によるドキュメンタリー、留学生の最新の Bhutan 体験談と、いろいろと参考

になった。

- 気になっていたドキュメンタリーの映像について解説していただけて良かった。ブータンの情報を知ることができた。
- 内容が良く分かりました。前回と同様に環境問題が課題ですね。
- 前回に続き、ブータン人監督による最新のドキュメンタリー作品を取り上げていただき、祈りをはじめとした文化やこれまでの価値観と、近代化、環境問題との間のせめぎあいのようなものが存在していることを知ることができた。
- 危険な氷河湖研究をすることの重要性を理解することができた。
- 氷河という途方もなく大きなものを調査しているツェリンさんの姿が黒い点に見えて、人間は自然の中ではこんなに小さな存在なんだ、と実感しました（けれども、その人間が自然をどんどん破壊しているのですね）。
- 大学生活が大きく日本の大学（寮）生活と変わらないと感じた。衣服以外は。
- 安西さんの実体験はどれも印象的でした。電子マネーの普及、学生のオーストラリア移住、お寺のボランティア活動が石運びだったこと等々。一番衝撃的だったのはデリバリーでチキンを食べたというお話でした。デリバリーが普及しているのですね。近代化を感じました。
- 前半の平山先生による映画の紹介が良かった。ブータン人の中でのスノーライオンの存在が気になった。
- 温暖化と氷河湖決壊の事実を知りえた。
- ブータンに Royal Thimphu College のような近代的な大学ができているのが驚きでした。
- 前半に平山先生から紹介いただいた同監督の他の作品『ゲンボとタシの夢見るブータン』で、お寺の後継者のことがテーマになっていたことも興味深かったです。仏教関係者にとって興味深い映画だと思います。既に話題になっているのかも知れませんが、大本山や宗旨の青年部の人たちに、紹介させていただこうと思います。
- ブータンのプナカゾンの水害の被害の話が印象に残った。
- 2012 年に訪問した際、タシガンへ行く途中、3000m を超える峠で子どもを背負った婦人がスマホで話す姿を見ました。ブータンは地形が険しく、電線は引けず、ネットワークに便らざるを得なく IT が急速に発展したものと思います。モンガル県の山奥の小学校でも小さな太陽光発電で電力を賄い、IT を駆使していました。
- 安西さんに対する質問が金銭的な話に偏りがちだったのが残念でした。一度そういう流れになってしまうと、その方向にどんどん行ってしまうのは仕方のないことかもしれませんが。数か月留学したという安西さんに「文化」といったような大きな話題を振るのはちょっと気の毒な気もしました。学生さんだからこそ答えられるようなもっと身近な質問ができれば良かったです（自分も含めて）。
- また映像の視聴の機会とブータンの文化的背景の解説を楽しみにしています。

取り上げた映像の紹介

監督のアルン・バッタライ氏

（3）2024 年度第 3 回ブータン連続セミナー

【概要】

- ■ 日　時：2024 年 6 月 14 日（金）15:00～16:30
- ■ 題　目：「映像作品を通してブータンの諸相を学ぶ（48）―『世界・神秘の道をゆく』「ブータン　ヒマラヤの隠れ谷」（2014 年）―」
- ■ 発表者：平山雄大（グローバル協力センター講師）
- ■ 参加者：約 55 名

【参加者からの感想・コメント（抜粋）】

- ・ 映像を基に説明や質疑応答が続き、非常に興味深い話が聞けた。
- ・ 私はまだブータンには行ったことがないのですが、ダージリン、シッキム、カリンポンには何回か行ったことがあるので、なつかしかったです。（中略）2011 年は 3 月に東日本大震災があり、そればかりで頭がいっぱいでしたが、同年 9 月のネパール地震も、大きな被害を出した様子が映し出され、この地域も大変だったんだと、今さらながら認識しました。
- ・ ブータンの地政学上の位置関係がよくわかりました。
- ・ ダージリンやシッキムとのつながりの話が良かった。また東端まで同時期に同じ目で見た町の様子が興味深かった。
- ・ 「神秘の道」文化と自然の遵守が参考になった。
- ・ 映像を見て、それをもとに学ぶというスタイルがとても理解が進むのでよい。
- ・ シッキムの歴史について、勉強になりました。
- ・ 見たことのない番組で、平山さんの提示してくださったシッキムやブータンの王族写真等、良かったです。
- ・ これまでのセミナーの復習的な内容＋αで、楽しめました。
- ・ 今回のセミナーで取り上げられていたフランスの番組は、平山先生が指摘されていた通り“ヒマラヤ地域の「今」”を多方面から捉えた内容で興味深かった。
- ・ 映像視聴前の、平山先生による映像紹介や映像内に登場する場所の（写真付きの）説明が大いに参考になった。
- ・ 大きな変化に対して危惧するブータン人のお話が興味深かったです。1 年間に 2 万人も国外に転居する今の状況はどのように感じているのか聞きたいものです。

・ 田舎の過疎化は今や国の過疎化になっている。
・ インドダージリンからブータンへの神秘の道が印象に残った。
・ シッキム王国の消滅の話が印象に残った。
・ インドとの関係やティンプー以外のブータンの町や村の様子を知ることができた。
・ 映像の中で、「ブータンの変化は速いので、伝統的なブータンを見たいと思ったらなるべく早く訪れてください。」と言っていましたが、それから 10 年経った今は随分変わってしまったところがあることと思います。「進歩と引き替えに魂を失う」と、ある若者が言っていましたが、今、そのように考えている人たちがどれくらいいるのでしょう。どこの村だったか、「送電のケーブルが全て地中に」と言っていたのが羨ましいです。日本のように早くから全国に電気が行きわたった国では難しいかもしれませんが。
・ 「ブータンとシッキム、ダージリン、カリンポンの歴史的繋がり」というテーマに絞った平山先生の解説が大変勉強になった。カリンポン（ダリムコット）はかつてはブータンの支配地域だったということを初めて知って、驚いた。
・ 少子化、地域格差の拡大、人材流出……等、ブータンが抱える課題についての話がとても参考になった。
・ ブータンの貴重な建物の保全についても聞いてみたいものです。
・ 平山先生のおっしゃっていた通り、セミナー開始前の 10 分をブータン関連イベント紹介や自由な（？）おしゃべりの場として活用できると良いと思いました。

映像に登場する場所の説明（カリンポン）

映像に登場する場所の説明（ガントク）

（4）2024 年度第 4 回ブータン連続セミナー

【概要】

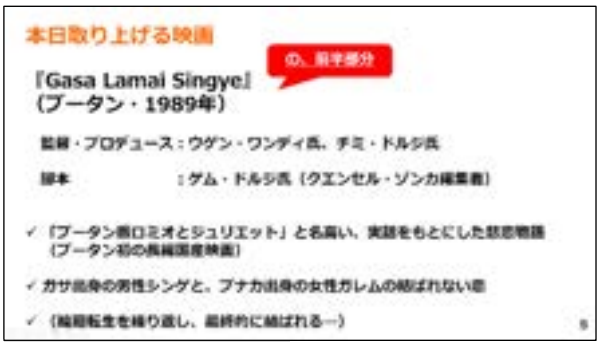
■ 日　時：2024 年 7 月 5 日（金）15:00～16:30
■ 題　目：「映像作品を通してブータンの諸相を学ぶ（49）―『Gasa Lamai Singye』（ブータン映画・1989 年）前編―」
■ 発表者：平山雄大（グローバル協力センター講師）
■ 参加者：約 45 名

【参加者からの感想・コメント（抜粋）】

・ 平山先生が、映画撮影の背景や監督に関して、またストーリーを冒頭で詳しく説明してくれ理

解を深めることができた。

- 今回も初めて見る映像でした。
- ブータン王国の生活、文化の一端を知ることができた。
- 今現在のブータンのご様子を、私よく把握していないのですが、1989 年に撮影されたという懐かしきブータンの風景や、文化風習、礼儀作法など、こちらの映画で拝見する事が出来、大変楽しく、そして興味深く観させて頂きました。
- 知らない知識を習得できた。
- ブータンの映画はやはり珍しいです。登場人物の歌う歌もおもしろいと思いました。
- プンツォと一緒に拝見しました。プンツォも初めて見るそうです。彼が小さい頃モンガルの故郷でお兄ちゃんたちが見に行くという時に一緒に行きたかったけれどあまりに小さいので行かせてもらえず駄々をこねたら、従兄弟に爪を立てて耳をつねられ血が出た…という思い出のある作品です。でも、実際見るとバックミュージックも無く、展開もシンプルで、現代の映画とは全く趣が違って拍子抜けしました。
- 今回の映像を通して、ブータンの習慣（挨拶の仕方や食事の取り方など）を多く学べました。ブータンは学会としては南アジア学会の地域に入っているとおもいますが、ブータンについては全くの門外漢ですので、毎回、新たな発見があり、拝聴するのをとても楽しみにしております。
- ブータン人作成の映画を日本語で解説していただき、興味をもてた。
- ブータンの歴史的映像が楽しめた。
- 平山先生の同時通訳と映画視聴中の細かな指摘が楽しく、映画を倍楽しむことができた。
- ブータン初の国産長編映画、普通なら見ることのできない超貴重な作品を取り上げていただき、それを鑑賞できただけで満足です。
- 平山先生の解説が「なるほど！」というものばかりで参考になりました。確かに、映画からブータンの文化を知ることができました。
- ゾン内の映像が貴重でした。
- ブータン王国の生活、文化の一端を知れた。
- 色々御座いましたが、監督や役者さん達のご紹介が、興味深かったです。そしてリメイク版は、より一層華やかさが増し、盛り沢山の歌うシーンでは、インド映画の遊び心を取り入れられたのかな？と面白く思いました。
- 平山さんがゾンカ語を同時通訳されていることに感動しました！
- 今回の映画は「ロミオとジュリエット」ということでしたので、主人公の二人が住むガサとプナカが地域的に敵対関係にあるのかと思っていましたが、そうではなく、悲恋という意味だったのかと思います。また、新たに作られたリメイク版との違いも興味深かったです。
- 質疑応答のやり取りの中に出てきたブータンの結婚事情や母系社会に関する考察が参考になった。
- ブータンの映画をもっと見てみたくなりました。
- 平山先生のブータン関連映像収集力に脱帽です。



映画の撮影場所に関して

映画のリメイク作品紹介

（5）2024 年度第 5 回ブータン連続セミナー

【概要】

■ 日　時：2024 年 7 月 19 日（金）15:00～16:30

■ 題　目：「映像作品を通してブータンの諸相を学ぶ（50）―『Gasa Lamai Singye』（ブータン映画・1989 年）後編―」

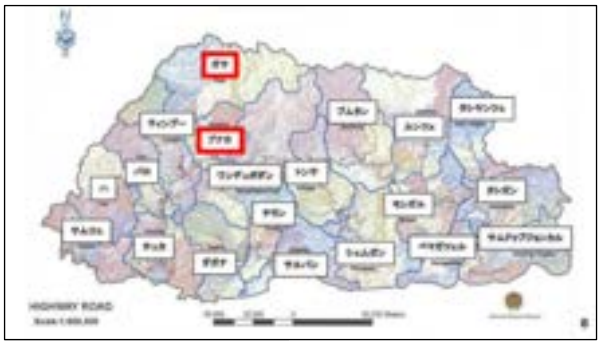
■ 発表者：平山雄大（グローバル協力センター講師）

■ 参加者：約 45 名

【参加者からの感想・コメント（抜粋）】

・ 平山先生のコメントが的確でした。
・ ブータン文化、習慣の一端が垣間見られてよく理解できた。
・ 全くブータンの映画事情は知らなかったので、おもしろかったです。
・ ブータンでは、①いつ頃から映画を作り始めたのか　②どのような内容のものが多いのか（霊を扱った映画にビックリ。国が主導だから？？　ブータンの文化？？）　③俳優陣の職歴が国会議員？　などなど、よく分かりました。ありがとうございました。
・ 35 年前のブータンの人たちのコミュニケーションツールが歌の掛け合いというのが、とても面白いですが、日本ももっと昔そうだったし、夜這いもありましたね。前回参加できなかった人のための振り返りがあったので、ありがたかったです。
・ 珍しいブータンの映画を拝観させて頂けて、非常に満足致しました。
・ ゾンカ語は理解できませんでしたが、解説により内容が良く分かりました。
・ ブータンの映画そのものと映画史・今日の映画の傾向など、とても興味深かった。
・ 前半のブータン映画史と最新映画の紹介（予告編解説）、さらにセミナーで取り上げたブータン初の国際長編映画「ガサ・ラマ・シンゲ」と最新映画の違いに関する考察が良かった。
・ 映画にその国の文化（信仰心・相聞歌など）が色濃く出ていると感じました。
・ 女性の霊のシーンと火がバッと燃え上がるシーン以外は、自然光で撮られている様子で、まるでドキュメンタリーを見るようでした。靴を履いている人がいなかったように見えました。もしそうだとしたら、驚きです。また、メロディーや音の変化が節ごとに似ていると思いました。現代の音楽とはかけ離れていますが、あのメロディーはブータンの人には耳になじむ懐かしいメロディーなのではないかと思いました。きれいな歌声でした。

- 火葬をするときはネパールなどと同じなんだと思いました。特に火葬場が川の近くに作られるということは燃え残った骨を流して供養をするのかと思いました。
- 悲劇というより、やっと二人が幸せになれたね、というハッピーエンドの側面が大きいという点が印象に残った。死が身近なんですね。
- 当時のプナカからガサへの徒歩での道のりについて、私が 2012 年にモンガルの山奥の知人のレサ村にある実家を訪れた時を懐かしく思い出しました。モンガルの町中から馬と徒歩で峠と谷間を 1 日掛かりでたどり着きました。今は自動車道路が開通しているそうです。ブータンもインフラ整備が進んでいるようです。
- 歌の掛け合いによる意思疎通に感動しました。ブータンの文化でしょうか。
- ブータンの映画史がとても興味深かった。初めての長編映画が 1989 年とのことだが、それ以前は、どのような映画を見ていたのかが気になった。また、この 30 数年での急速な映画の発展は、ブータンの文化政策にどのような影響があるのだろうか。歌の掛け合いのシーンがあったが、そういうシーンは、バックシンガーが歌っているのだろうか。また、俳優陣が 30 年前とはずいぶん変化しているように感じた。ブータンの「ロミオとジュリエット」というので、敵対する家あるいは地域の男女の恋愛かと思っていたが、その点はかなり違っていたようだった。
- 平山先生が映画俳優や監督の経歴、さらにゴシップ等にも詳しくて驚いた。また、オーストラリアへの留学斡旋会社が映画のスポンサーになっているという事実にも驚いた。



映画の撮影場所に関して

最新のブータン映画紹介

（6）2024 年度第 6 回ブータン連続セミナー

【概要】

■ 日　時：2024 年 8 月 9 日（金）15:00～16:30

■ 題　目：「映像作品を通してブータンの諸相を学ぶ（51）―『プラネットベービーズ』「ブータン　“幸せ”の国の子育て」（2010 年）―」

■ 発表者：森下航平 氏（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科一貫制博士課程）
平山雄大（グローバル協力センター講師）

■ 参加者：約 35 名

【参加者からの感想・コメント（抜粋）】

- 映画鑑賞だけでなく、講師の先生と院生のコメントが伺えたことが良かった。
- プナカ県イビサ村の普通の農家の人たちに焦点をあてた映像の構成も良かったですが、その後の森下さんの解説・コメント、平山先生の追加コメントを通して学びが深まりました。
- 質疑応答のやり取りが専門的で、雰囲気も良かった。
- 学校教育全般についてのレビューがあってもよかった。
- 今回は質問やコメントが専門的で深い内容のものが多く、かつて教職に携わっていたものとしては大いに参考になりました。
- 森下さんが、追加する形で現在のティンプーの様子を知らせて下さったのも大変興味深かったです。平山先生のコメントによって更に理解が深まりました。
- 2010 年ころのブータン農村子育て（教育）事情は映像から推測ができたのですが、現在の国全体の様子（東部西部との差・都市と農村との差）などが知りたかったです。
- 教育事情、興味深かったです。
- 過去（といってもまだ 15 年ほどですが）と現在の農村や都市の子育ての様子について、映像とコメンテーターの森下さんからの報告で理解を深めることができた。
- コメンテーターの森下さん、平山先生のお話や質問への回答（平山先生から森下さんへの質問を含め）から、ブータンの学校教育事情の一端を知ることができた。
- 質問について、専門的知見を交えて、丁寧に回答をいただき感謝申し上げます。
- ブータンでもスマホが暮らしに溶け込んでいると感じました。
- 森下さんと平山先生のやり取りにあった、「都市でも農村でも、子育てにスマホ（YouTube）が活用されている」という話が参考になりました。マミーポコのおむつの話やティンプーでの子ども用品店・インドアパークの増加の話等、最近の事情も教えていただき楽しかったです。
- 近年のブータン政府が取り入れているというセントラルスクール制度のありかた、それが子どもと地域の分断を助長している……という見方もあるという意見が刺激的でした。
- 今は変わっている部分もあるのかもしれませんが、ジャンベさんが「お母さんが忙しそうだから」と自分の服は言われなくても自分で洗っていたこと、靴を大事にするために道が悪いところでは裸足で歩いていたこと。お母さんの言っていた「善良な心を持つことこそ一番の幸せ」「年上の人を尊敬し、年下の人には優しく」などが印象に残りました。今の日本ではこうした気持ちが失われてしまっているのが残念です。私たち年長者も、もう諺を子どもたちに教えたりしなくなりました。
- 急速に変化し、どんどん新しい物や事が入ってきていることが分かりました。今後、欧米（インド？）一辺倒ではなく、ブータン独自の文化や行事・考え方を大切にした活動なども知りたいと思いました。
- 民族の言語や宗教など、どう守っているのかな、ということに関心があります。やはり英語での教育が重視されているんですね。
- かつてコミュニティも学校設立に関わって学校数が増え、教育の質の問題から統廃合が進み、今は「おらが村にプレスクールを」という流れになっているのは興味深かった。教育の質と地域の持続可能性のバランスの難しさを感じた。
- ティンプーの移動遊園地等の写真も初めて見たが、あのような都市の子ども向けの仕掛けを

しているのはブータン国内資本の会社なのだろうかなども気になった。

- 平山先生の発言の中にあった、近代学校教育と僧院教育の相互交流のお話が印象に残った。また、就学前教育の量的拡大が一気に進んでいるという話には驚いた。
- 名のある専門家や有識者に限らず、大学生・大学院生等もコメンテーターとし登壇するこのセミナーのスタイルに好感を持っています。

取り上げた映像の紹介

映像の内容に関して

（7）2024 年度第 7 回ブータン連続セミナー

【概要】

■ 日　時：2024 年 9 月 13 日（金）15:00～16:30

■ 題　目：「映像作品を通してブータンの諸相を学ぶ（52）―『アジアンスマイル』「サッカー代表カルンの闘い　ブータン・ティンプー」（2010 年）他―」

■ 発表者：菊川翔太 氏（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科博士前期課程）
平山雄大（グローバル協力センター講師）

■ 参加者：約 40 名

【参加者からの感想・コメント（抜粋）】

- 映像が、若者の葛藤を感じさせられて考えさせられる内容だった。
- 菊川さんのレポートが素晴らしかった。
- 平山先生が冒頭で紹介された本田圭佑パロ FC 加入の話も、後半の菊川さんの映像に対するコメント＋α も、うまくまとめられていて感心しました。
- 菊川さんが、視聴した映像に更にたくさんの広範囲かつ詳細な情報を加え、整理し、分析・まとめをして下さって、大変充実した回になりました。これだけのものを用意するのは本当に大変だったのではないかと思います。ブータンやオーストラリアに実際に足を運んで得られた情報を伝えて下さったのもとても有意義でした。
- サッカーが世界中で楽しまれていること、数少ない娯楽を若者たちが心から楽しんでいること、外国生活とのバランスを考えながら、この先のことでおそらく悩んでいるであろうこと、などを推測できた。報告者も奥ゆかしくていいですね。
- 映像の主人公のカルン・グルンさんの家族（お母さま）に対する想いに胸が熱くなりました。
- ブータンの現状理解に役立つ情報が多数得られた。

- 映像の内容と、映像視聴前後の案内・コメントが一貫していて良いセミナーでした。
- ブータンのサッカー参加意欲が伺えて参考になった。
- ブータンでのスポーツ事情、興味深かったです。
- 在豪ブータン人の様子や店舗を構えるほどの状況など興味深い。
- ブータンの現状が理解できました。
- 現在社会問題化している海外への人材流出の話、100 年前のシッキム政務官のブータン訪問の話、スタジアムの変遷の話等盛りだくさんで、満足です。
- オーストラリアでのブータンサッカーリーグの展開など、新鮮な情報をたくさん得ることができた。
- 映像の主人公のその後や、オーストラリアのブータン人コミュニティ等、映像ではわからない話が聞けて、とてもよかった。
- ブータンサッカーの歴史や現状についてよく分かった。
- 私にとってはブータンのサッカー関連情報すべてが目新しく、刺激的でした。
- ブータン人の海外進出状況が参考になった。
- 菊川さんの充実した内容のコメントももちろんですが、合間の平山先生の補足情報（100 年前のシッキム政務官ご一行のブムタンでのサッカーの話 etc.）も大変参考になりました。
- 人口の少ないブータンからオーストラリアなどへの海外移住の波が、とても気になりました。
- 特にカルン・グルンさんの現況がわかったのが良かったと思います。
- コメンテーターが色々調べて、コメントしてくれたのが良かったです。
- サッカーが意外と古くから行われていたことが分かった。2012 年にワンデュ・ポダンで行われた祭りを見学した際に、ワンデュ・ポダン・ゾンが火災で使用できず、近くのサッカー場で行われ、立派なスタンドが設置されていたことを思い出しました。
- 私の知人も昨年オーストラリアのパースに移住し、その後家族も移住しました。ブータンのパースへの移住者の現状が教えてもらえ、大変喜びました。
- サッカーの指導では（英語に加えて）ネパール語が共通言語になっていることが多いのでは？という平山先生の指摘にははっとさせられた。

取り上げた映像の紹介

ブータンのサッカー国内リーグに関する記事

（8）2024 年度第 8 回ブータン連続セミナー

【概要】

■ 日　時：2024 年 10 月 11 日（金）15:00～16:30
■ 題　目：「映像作品を通してブータンの諸相を学ぶ（53）―『未来の瞳』「太陽と月の物語　ブータンの双子の兄弟」（2001 年）―」
■ 発表者：野口ウゲンチョデイ 氏（福井大学国際地域学部学生）
平山雄大（グローバル協力センター講師）
■ 参加者：約 45 名

【参加者からの感想・コメント（抜粋）】
・ 映像も当時の子どもたちの普段の様子が垣間見えて面白かったですし、コメントや質疑応答の中で、チヨちゃんの率直な思いも伺えて興味深かったです。
・ フリートークが楽しかったです。
・ 『太陽と月の物語』の VTR も良かったが、チヨさんの将来が楽しみだ。
・ ブータンも日本も親子の絆、情愛表現は似ているのだなと思い、ブータンという国に益々親近感を覚えた。また、チヨさんのお話が楽しかった。
・ 双子の兄弟を通して 20 年前のブムタンでの暮らしにタイムスリップをした感覚を味わえた。
・ チヨさんのお話を通して、ご自身の中学生までのブータンでの生活を経て、いま日本で頑張っていることに大きな勇気をもらえた。
・ コメンテーターのお話も含めブータンの日常の諸側面を見ることができたように思います。
・ 今回のセミナーで、野口ウゲンチョデイさんが、コメンテーターとして、自らのお話をされたのが、非常に良かったですね。（中略）今回立派に大人になった野口ウゲンチョデイさんの映像や、ウゲン一家の写真を見て懐かしい思いが致しました。
・ ブータンで過ごした方の声が聞けたことが良かった。
・ 今回のセミナーで取り上げられた TBS の番組、平山先生が冒頭でおっしゃっていた通り、2000 年当時のブムタンのごく普通の家庭、町の様子、学校の様子をシンプルかつ偏見なく取り上げていて好感が持てました。
・ 冒頭の平山先生の説明で、映像の「双子の冒険旅行」のルートや周囲の様子がよく分かりました。
・ 平山先生とコメンテーターのちよちゃんの掛け合いがテンポよく、内容も勉強になった。
・ 20 年以上前のブータンの地方の暮らしを知ることができた。
・ ちよちゃんがすてきな大学生になっていてうれしくなりました。これからどこへ向かうか楽しみです。映像作品の家族もすごくあったかいブータンらしい家族で心がほかほかしました。
・ 最後にチヨちゃんが言っていた「普通に生きてみたい」というような発言と、ブータンの海外に出ていく若者たちの根っこにあるものは似ていたりするのだろうか？と気になりました。
・ チヨさんの生き方が印象的でした。
・ 小学校の低学年から、進級に関わる学期末テストがあるということで、子供たちも真剣に取り組んでいる様子が印象的だった。
・ 双子に太陽と月という名前をつける理由が面白かった。
・ 「日本人としても生きてみたい」という最後のチヨさんの言葉が印象的でした。卒業研究と東

京でのお仕事、心から応援しております。

- 双子の話とブータンの出生率の話が勉強になった。
- 情操教育がカリキュラムにない事に驚いた。
- コメンテーターのちよちゃんご自身のエピソード（自身の中学時代の話）が印象的でした。
- コメンテーターのコメントももちろんですが、平山先生が撮影されたブムタンの貴重な写真の数々を見せていただき、面白かったです。
- 双子につける名前のレパートリーの少なさ（ほぼ一択！？）に驚きました。平山先生とちよちゃんの出会いの話やお母さまがティンプーで開かれた「ブータン勉強会」にサムタンから参加された～という話を初めてお聞きし、印象に残りました。
- チャムカルの商店街やジャンパ・ラカン、そしてそこへの街道を見ることが出来た。
- 「携帯電話のないころの話」とのことでしたが、改めて考えてみると携帯電話やインターネットの登場によって（日本でもブータンでも）人々の暮らしは大きく変わりましたね。近年の急激な社会の変化について考えさせられました。

映像に出てくる行程の紹介

野口氏による学校生活紹介

（9）2024 年度第 9 回ブータン連続セミナー

【概要】

■ 日　時：2024 年 10 月 25 日（金）15:00～16:30

■ 題　目：「映像作品を通してブータンの諸相を学ぶ（54）―『White Gold: Discovering Bhutan's Natural Treasure』（アメリカ・2018 年）―」

■ 発表者：石内良季 氏（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科一貫制博士課程）
平山雄大（グローバル協力センター講師）

■ 参加者：約 40 名

【参加者からの感想・コメント（抜粋）】

- 気候温暖化による氷河湖の決壊はネパール、ブータンでも危惧されていて、その実態が少し分かった。環境保全と水力発電の開発の相反することは日本でも起こっていることだが、ブータンの場合は経済が深く関わっていて、政府も大変だと思った。
- 自動翻訳の字幕の精度は平山先生ご指摘の通り確かに「むむむ……」でしたが、映像視聴前にテーマやレポーター自身による記事を丁寧に紹介してくださり、ありがたかったです。

- ドキュメンタリーと最新の情報の組み合わせが良かった。
- 石内さんのコメント、ご自身の研究とも繋げたもので楽しかったです。
- 画像がとてもきれいに見えました（普段ケニアで見ていて今日は日本だったからなのかもしれません)。石内さんの解説は大変勉強になりました。
- ABC ニュースの番組は思ったより（？）内容が浅く、深い考察のようなものはなされていないように感じたが、前後の平山先生と石内先生の解説で学びが深まった。
- 地球温暖化の今の時代、氷河を有するヒマラヤ山脈周辺のブータン、ネパールなどの状況が気になっていました。それを知ることができました。
- ブータンの水、温暖化の影響について、ビデオは分かり易かった。現地で研究をされている方のコメントにより、身近に感じることができた。
- アメリカ（ABC ニュース）がどうブータンを見ているかに興味があった。広く先進国に言えるかもしれないが、日本の視点同様、桃源郷のままでいてほしい～という感情が垣間見えた。レポーターもダム建設には反対の意見だったようだ。海外のブータン番組を見る機会が限られているため、貴重な時間だった。番組を見る前の概要紹介・説明がありがたかった。
- アニミズム信仰が良く分かった。
- ラフティングをして水資源を実感する場面が印象的でした。それとそれに関わっているブータン人の話も。アメリカでラフティングしたことがあるのですが、ブータンの激流は相当腕前が必要だなと思いました。
- 東に滞在していらっしゃる石内さんの発表にあった、雨乞いの場面が印象深かったです。
- 水資源の将来性。他国に利用されない事を祈ります。
- 石内さんの「ルー」に関するお話が興味深かったです。
- 水の霊、ルーのこと。環境という 20 世紀の西欧が創り出した概念を相対化できる。
- 「ダム建設のことなんて、ブータン人の 9 割はそもそも理解できていないんだ」といったブータンのかたのコメントが印象的でした。
- GLOF は山からの津波であるというたとえが印象に残った。
- セミナー終了後に平山先生が話していた、「チュカ県内の水力発電所の社会科見学ツアーを通して、地域の観光を盛り上げよう！」という話が大変興味深かった。
- ブータンでも仏教一色ではなく、自然神がまつられていることを知れた。
- 水力発電がビジネスとして成立していることが印象に残った。同時に、都市部の洪水被害対策の脆弱さが印象に残った。
- 環境保護はブータンの GNH の柱のひとつで、国民の幸福と連動している～というブータンの開発姿勢には、なるほど！と感じた。ブータンの精霊信仰についても、初めて知る内容でおもしろかった。

取り上げた映像の紹介

映像の内容に関して

（１０）2024 年度第 10 回ブータン連続セミナー

【概要】

■ 日　時：2024 年 11 月 22 日（金）15:00～16:30

■ 題　目：「映像作品を通してブータンの諸相を学ぶ（55）―『The Wonder List with Bill Weir』「Bhutan: The Happiest Place on Earth」（アメリカ・2016 年）―」

■ 発表者：平山雄大（グローバル協力センター講師）

■ 参加者：約 35 名

【参加者からの感想・コメント（抜粋）】

・ ブータンの特異な政策について踏み込んでレポートしていた点が良かった。
・ 45 分弱の映像の中で、幸福や GNH という人間の根幹にかかわることをテーマとしながら、ブータンの民族衣装や近代化、仏教、若者やポップカルチャーなど具体的な身近なテーマを深く学ぶことができた。また、平山先生の、GNH の誕生秘話のお話や水力発電所の実際の訪問等など専門性の高い知見を学ぶことができた。
・ 現在のブータンの姿がわかった。
・ “幸せの国”ブータンのリアルな映像を見て、解説などを聞くことができた。
・ いつもながら、よその国で制作された番組は、着眼点など興味深いです…。
・ 映像が終わった後の解説が良かったです。映像を見て理解した事以上の事を改めて感じました。
・ とてもブータンを身近に感じられた。
・ 平山先生の事前・事後の解説・コメントを通して理解が深まりました。先生がおっしゃる通り、映像は「GNH」をテーマに非常にもりだくさんな内容でした。
・ 前回のセミナーに続きアメリカ制作の映像で、内容が興味深かったです。
・ お寺のようなチュカ水力発電所の内部は衝撃でした。平山先生が紹介してくださったプナツァンチュ水力発電所内部の写真も非常に貴重なもので、大満足です。
・ 初めて知ることがたくさんありました。経済のことをもっと知りたいです。
・ 同じブータンのことでも、映像によって捉え方が異なるところがおもしろいです。
・ ラッパーのケザン・ドルジさんが「ゴカップ」（チャンス）をテーマにした歌を歌っていて、どのような「ゴカップ」を求め、主張していたのかが興味を持ちました。

- 国民総幸福量（GNH）という政策（基準）がなぜでき、どのように運用されているかいう話が参考になった。
- GNH が憲法に定められている事に感心した。
- ブータンの人達の英語力が凄いなと感じました。
- GNH 概念が生み出された発端が「ブータンの特殊な状況下での苦肉の策」であったことには驚きました。
- 首相が自転車に乗りながらインタビューに答えている様子がおもしろかったです。
- 確か前回のセミナーで取り上げたアメリカの番組内でも指摘されていましたが、北朝鮮とブータンの比較が興味深かったです。
- 「national identity は独立を保つための武器の一つ」という言葉が（考えてみれば当たり前のことですが）印象に残りました。GNH の正しい捉え方がわかったのが良かったです。
- 2016 年～2 年間、協力隊員でシェムガンに住んでいました。その頃からどんな発展があるのか興味深く、本日のセミナーを視聴させていただきました。やはり、ブータンは良くも悪くも当時の私の知っているままで、ゆっくりとした発展を遂げているように感じました。一方で、国民は流行に非常に敏感で、流行りに流されやすく、国の発展のペースとのギャップを感じます。いつまで今の姿のブータンが見れるのか心配ですが、陰ながら見守っていようと思っています。またセミナー参加させていただきます。ありがとうございました。
- ブータンのことが回数を重ねることで少しずつ理解を深められ参加できてよかったと思います。平山先生も押し付けることなくお話していただけるので何かホッとします。
- 平山先生が「ポイント」として挙げたブータンの映画産業について、またバリアフリー社会について、ぜひお聞きしたかったです。
- ブータンの水力発電事情に関してまた取り上げていただきたいです。

取り上げた映像の紹介

プナツァンチュ水力発電所内の様子

（１１）2024 年度第 11 回ブータン連続セミナー

【概要】

■ 日　時：2024 年 12 月 13 日（金）15:00～16:30

■ 題　目：「映像作品を通してブータンの諸相を学ぶ（56）―『101 EAST』「Bhutan's Forgotten People (Part 1)」（カタール・2014 年）他―」

■ 発表者：平山雄大（グローバル協力センター講師）

■　参加者：約 30 名

【参加者からの感想・コメント（抜粋）】

- このような負の歴史も有する国だということで、ブータンにより興味を持ちました。
- ブータンに関して、全く知らなかった事項でした。
- 映像の紹介、平山先生の背景情報の解説、映像の視聴を通してこれまであまり着目されてこなかったブータンの難民問題について理解を深めることができました。特にブータン南部の写真を通して、その宗教や地形や民族的背景を知ることができ勉強になりました。
- 平山先生がおっしゃる通り、ブータン関連のイベントやセミナーで難民問題が取り上げられることはほぼなく、今回はいつも以上に貴重な時間となったように思います。
- 難しい問題をバランスよく取り扱っていた。
- 「難民問題」について詳しく知ることができました。前半の解説パートもわかりやすくとてもよかったです。
- 私の疑問に答えていただいて、今の Bhutan がどう対応しているのか姿勢が見えた。
- 映像の内容がブータン国の理解に深く参考になった。
- 映像視聴前の充実した解説・コメントが大変勉強になった。南部の景色が、我々が思い描く「ブータン」とは全然違う様子に驚いた。
- Bhutan の難民問題という、興味深いテーマだったので満足した。
- いつもと異なる視点でよかった。
- アルジャジーラの番組を取り上げるというところが、非常に挑戦的で良かった。映像の内容も解説も刺激的でした。
- 映像の中で、ネパールの難民キャンプに滞在されている男性の方が「ブータン国内に牛が 28 頭残されている」と発言されていたように、祖先の土地や家畜、故郷への思いなど有形無形のつながりやその断絶が生じていることを理解しておきたいと思いました。
- 難民発生の背景を丁寧におってくださって、勉強になりました。難民問題のマイナスイメージを、GNH 政策で一気にプラスイメージに変えた、という話が印象的でした。
- アルジャジーラは中東のメディアだと思っていたのだが、ブータンの問題まで取り上げていたことに驚いた。
- 「国民総幸福度（GNH）によるブータンの国づくり」を進める中での難民問題があることに驚かされた。（今回のセミナーで初めて知った）
- 一国に複数の民族が同居することは世界の標準ですが、当時のブータンでは仕方がなかったということでしょうかね。
- ブータン政府にとって非常にセンシティブな話題を、平山先生が注意深く言葉を選んで（？）説明されていた点が印象に残っている。
- GNH が提示される前に起こった問題に対して、仏教の教えに従いどう向き合っていくのか。注視していきたいと思っています。
- 海外のブータン関連番組をもっと取り上げてほしい。
- この様な意見が分かれる問題も双方の意見が分かるように聖域なく取り上げて欲しい。

・ 以前のセミナーで当日のスライドを配布していただいた回があったように記憶していますが、今回の平山先生の資料も（写真等は難しいかもしれませんが）手元に欲しいと思いました。
・ 今回の Story を聞いていて、ミャンマー国のロヒンギャ問題や SriLanka の Tamil 人問題との類似点があると感じた。国家とか国境とかの概念が輸入される前の土地定着の問題であったり、単に少数派である人の集団に対する支配集団の行動の問題だと受け止めた。さらにこれからは南部の肥沃な（たぶん）土地を、国の中でどう位置付けていくのか、興味は尽きません。
・ 引き続き続けていただきたいです。

取り上げた映像の紹介

南部地域の風景

（１２）2024 年度第 12 回ブータン連続セミナー

【概要】

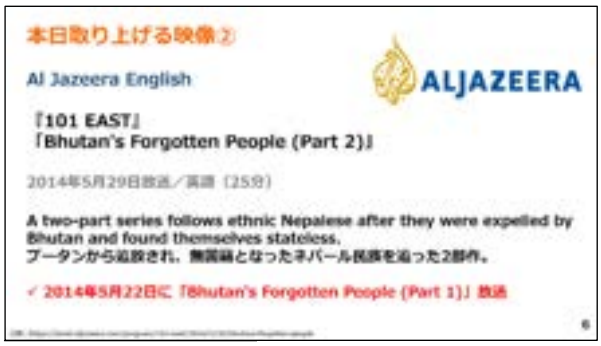
■ 日　時：2024 年 12 月 27 日（金）15:00～16:30
■ 題　目：「映像作品を通してブータンの諸相を学ぶ（57）―『101 EAST』「Bhutan's Forgotten People (Part 2)」（カタール・2014 年）他―」
■ 発表者：平山雄大（グローバル協力センター講師）
■ 参加者：合計約 50 名

【参加者からの感想・コメント（抜粋）】

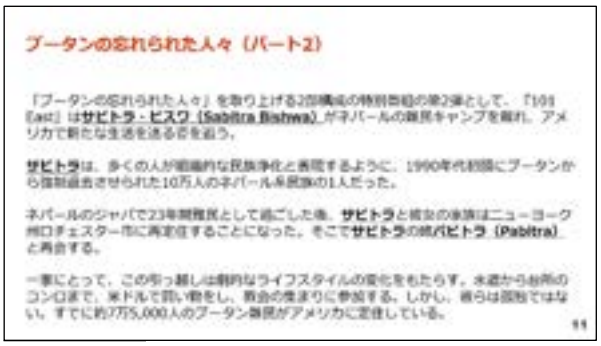
・ 難民についてはブータン国内では比較的アンタッチャブルな話題なので、歴史的経緯を知ることができてよかった。
・ 前回に引き続き 2 回連続同じテーマでのセミナーだったことで、映像の内容、難民発生や第三国定住に至る背景などをより深く学ぶことができました。アメリカ社会側のネパール系ブータン難民を労働力として活用する経済的側面や、ネパール系難民自身の文化適応や鬱など社会統合に至る課題、ネパール系コミュニティの相互扶助や文化アイデンティティなど多面的な視点から理解するきっかけになりました。
・ 平山先生の解説が非常に面白いです。
・ ブータンの難民問題のこと、米国に多くの難民が住んでいることなど、まったく知らない世界のことを、わかりやすく解説していただいた。
・ 改めて前回のセミナーの解説パートを概観（&補足）してくださって、理解が深まった。NOC（No Objection Certificate）が発行されないという嫌がらせの結果大学進学ができなかっ

た……という難民のかたの話は衝撃的だった。

- 難民発生背景の大変丁寧な紹介がありがたかったです。
- 前回のセミナーに続き、（ブータン政府にとって）センシティブな内容に関して分かりやすく解説いただいて勉強になった。
- 興味深い映像と詳しい解説により問題に対する理解が深まりました。
- 「ブータンの難民問題」というテーマを取り上げること自体に意義があったと思う。平山先生の指摘の通り、ブータン関連のイベントやセミナーでこの問題が話題に上がることはほとんどないので。
- UNHCR が取り扱った第三国定住の中でも 10 万 8000 人以上と類を見ない規模であったこと、ネパールの難民キャンプがモデルキャンプとして高い評価を受けていたこと、24 歳の若者が祭りの 3 日後に自殺をしてしまったことなどが印象に残りました。
- 平山先生が、答えに窮するきわどい質問（おそらく、ブータンを研究対象とする者として非常に回答に困る内容の質問）を、のらりくらりとかわしていたお姿が印象的でした。
- ブータン南部地域の写真（確かに一般にイメージされる「ブータン」と全然違う）に驚いた。難民の人たちが、「ネパール系」というように一般にイメージされる「ブータン人」とは顔つきや衣装が全然違うことにも驚いた。
- 難民キャンプでのキリスト教の布教や第三国定住後の改宗の話が印象に残った。「どんな宗教を信じるか」は、個人のアイデンティティの根幹に関わる重要なテーマだと思う。
- 幸せの国というイメージの強いブータンにも、宗教や文化の違いによって迫害される人がいて、難民問題もあるのが現実なのだと考えさせられました。
- 難民の第三国定住における（特に高齢者の）異文化適応の難しさはご指摘の通りだと思う。疎外感やコミュニティの繋がりの不足といった課題に対する難民のかたの生の声が印象に残った。
- 途中、映像が途切れるなどトラブルはありましたが、zoom 会議ではトラブルはつきものです。どうか気になさらないでください。（中略）もっとブータンのいろいろな側面を知りたく、セミナーに参加いたしました。私は定年退職した一般人で、普段、このようなお話を伺う機会がなく、大変有意義な時間を過ごすことができました。
- この映像視聴スタイルのセミナーを 4 年も続けられていることが単純にすごいです。国内外／新旧入り混じったバランスの良い映像の選定で、毎回セミナーを楽しみにしています。
- ネット環境のあまりよろしくない中でのブータンからのホスト、おつかれさまでした。
- 前回・今回のような、「普通の」ブータン関連イベントで取り扱わないような内容をまた取り上げてほしいです。



取り上げた映像の紹介



映像の内容

（１３）2024 年度第 13 回ブータン連続セミナー

【概要】

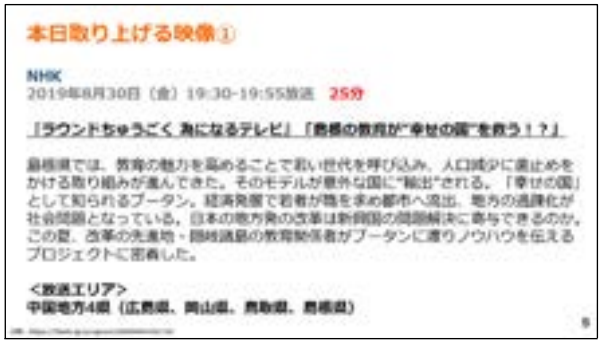
- ■ 日　時：2025 年 1 月 17 日（金）15:00～16:30
- ■ 題　目：「映像作品を通してブータンの諸相を学ぶ（58）―『ラウンドちゅうごく　為になるテレビ』「島根の教育が“幸せの国”を救う！？」（2019 年）他―」
- ■ 発表者：山野靖暁 氏（JICA 草の根技術協力事業（ブータン）　海士町担当ディレクター）
  平山雄大（グローバル協力センター講師）
- ■ 参加者：約 40 名

【参加者からの感想・コメント（抜粋）】

- ・ 参加者の皆さんからの質問も含めて理解を深めることができた。
- ・ 先月、日本ブータン友好協会主催のイベントで、昨年夏にチュカ県を訪れた隠岐島前高校の生徒さんたちの報告を聞きました。関連する活動の一端を、高校生と本日のセミナーでの山野さんそれぞれの視点から伺うことができ、おもしろかったです。
- ・ 前にこの取り組みのお話は何度か聴いていました。実際にブータンへ行った海士町の高校生の話も聴いたので、興味深く拝見しました。質問も多く、盛り上がりましたね。
- ・ コメンテーターの山野様から教育現場の変容の具体的なお話をうかがえてよかった。
- ・ 幸せの国ブータン王国の地域過疎化への取り組み姿勢が垣間見えた。隠岐島前高校の取り組みも知ることが出来て良かった。
- ・ 実際の活動に関わられた方の意見や、活動の実地の様子をリアルに知れた。
- ・ 島根の高校生との交流について良くわかった。
- ・ 質疑応答・意見交換の時間が長く、充実したやり取りから多くを学びました。
- ・ ブータンと日本の若者の交流が見えた。
- ・ 海士町とチュカ県の PBL の取組みの概要がとてもよく理解できました。
- ・ 高校生を通じてブータンと交流をされている先生と直接意見交換会が出来て良かった。
- ・ 映像の中で、ブータンの先生の関わり方の具体的な変化が見られたのが印象的だった。
- ・ 「日本のものをそのまま輸出してもうまくいかない、ブータンならではの学びのスタイルをつくっていかないと～」という、岩本悠さんのお話が印象に残りました。
- ・ 日本のメンバーとブータンのメンバーが相互に学び合っている様子（地域の魅力の見出し方、

教員の伴走方法など）が印象に残った。

- 平山先生の冒頭の紹介、ちょうど 10 年前のブータン勉強会での出会いから今日に至るまでのエピソードに感動した。
- 島根県の事例は以前にどこかで観たことがあるが、改めて、取り組んだこととその効果について感銘を受けた。ここの高校生が将来、どこに居ても高校時代を大切にして、できれば帰って貢献するような気持になれると良いと思う。同じことがブータンの高校生にも伝わることを願う。
- これからのブータンが、勿論日本も同様だが、過疎化についてどう取り組むのか、今のまま各自勝手にやってくれというのか、社会として全体的な取り組みをするのか、興味あります。
- 平山先生のコメントにあった、「失われゆくブータンの相聞歌の継承・振興」が PBL 活動においても魅力的なテーマになるのでは～というお話が興味深かった。
- 地元の高校生がネガティブに考えていた霧をプラスの捉えたところが面白かった。
- 教師の教え方の本音を引き出せたこと。JICA 草の根協力により、教育の価値支援ができたことを喜んでいます。一過性のものに終わらないで、何らかの形で続いていくことを望みます。別の国で教育支援にかかわった経験から、強く感じていることです。
- ブータン連続セミナーとしては 58 回目、そしてブータン勉強会としては 198 回目、というところに敬意を表します。まさに「継続は力なり」ですね。平山先生の映像紹介パートで、さらっと 10 年前の勉強会の話題が出てきて、単純にすごいと思いました。
- 映像紹介→映像視聴→解説・コメント→質疑応答・意見交換の流れが非常にスムーズで、よろしいと思います。
- 日本人が出来るブータンでの地域貢献（お金では無くて）の事例をもっと知りたいです。



取り上げた映像の紹介

映像に出てくるワークショップ

（１４）2024 年度第 14 回ブータン連続セミナー

【概要】

■ 日　時：2025 年 2 月 14 日（金）15:00～16:30

■ 題　目：「映像作品を通してブータンの諸相を学ぶ（59）―スイス人によるブムタンの記録映像（1974～1982 年）前編―」

■ 発表者：高橋洋 氏（日本ブータン研究所研究員／『地球の歩き方 ブータン』編集者）
平山雄大（グローバル協力センター講師）

■　参加者：合計約 45 名

【参加者からの感想・コメント（抜粋）】

- 非常に貴重な映像はもちろんのこと、高橋さん、平山先生のコメントから多くを学びました。
- 映像を通して、過去のブータンを知ることができた。
- 昔のブムタンの様子を見る事ができました。
- 興味深い映像を見ることができた。
- 昔の生活実態を見ることができて、大変興味深く思いました。
- 長年ブータンの取材を続けてこられた高橋さんのコメントが映像に厚みを加えてくれました。
- 英語の字幕が理解し切れなかった。
- 盛りだくさんの記録映像でした。また、質疑応答＆意見交換の時間も質問が止まず非常に濃い時間で、満足しました。
- 50 年前の生活映像で、生活環境、文化の一端を見られてよかった。
- これまでもアルジャジーラのドキュメンタリーやカナダの昔の番組など珍しい映像を取り上げてこられているが、今回も「よく見つけたなあ」というような非常に貴重な映像が取り上げられ、その収集能力に脱帽です。
- 8 ミリ映画の同時録音が可能になった頃の映像のようで、フィルムはコダックかな、カメラはフランスならパテというのかな、なんて懐かしく拝見しました。
- とにかく美しいすばらしい映像でした。今では撮れない。この光と影の感じ。コントラストの強い感じこそブータンですよね。この映像はブータン人が見るべきですね。赤ちゃんのベビーバス、今ではアンティックの鍋です。自分の手をあぶって赤ちゃんの髪を乾かすシーン。泣けました。本当に美しかったのですね。
- 高橋先生と平山先生、多方面の事象にお詳しいふたりの掛け合いが良かった。
- 赤ちゃんの身体にヤクのバターを塗るところが、今の日本でお風呂上りに保湿剤を塗るのと全く同じで面白かったです。赤ちゃんの身体を乾かしてやる時に、お母さんが自分の手を火にかざして温めながらその手で乾かしていたのにはびっくりしました。
- 私が初めてブータンに行った 1982 年の前なのですね。高橋さんのお話も良かったです。
- ブムタンの聖水のお話、学校の歴史のお話、「この世に生まれてきてくれてありがとうの祝福」に関する唇とバターのお話等、平山先生の補足コメントが興味深かった。また、高橋先生も平山先生も「全然ブムタンに行けてない～」と言う割には最近の事情に詳しくて、笑いました。
- 生活環境、文化の一端を見られてよかった。
- 家の掃除やごはんの支度もお祈りしながらやっているお母さん、の話が印象に残っています。
- 日本にブータンの蕎麦粉を使った蕎麦屋さんがあるということに驚いた。
- 映像のはじめの方に出てきた笛について話題になっていましたが、あれはチベットのカンリンと同じで、寺院で使われる楽器です。人間の腿の骨で作られていると聞いて、チベットって怖い所だ、と若い時に思ったこともありました。ブータンの寺院でも使われているのですね。
- 学校での（信教関係なしの）仏教講義や朝礼で歌われる歌のことなどを知ることができ、高橋さんと平山先生のセミナー終了後のトークセッション（？）も、有意義な時間でした。

- 平山先生のお話をもっと伺いたい。
- 毎回興味深い映像をご紹介いただき、ありがとうございます。
- ブータンの人たちが使っていた「万能の刃物」がどんなものかもっと知りたかったです。
- ブータンらしい近代化の動きを教えて下さい。貧富の差は大きくなってきていますか？
- 質疑応答の時間がたくさんあり、良かったです。
- 誰でも自由に参加できるスタイル（しかも無料)、感謝しています。
- テーマにもよりますが、ブータンの人にも参加してもらったら面白いと思いました。素晴らしい映像の紹介、ありがとうございました。

ブムタンが舞台の映画の紹介

ブムタンに関して

（１５）2024 年度第 15 回ブータン連続セミナー

【概要】

■ 日　時：2025 年 3 月 7 日（金）15:00～16:30

■ 題　目：「映像作品を通してブータンの諸相を学ぶ（60）―スイス人によるブムタンの記録映像（1974～1982 年）後編―」

■ 発表者：平山雄大（グローバル協力センター講師）

■ 参加者：合計約 40 名

【参加者からの感想・コメント（抜粋)】

- 最近ブータンは大きく変わって来たが、変わる前のブータンの姿が映像で見られた。
- 80 年代の貴重な映像資料が見られた。
- ブータンの習慣・文化を貴重な映像を通じて知ることができました。大きな変化のうねりがある現在、とても貴重な映像ですね。その映像の存在を知ることができたのもの良かったです。
- 非常に満足：初歩的な疑問なども遠慮なく質問させていただけること。それに対して、快くご教示いただけることから。
- かつてブータンの様々な生活の場面を記録した貴重な映像が見られて大変参考になりました。
- ブータンが好きで、本などでは見ていましたが、映像で見せていただくと、とてもよく分かり、嬉しくなりました。
- 平山さんの参加者からの質問に対する回答が、ブータンの最近の姿を捉えて居て良かったです。

- 平山先生のおっしゃる通り、近代化以前のブータンのカラー動画で貴重だな、と思うのですが、西岡夫人が 60 年代と 70 年代も違うとおっしゃっていたというお話が印象的でした。
- 土鍋づくりや食文化の話が印象的だった。ブータンの人々の生業に興味がある。
- 特に、人間ろくろの土鍋の作り方が面白く、貴重だと思いました。私もスタディツアーに行ってみたいです！
- ブータン南部ではツェチュを行う習慣がなかったものを、政府の働きかけで広めたという話が興味深かった。
- 形の揃ったきれいなザゾを手早く作る様子に目を奪われました。（昔の日本もそうであったように）全ての農作業が手や足や身体を使って行われていて、本当に大変そうでした。
- ブータンの織りも少しかじりましたので、織りとか陶芸の話はとても印象が強かったです。
- チャットでの質問も良いのですが、質問者のお顔も拝見できたらと思いますので、質問の半分くらいはお顔とお声を出していただきたいと思いました。山本さんの笑顔がとても良かったです。進行役ありがとうございました。
  さすがお茶大の学生さんだからか、山本愛理さんの司会は、とても落ち着いていて良かったです。お世話様でした。
- ブータン人が国内外でどのように変化しているのかを知りたい。人口流出は歯止めがかかったのか？オーストラリアの経済成長にも陰りがみられてきたが…。
- 学生や院生に司会・進行を促すのは、良いことだと思います。
- 感想 : 今回はじめてセミナーに参加させていただきました。先月ブータンを訪問し、ブータンをとても好きになって帰国したのですが、本日のセミナーでさらに興味がわきました。『お坊さまと鉄砲』でも描かれていた「民主主義」や地方政治について関心があります。いつか取り上げられるようでしたら、ぜひ参加したいです。どうもありがとうございました。
- 続けてください。
- 山本さん、長い間お世話になりました。一年生の時から、その慣れた司会ぶりに驚いていました。どうぞ卒業後もこれまでの学びを糧にご活躍下さい。
- もっと、もっと早くから、参加したかったと思いました。
- セミナーを継続してくださり大変ありがとうございます。おかげさまで継続してブータンと接する機会いただいております。

ブムタンが舞台の映画の紹介

ブムタンに関して

３．途上国研究・国際協力分野海外調査支援

3.1　実施概要

【目的】

本事業は、本学大学院博士課程（前期・後期）の学生による途上国研究、国際協力に関する現場に根ざした調査研究を支援するため、公募により選定された海外調査への支援を行うものである。

本事業は、従来大きく 2 つ、①「グローバル社会における平和構築のための大学間ネットワークの創成―女性の役割を見据えた知の連携―」事業（2011 年度～）、及び②本学卒業生の故野々山惠美子様の遺贈によりアフガニスタンをはじめとする困難な状況にある開発途上国を対象とした調査・研究・実践のために設立された「アフガニスタン・開発途上国女子教育支援事業野々山基金」（以下、「野々山基金」）事業（2013 年度～）に分け実施されていたが、2023 年度より、全て野々山基金による事業実施へと切り替えられた。

【対象分野】開発途上国、国際協力等に関する分野・テーマ

【支援内容】

20 万円を上限として、航空運賃、ビザ代、予防接種代、海外の調査地での宿泊費、その他グローバル協力センターが必要と認める費用を本学及びグローバル協力センターの規定に基づき支給する。これらの費用の総額が 20 万円未満の場合は実費を、20 万円以上の場合は 20 万円を支給する。

3.2　今年度の募集と選考結果

今年度の募集と選考結果は以下の通り。

【募集時期】

・春募集：2024 年 5 月 15 日（水）～6 月 12 日（水）

・秋募集：2024 年 10 月 11 日（金）～11 月 8 日（金）

【選考結果】

応募者：3 名、採択者：3 名（春募集のみ、秋募集は応募者なし）

【採択者氏名・所属・テーマ・調査先・調査時期】

氏名	佐藤　寛華
所属	ライフサイエンス専攻　食品栄養科学領域　D2
テーマ	2024 年度花蓮地震における被災者の生活ニーズが満たされた避難所運営体制とボランティアの支援活動について
調査国・都市	台湾　花蓮県
調査時期	2024 年 8 月 6 日～9 日

氏名	伊藤　有未
所属	ジェンダー社会科学専攻　M2
テーマ	トンガ王国・エウア島における短期還流型労働者がもたらす多面的な影響
調査国・都市	トンガ　トンガタプ島、エウア島
調査時期	2024 年 7 月 30 日～9 月 18 日

氏名	井上　眞菜
所属	生活工学共同専攻　M1
テーマ	開発途上国における個別排水処理（On-site Sanitation）の周辺土壌のウイルス調査
調査国・都市	スリランカ　ゴール県
調査時期	2024 年 10 月 15 日～29 日

3.3　調査報告書要約

※報告書全文は「VI.資料 2.「途上国研究・国際協力分野海外調査支援」採択者報告書」を参照。

2024 年花蓮地震における
被災者の生活ニーズが満たされた避難所運営体制とボランティアの支援活動について
Evacuation shelter management and volunteer activities which met evacuees' need of living in 2024 Hualien Earthquake

大学院人間文化創成科学研究科
ライフサイエンス専攻 D2 佐藤寛華

【要約】

日本及び低・中所得国では、避難所や難民キャンプにおける被災者の生活ニーズが満たされず、心身ともに支障をきたすことが報告されている。そこで、本研究では、2018 年の震災の教訓をもとに、2024 年に迅速かつ充実した避難所対応に成功した台湾の花蓮県の運営体制を調査し、避難先の環境に問題のある低・中所得国において、どのような改善や工夫が必要なのか考察することを目的とした。本研究では、「台湾仏教慈済慈善事業基金会」（以下、「慈済基金会」）の本部職員 2 人から、花蓮県での避難所運営システムや 2018 年からの改善内容を、実際に避難所で支援を行ったボランティア 3 人から、2024 年の花蓮地震を中心とした支援活動の内容を、グループインタビューにより聞き取った。調査の結果、花蓮県政府は、2018 年以降ボランティア団体を積極的に活用し、事前の役割分担まで行っており、支援物資の迅速で安定した供給を可能にしていた。また、2018 年の避難所では被災者のプライバシー空間が確保されなかったことから、花蓮県政府は、慈済基金会と共に 1 分以内で開設可能なテントを開発した。これにより、避難先で着替えや授乳の問題を抱える女性も人目を気にせず生活できると考えられる。さらに、訓練されたボランティアが、被災者や救助隊員に対してカウンセリングを実施していた。生活のための最低限のニーズを満たすだけでなく、精神面でのケアも、安心して生活できる環境づくりのために必要である。

トンガ王国・エウア島における短期還流型労働者がもたらす多面的な影響

Multifaceted Impacts of Short-Term Seasonal Workers in ‘Eua Island, Kingdom of Tonga

大学院人間文化創成科学研究科
ジェンダー社会科学専攻 M2 伊藤有未

【要約】

トンガ王国（以下、トンガ）をはじめ、南太平洋島嶼国の一部地域において、一定期間を国外で過ごし稼ぎを得て母国へ戻るといった労働移動を繰り返す「短期還流型労動」が盛んである。これによる稼ぎは、国内に住む人々の生活に直結しており、生活費や学費といった日常的に発生する支出だけでなく、短期間に大金を得られるとの理由から、大金を要する物品購入や献金の際に大きく貢献している。短期還流型労働がもたらす多面的な影響が、今後のトンガの開発とどのように関わってくるかを調べることを本調査の目的とした。調査は、トンガの離島の 1 つであるエウア島にて、半構造化インタビューと参与観察を行った。インタビュー結果として、短期還流型労働者によって、トンガの人々の生活は豊かになっているといえるが、その豊かさは当該の世帯ないし親族単位にとどまり、トンガ社会全体の開発に貢献しているとは言い難い。労働者の国外流出はトンガ国内の労働力不足にも影響を及ぼしているが、今後は世帯間での格差を広げる一因になることも推測できる。このような状況が、若年層をさらに国外労働へ向かわせる要因となり、世代を超えて還流的な移動が継続していると考察できるだろう。

開発途上国における個別排水処理（On-Site Sanitation）の周辺土壌のウイルス調査

Investigation of virus in soil around On-Site Sanitation in developing countries

大学院人間文化創成科学研究科

生活工学共同専攻 M1 井上 眞菜

【要約】

し尿排水処理方法として、途上国や中進国では個別排水処理（On-Site Sanitation systems；以下 OSSs）が普及しており、この中でも底のない筒にし尿を流し込み土壌浸透させる型を Pit latrine という。Pit latrine は本来非水洗のトイレに接続されることを想定しているが、昨今はトイレの水洗化が進みトイレ排水量の増加に適応しできず病原微生物リスクの抑制が不十分である可能性がある。これに付随して、実際の OSSs 処理、および土壌浸透による病原リスク低減効果がどの程度なのかは明らかではなく、実態に沿って調査する必要がある。そこで本研究では、実際の運用中 OSSs の周辺土壌に対しヒト糞便汚染指標ウイルス PMMoV（Pepper Mild Mottle Virus）を測定することで、周囲の土壌へのウイルスの伝搬状況を調査することを目的とした。以前研究室では PMMoV 濃度を定量 PCR にて測定してきたが、本調査において農業分野で土壌からの PMMoV の検出として用いられている ELISA（Enzyme-Linked Immuno-Sorbent Assay）を試みることとする。調査方法として、OSSs の普及するスリランカにて家庭用 Pit Latrine および似た型である Soakage pit のそれぞれ 2 カ所を対象とし、各 OSSs 近傍にて 0.5 m および 1.0 m の深さで土壌を採取し PMMoV 濃度を測定した。結果は、複数の個別排水処理施設にて PMMoV が検出され、地点によって差があることがわかった。また、深さ 0.5 m よりも深さ 1.0. m の方が検出量の高い傾向にあった。これらの調査結果を踏まえ、今後の調査では採取地点を絞り OSSs 近傍および距離をとった位置の土壌を採取することで、OSSs からの距離に応じウイルスがどのように輸送されるのか推定する予定である。

４．大学間連携イベント・活動

4.1　五女子大学コンソーシアム合同国内スタディツアー

※詳細は、お茶の水女子大学グローバル協力センターが発行した「2024 年 12 月　五女子大学コンソーシアム合同国内スタディツアー実施報告書」に取りまとめられている（グローバル協力センターのウェブサイトより全文ダウンロード可能)。

（１）事業の背景・目的

五女子大学コンソーシアムは、日本政府のアフガニスタン復興支援において、お茶の水女子大学、津田塾大学、東京女子大学、奈良女子大学、日本女子大学が連携し女子教育支援に取り組む協力枠組みとして 2002 年に締結された。同コンソーシアムのもと、五女子大学は連携し、アフガニスタン女子教育復興のための女性教員研修を実施し、2002 年から 2012 年の間、女性教員など 169 名を受け入れた。同コンソーシアムは、2006 年より支援対象を開発途上国の女子教育に広げている。

各大学から指名された委員がコンソーシアムの事業・活動を検討・決定する連絡協議会（年２回開催）において、地方創生×国際協力の様々な取り組みを実施している島根県隠岐郡海士町（あまちょう、日本海の離島）において、国内の地方創生と国際協力を学ぶ「五女子大学コンソーシアム合同国内スタディツアー」が提案され、実施が決定された。

「五女子大学コンソーシアム合同国内スタディツアー」は、海士町役場及び日本政府の国際協力実施機関である独立行政法人国際協力機構（JICA）と連携し、海士町及び島前地域において、国内の地方創生と国際協力がどう結びついているのか、その現場に直接触れ理解を深めること、同じ関心を持つ他大学の学生との密な交流を通してネットワークを形成することを目的に、2024 年 9 月 2 日から 7 日までの期間で実施された。

本スタディツアー実施に当たっては、アフガニスタンをはじめとする開発途上国の女子教育支援を支援するため、2012 年にお茶の水女子大学卒業生の故野々山恵美子様の遺贈を原資として設立された「野々山基金」を活用した。

（２）実施スケジュール

2024 年 4 月上旬～5 月に各大学が募集選考を実施し、6 月にお茶の水女子大学、東京女子大学、奈良女子大学、日本女子大学から各 2 名、計 8 名の学生の参加が決定した。津田塾大学からは、秋学期開始時期との兼ね合いから応募者がなかった。

参加者決定後、オンラインでの事前学習・打ち合わせを計 4 回（7 月 10 日（水)、7 月 24 日（水)、8 月 7 日（水)、8 月 30 日（金)）実施し、9 月 2 日（月）～2024 年 9 月 7 日（土）にスタディツアーを実施した。その後、海士町関係者、五女子大学コンソーシアム関係者出席のもと、オンラインでの報告会を 10 月 7 日（月）に開催した。

（３）概要：

台風 10 号の影響が懸念されたが、ツアー中は天候に恵まれ、おおむね予定通り日程を終了した。スタディツアーでは、地方創生と国際協力に取り組む海士町の現状と課題について、海士町幹部職員から直接説明を受けるとともに、海士町と JICA（独立行政法人国際協力機構）との連携に関する視察・説明、ボランティア活動、島への留学生・島に移住した若者等との意見交換など、多彩なプログラムをこなした。

参加学生は、海士町が提供したシェアハウスで 1 週間弱寝起きした。これにより、異なる大学間の交流が図られ、それぞれに新たな気づきが生まれた。

報告会では、ツアー参加学生から、スタディツアーで学んだこと、現地実習前に立てた目標の達成状況、今後に向けた抱負などの発表があった（大学の授業と重なり、リアルタイム参加ができなかった学生は録画での発表）。

4.2　国際協力・開発途上国・SDGs に関する単位互換（津田塾大学・奈良女子大学）

（1）背景・経緯：

2023 年 10 月の五女子大学コンソーシアム連絡協議会において、「五女子大学内で国際協力・開発途上国・SDGs に関する科目の単位互換を行う」事業が提案され、各大学で具体的なプロセスを確認することとなった。

その後、2024 年度前期において、津田塾大学から「2024 年度内実施を目指し進める」との回答を得たが、他大学からは意志決定・検討に時間を要する旨の回答があった。コンソーシアムの具体的な活動実施を推進する、との観点から、津田塾大学との間の単位互換を先行し進める方針をお茶の水女子大学から四女子大学に諮り、同意を得た。

双方の学内での検討・協議の結果、コンソーシアム協定に基づく事業として、2024 年度後期より津田塾大学との間で国際協力・開発途上国・SDGs 等に関する科目の単位互換（双方の学生の科目履修を可能とする）を行うこととし、2024 年 6 月、津田塾大学との間で「コンソーシアム」協定に基づく単位互換覚書を締結した（署名者は石井理事・副学長）。

お茶の水女子大学から残る 3 女子大に対し、引き続き単位互換に関する具体的検討を働きかけたところ、2024 年 10 月のコンソーシアム連絡協議会において、奈良女子大学から「単位互換に向け、オンラインで実施可能な授業があるか確認中」との表明があった。その後の協議の結果、2025 年度からの「オンラインでの授業実施を前提とした」単位互換の実施に向け、両大学内で調整を進めることとなった（他大学からは次年度からの実施は困難との感触表明あり）。

調整の結果、津田塾大学との前例に倣い、コンソーシアム協定に基づく事業として、2025 年度前期より奈良女子大学との間で国際協力・開発途上国・SDGs 等に関する科目の単位互換（双方の学生の科目履修を可能とする）を行うこととし、2025 年 1 月、奈良女子大学との間で「コンソーシアム」協定に基づく単位互換覚書を締結した（署名者はお茶の水女子大学側が石井理事・副学長、奈良女子大学側が中山満子副学長）。

（2）概要・現状：

2024 年度後期から開始された津田塾大学との単位互換では、お茶の水女子大学から津田塾大学への単位互換に基づく履修はなかったが、津田塾大学からは計 5 名の学生がお茶の水女子大学で履修を行った。奈良女子大学との単位互換では、2025 年 3 月より双方の大学において学生の募集を開始した。

【お茶の水女子大学から津田塾大学・奈良女子大学に提供する授業科目例】
平和と共生演習、NPO 入門、教育開発概論、教育開発演習 II、国際協力特論、国際協力学
（「国際協力学」は、津田塾のみ対象）

５．その他の国際協力関連活動

5.1　海外・日本国内各機関との連携

（1）五女子大学コンソーシアム（連携協議会の開催）

アフガニスタンの女子教育に関する支援、またその他開発途上国の女子教育に関する支援にかかわる事業を実施することを主な目的として 2002 年に締結された「五女子大学コンソーシアム」（これまで 4 回更新、最新は 2022 年 11 月）の事業・活動の活性化のため、本年度は各大学から指名された委員による連絡協議会を 2 回開催した。

【2024 年度第 1 回連絡協議会】

■　日　時：2024 年 5 月 20 日（月）　15:00～17:00

■　場　所：お茶の水女子大学　学生センター４階　第５会議室

■　議　事：

1. 連絡協議会委員・事務局に関して
2. 五女子大学コンソーシアム・ファクトシートに関して
3. 2024 年度のコンソーシアム活動案に関して
（大学間単位互換、合同国内スタディツアー　等）
4. 各連絡協議会委員からの共有事項
5. その他

【2024 年度第 2 回連絡協議会】

■　日　時：2024 年 10 月 25 日（金）　13:00～14:30

■　形　式：オンライン（Zoom）

■　議　事：

1. 五女子大学コンソーシアム・ファクトシートに関して
2. 2024 年度・2025 年度のコンソーシアム活動に関して
（大学間単位互換、合同国内スタディツアー　等）
3. 各連絡協議会委員からの共有事項
4. その他

上記 2 回の連絡協議会、その後のメール等を通じた検討・協議により、2024 年度は以下のような活動の実施及び活動実施に向けた検討が行われた。

① 各大学が実施する国際協力や開発途上国に関連する事業・活動等の情報を掲載し、コンソーシアム間の現状把握や連携活動の検討・実施に資する目的で作成した「ファクトシート」の随時更新・国際協力・開発途上国関連の研究者情報の追記（連絡協議会で記載情報を確認）

② 五女子大学合同国内スタディツアー（詳細は「4.1　五女子大学コンソーシアム合同国内スタディツアー」を参照）

③ 各大学が開講する国際協力・開発途上国・SDGs に関する科目の単位互換の実施（詳細は「4.2 国際協力・開発途上国・SDGs に関する単位互換（津田塾大学・奈良女子大学）」を参照）
④ 各大学で行われている国際協力・開発途上国・SDGs 関連イベント情報の共有・相互参加の促進（継続実施、本学からは SDGs セミナー等の情報を共有）

【連絡協議会体制】　※2025 年 3 月現在

氏名	所属
【委員】	
由良　敬（座長）	お茶の水女子大学　グローバル協力センター長
池野　みさお	津田塾大学　津田梅子記念交流館長
竹内　敦司	東京女子大学　副学長
高須　夫悟	奈良女子大学　学長補佐
宮崎　あかね	日本女子大学　副学長
【事務局】	
小田　亜紀子	お茶の水女子大学　グローバル協力センター副所長
平山　雄大	お茶の水女子大学　グローバル協力センター講師
駒田　千晶	お茶の水女子大学　グローバル協力センターアカデミック・アシスタント

（2）島根県隠岐郡海士町との連携（JICA 草の根技術協力事業への協力）

島根県隠岐郡海士町が実施する JICA 草の根技術協力事業「地域活性化に向けた教育魅力化プロジェクト―ブータン王国における地域課題解決学習（PBL）展開事業―」のプロジェクトメンバーとして、グローバル協力センター平山講師が事業運営に携わると同時に、島根県立隠岐島前高等学校の課外活動「グローバル探究」の実施に貢献した。

島前高校の課外活動である「グローバル探究」は、同校が採択されたスーパーグローバルハイスクール事業「離島発 グローバルな地域創生を実現する「グローカル人材」の育成」の枠組みの中で 2016 年度に始まったもので、選ばれた 4 人のチームで年度初めから話し合いを重ね、探究活動のテーマを定めた後、地域での調査を踏まえてブータンへと向かい、帰国後は探究活動の分析、実践、全体のまとめ、最終報告等を行っていくという 1 年間のプログラムである。2016 年と 2017 年は 7～8 日間の日程で西部（プナカ県等）を、2018 年には 9 日間の日程で東部（タシガン県等）を訪問した。ブータンでのプログラムは、学校での交流、インタビュー調査やアンケート調査、都市・農村でのホームステイ、その他各年の探究テーマに沿った活動で、2019 年は 11 日間とそれまでよりも長めの日程を確保し、滞在前半はチュカ県で開催された PBL（Project Based Learning、課題解決型学習）ワークショップに参加し、ブータン人の高校生たちとの混成チームで「日本人観光客が思わずチュカ県を訪れたくなるような 3 分間の観光 PR 映像を作成する」というミッションに取り組んだ。そしてコロナ明け以降は、海士町が実施する上記 JICA 草の根技術協力事業と連携しながら行われてきた。

2024 年の「グローバル探究」チームは 7 月 29 日～8 月 7 日の日程でブータンを訪問し、チュカ県内の各高校の生徒たちと寮生活をしながら、もしくは生徒の自宅にホームステイをしながら朝礼や授業に参加したり、各学校の PBL クラブで自身の探究活動に関して発表したりした。また、王立ブータン大学パロ教育カレッジ、チュカ・ゾン（県庁兼僧院）、伝統医療院、伝統技芸院、ロイヤル・アカデミー等を訪問し探究活動を行った。

高校の授業に参加

PBL クラブでのワークショップ

寮生との料理作り

チュカ・ゾンのラム・ネテン（座主）と

(3) セネガル教育大臣他の視察受け入れ

2025 年 1 月 22 日（水）、独立行政法人国際協力機構（JICA）の招へいにより来日したセネガル共和国国民教育省のムスタファ・マンバ・ギラシー大臣他一行が本学を訪問し、文京区立お茶の水女子大学こども園の視察を行うとともに、石井クンツ昌子・国際担当理事らとの意見交換を行った。この訪問は、JICA から課題別研修「乳幼児ケアと就学前教育」のコースリーダーである基幹研究院人間科学系浜野隆教授に対しこども園視察の打診があり、グローバル協力センターが窓口となり受け入れ調整を行ったことにより実施された。

日本政府・JICA はこれまでセネガルに対し、理数科教育分野などを中心に協力を行っている。また、お茶の水女子大学では、2006 年度から JICA の委託を受け継続して実施している幼児教育分野の課題別研修で、セネガルからの研修員を 20 数名受け入れている。

今般の訪日は、2024 年 3 月のセネガルでの政権移行後、日本の教育制度や実践から学ぶべく、日本訪問の希望を新政府が表明したことによるもの。ギラシー大臣は日本の教育全般に高い関心

を示され、就学前教育の現場視察の要望があったことから、こども園への視察が実現した。

大臣一行は、こども園森園長・山下施設長の案内により、年齢の異なる園児の様子を視察するとともに、園の運営体制についての説明を受けた。さらに、５歳児との歌や独楽などを通じた交流も楽しまれた。視察後の意見交換では、大学構内のこども園、附属幼稚園、保育所について、また、大学の今後の国際貢献方針やグローバル戦略についての質問が出され、大臣一行が保育施設から高等教育研究機関までを備えたお茶の水女子大学訪問により、自国の教育開発への大きな示唆を得た様子がうかがえた。

こども園での園児との交流

こども園での園児との交流

石井理事・副学長との意見交換

意見交換後の集合写真

ギラシー国民教育大臣への記念品贈呈

デュフ在京特命全権大使への記念品贈呈

（4）英国幼児・初等教育研究者の視察受け入れ

2025 年 2 月 7 日(金)及び 14 日（金）、東京学芸大学発ベンチャーIMPULS[1]代表の松田菜穂子氏、英国ラフバラー大学客員教授の Ruth Trundley 博士[2]、及び英国デボン教育センター算数数学アドバイザーの Stefanie Burke 博士が附属幼稚園を訪問し、同園の公開保育研究会へのオブザーバー参加（7 日）、及び同園髙橋副園長・佐藤教諭との意見交換（14 日）を実施した（7 日は英国研究者 2 名と通訳のみ、14 日はデンマーク・コペンハーゲン大学研究者の Mr.Bahn も同席）。

この訪問は、IMPULS が Ruth Trundley 博士の率いる授業研究プロジェクトチームとの間で実施している日本の幼稚園・子ども園等の保育研究や小学校の授業研究に関する共同研究に関し、日本の幼稚園における保育研究の役割・機能理解のため、英国研究者が附属幼稚園の公開保育研究会への参加を希望したことによるもの。IMPULS 松田氏から課題別研修「乳幼児ケアと就学前教育」のコースリーダーである基幹研究院人間科学系浜野隆教授に対し打診・相談があったことから、グローバル協力センターが窓口となり受け入れ調整を行った。

14 日の意見交換は通訳を交えインタビュー形式で行われ、先方からは公開保育研究会へのオブザーバー参加を踏まえた所感が共有されるとともに、研究会や園の運営、保育・教育方針、園児への接し方等に関する質問が出された。活発な意見交換の内容から、研究者らが附属幼稚園での視察で様々な気づきや示唆を得たことがうかがえた。

【附属幼稚園視察・意見交換の様子】

左から Ms.Burke、グローバル協力センター副センター長、Dr.Trundley（公開保育研究会にて）

附属幼稚園関係者へのインタビューの様子

左から Ms.Burke、附属幼稚園髙橋副園長、Dr.Trundley、同園佐藤教諭、Mr.Bahn

[1] https://impuls-jp.com/　（最終閲覧 2025/02/17）

[2] Ruth 博士らが所属する ESRC 初等数学学習センター（CEML：Centre for Early Mathematics Learning）は、幼児期及び小学校低学年における算数の学習に焦点を当てた先駆的な研究センターであり、英国ラフバラー大学を拠点に、オックスフォード大学や UCL を含め英国内の 9 大学と連携した研究に取り組んでいる。

(5) ウズベキスタン教育関係者の視察受け入れ

2025 年 2 月 20 日（木）8:30～11:00、JICA の招へいにより来日したウズベキスタン就学前・学校教育省教育研修・職能開発部局主任専門官 Kuchkarova Nargiza 氏一行（JICA、（株）パデコ等、随行者含め計 13 名）が附属小学校を訪問し、授業見学及び附属小学校の取り組みに関する質疑応答・意見交換を行った。この訪問は、基幹研究院人間科学系浜野隆教授・グローバル協力センター員に対し視察の依頼があり、グローバル協力センターが窓口となり受け入れ調整を行ったことにより実施された。

ウズベキスタンは 1991 年のソ連からの独立以降、民主化及び市場経済への移行に取り組んできた。教育分野では経済発展を支える人材育成が求められており、「新ウズベキスタン開発戦略 2022-2026」においては教育の質的向上が主要な目標に掲げられているが、依然として多くの課題を抱えている。今回の招へいは「教育評価分野のニーズアセスメントのための情報収集・確認調査」の一環で、ウズベキスタンの教育関係者が日本の教育評価やエビデンスに基づく政策立案（Evidence-Based Policy Making: EBPM）を学び、自国の政策決定に活用するための理解を深めることを目指すものである。就学前・学校教育省の主任専門官の他、現職教員研修機関、各州の現職教員研修センター、教員養成機関の副学長、部長、部局長が来日した。

一行は附属小学校片山守道副校長・グローバル協力センター員、社会科の岩坂尚史教諭の案内により、3 年生の算数の授業を見学した。その後、附属小学校の概要、運営体制、研究実践等に関して説明を受け、活発な質疑応答・意見交換を行った。

ウズベキスタン教育関係者一行

算数の授業見学

質疑応答・意見交換セッション

集合写真

（6）JICA 地球ひろば映画上映会・講演会への協力

2025 年 2 月 23 日（日）に開催された JICA 地球ひろば主催「『ブータン 山の教室』映画上映＆講演会」（於 : JICA 市ヶ谷ビル 2 階国際会議場）にて、グローバル協力センター平山講師が「映画『ブータン 山の教室』の場面から考えるブータンの「今」」と題する講演を行った。

パオ・チョニン・ドルジ監督のデビュー作となる『ブータン 山の教室』（原題 Lunana: A Yak in the Classroom）は、日本に限らず世界各国で上映され、第 94 回アカデミー賞国際長編映画賞の最終リスト 5 作品にも選ばれた作品である。あくまでフィクションであるが、「標高 4,800 メートルにある秘境ルナナ村」を舞台に、小学校に赴任した教師と村の人々、子どもたちとの交流が鮮やかに描かれている。

当日は小学生、中学生、高校生を含め 80 名ほどの参加があった。

当日の様子

講演する平山講師

5.2　学生の国際協力活動支援

（1）「共に生きる」スタディグループについて・説明会開催

「共に生きる」スタディグループとは、国際協力や平和構築に関心を持ち「共に生きる」社会について自主的に学習・活動する学生のグループであり、グローバル協力センターはその活動を様々な形で支援している。グループのメンバーは、センターやメンバー有志が企画したイベントや勉強会にそれぞれの関心に応じて参加することができる。これらの学生企画イベントの案内、

センター企画のイベントの案内、および、国際機関、NPO 等のセミナー・イベント情報等については、スタディグループのメーリングリスト（登録メンバー数は 150 名）にて発信している。今年度は 118 件の情報配信（2025 年 3 月 7 日現在）を行った。

グローバル協力センターでは、毎年「共に生きる」スタディグループ説明会を実施しており、今年度は 5 月 13 日に対面形式で開催した。説明会では、新規メンバーの参加を呼びかけるとともに、途上国の教育支援や社会課題の解決を目指した活動をしている学生グループ・学生の紹介を行った。

【概要】

- 日　時：2024 年 5 月 13 日（月）12.30～13:00
- 場　所：生活科学部本館 126 室
- 内　容：「共に生きる」スタディグループについて
  国際協力活動に取り組む学生団体「STUDY FOR TWO お茶大支部」による活動報告、公益社団法人セカンドハンドで活動する学生の報告
- 参加者 14 名

SFT お茶大支部の活動紹介

公益社団法人セカンドハンドでの活動紹介

（2）JICA 東京特設インターンシッププログラムの実施

JICA の国内事業拠点である JICA 東京（所在地：渋谷区西原 2-49-5）より、同機関が毎年度独自に実施する特設インターンシッププログラム枠の提供がなされ、学内での公募・選考の結果、３名の学生（文教育学部人間社会科学科 2 年、理学部生物学科 4 年、博士前期課程 2 年・人間文化創成科学研究科理学専攻）が参加した（東京大学等他大学生も参加。全体人数 10 名弱）。

【概要】

- 実施期間・場所：2024 年 8 月 22 日（木）～27 日（火）（一部週末含む）・JICA 東京
- 内容：JICA 東京が実施する各種事業の説明、開発途上国から来日し JICA 東京に滞在する行政官等との交流、国際理解教育を実施する教員間の議論への参加等
- 実施にあたり、参加学生から誓約書を取り付け、保険加入を義務づけ、グローバル協力センターと JICA 東京とで覚書を締結。

【参加学生の所感（グローバル協力センターのウェブサイト記事から抜粋）】

インターンシッププログラムを通して、JICA は国際協力に関わる人のつなぎ役になっていることを強く感じました。研修員を、企業を、教員を、個人をつなぎ、国際協力の輪をつくる先頭を走るのが JICA であると思います。このような「つなぐ」役割は、長きにわたる研修や質の高い事業を通して多くの人や組織からの信頼を得てきた JICA であるからこそできる国際協力の形であるとも思います。国際協力は様々な強みをもったアクターがそれぞれに活動することで成り立っているものであるため、他のアクターはどんな活動をしているかも興味が湧きました。また、私の専攻分野である教育と国際協力についての専門性を高めていきたいと思います。

(3) 学生自主活動の支援

グローバル協力センターでは、「共に生きる」スタディグループメンバーの学生が実施・参加した以下のような活動の側面支援、発表機会（報告会開催、ウェブサイトでの掲載など）の提供等を実施した。

1） STUDY FOR TWO お茶の水女子大学支部の支援

グローバル協力センターでは、現在全国 35 の大学に支部を持つボランティア学生団体 STUDY FOR TWO お茶の水女子大学支部の活動の側面支援を実施している。今年度も活動を紹介・報告する場の設定、教科書在庫保管・整理等の場所提供、活動広報等の支援を行った。

【学生による報告】

タイトル：STUDY FOR TWO お茶の水女子大学支部 2024 年度活動報告

STUDY FOR TWO は現在全国 35 の大学に支部を持つ、ボランティアの学生団体です。「勉強したいと願うすべての子どもたちが勉強できる世界に」「FOR ME、 FOR TWO のボランティアが身近になる世界に」という 2 つの活動理念を軸として活動しています。学生から教科書を寄付していただき、新学期に定価の半額以下の値段で再販売しています。教科書販売の売り上げの一部を寄付し、日本の大学生と途上国の子どもたちの教育を支える活動を行っています。

現在、お茶の水女子大学支部では 1 年生から 4 年生までの約 10 人で活動しています。主な活動として、週 1 回のミーティングと年 2 回の教科書販売、そして学内や寮に設置した回収 BOX による教科書回収を行っています。また、徽音祭では本のフリーマーケットを出店し、学内外の多くの方に立ち寄っていただきました。

今年度の新たな試みとして、教科書の回収 BOX の装飾を一新しました。ミーティングで意見を出し合い、学生に私たちの活動を知ってもらったうえで、教科書を寄付しよう、と思ってもらえるデザインにしました。支部の SNS アカウントを利用した広報活動にも力を入れ、1 年を通して多くの学生にたくさんの教科書を寄付していただくことができました。また、10 年を超える支部の活動の中で受け継がれてきたものを大切にしつつ、販売や回収活動で新しい仕組みを導入した

り、新しい試みを実施したりするなど、日々の活動をよりよくするために模索を続けています。

教科書販売や徽音祭のフリーマーケットを多くの方にご利用いただき、1 年間で合計約 360 冊の本を売り上げ、国際 NGO の Room to Read を通じて、20 万円以上をタンザニアの女子教育プログラムと識字プログラムに寄付することができました。日頃の頑張りの成果として、秋の販売と徽音祭とで売り上げ目標金額を超えることができたことは、支部全体の大きな励みとなりました。

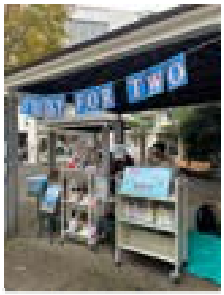
STUDY FOR TWO は 2024 年から NPO 法人となり、2025 年には設立 15 周年を迎え、さらなる発展を目指しております。お茶の水女子大学支部も、これまでに得た成果や見つけた改善点をもとに、今まで以上に団体に貢献し日本や途上国の教育支援を行っていくために、尽力していきたいと思っております。

最後に、大学の学生や職員の皆様をはじめ、日頃より私たちの活動にご理解をいただき協力してくださる方々に、深く御礼申し上げます。とりわけ、私たちの作業や販売などの活動に場所を貸してくださるなど、手厚くサポートしていただいておりますグローバル協力センターの皆様にはこの場を借りて、御礼申し上げます。皆様のお力添えを無駄にしないよう努めて参ります。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

（STUDY FOR TWO お茶の水女子大学支部 2024 年度代表　太田千尋）

春の教科書販売の様子

教科書回収 BOX



徽音祭での活動の様子

2）お茶大パレスチナを想う会

2024 年 6 月下旬から 7 月下旬にかけ、4 名のお茶大生が構内でパレスチナ連帯のためのスタンディングデモを行い、パレスチナ情勢に関する啓発や、募金（クリック募金）の呼びかけを行った。センターでは、デモで配布するちらしの印刷等の支援を行った。

3）その他（国際協力活動に参加した学生の報告記事掲載）

「共に生きる」スタディグループメンバーの学生が、自主的に国際協力関連活動に参加した経験をグローバル協力センターホームページに報告した。

【学生による報告】

タイトル：JICA 筑波主催「大学生・大学院生向け国際協力理解講座」参加報告

8 月 19 日（月曜日）～8 月 23 日（金曜日）までの 5 日間、JICA 筑波が主催する「大学生・大学院生向け国際協力理解講座」に参加しました。農業技術を学ぶ農業コースと、国際協力、特に開発途上国での援助に関心がある学生向けの国際協力実務講座があり、私は後者のプログラムに参加しました。最初の 2 日間はオンラインで行われ、約 40 名の学生が参加していました。

1 日目は、国際協力の意義や日本の ODA について幅広く学びました。また、オンラインでミャンマー事務所の方から在外事務所職員の仕事内容を聞くことができました。プロジェクト実施までには、他機関との役割分担の調整から現地調査に至るまで多くのプロセスがあり、全体を統括するジェネラリストとしての側面が強いということが分かりました。国内の状況が不安定な中でも現地のニーズを拾い、自分にできることを模索しながら働いている姿はシンプルにかっこいいなと思いました。

2 日目は、南米やアフリカで生活改善事業を実施している NGO の方や、アフリカで「みんなの学校」プロジェクトに携わってきた開発コンサルタントの方からこれまでの事例を紹介していただきました。国際協力の現場には多様なアクターが存在することを実感するとともに、「草の根の国際協力」を実現するためには 1 つの家庭や 1 つの学校といった小さい規模でのアプローチを地道に続けていくことが大切だと学びました。

3 日目からは JICA 筑波でのグループワークを通した研修となり、オンラインで顔を合わせていた学生たちに会えた瞬間は本当に嬉しかったです。それだけでなく、同じように国際協力に関心をもつ学生たちとの交流を通して、勉強へのモチベーションが高まるとともに、異なる視点からの鋭い意見に刺激をもらいました。

グループワークでは、PCM（プロジェクト・サイクル・マネジメント）研修という実際の現場でも使用されている手法を体験したのですが、とても難しくて面白かったです。1 日半かけて途上国の課題解決について考えるのですが、まず何が中心問題なのか、その原因は何かを飛躍しないように特定したり、そこから問題系図やアプローチ選択をしたりする必要がありました。グループ内で意見がぶつかることもあったのですが、みんなで話し合い、考え続ける時間は楽しかったです。講師の先生からは「鳥の目でみる」（客観的に状況を把握する）こと、「ないものはない」（現地リソースを活用する）などの重要な視点を学ぶことができました。

他にも、ウガンダからの研修員とのランチ会や JICA 職員の方々とのキャリア相談会など、貴重な機会が盛りだくさんのプログラムでした。

最後に、今回のプログラムを通して、同じ志をもつ学生との出会い、国際協力を仕事とする多くのロールモデルとの出会いから、自分がこれからどのように国際協力に関わりたいのか見えて

きた気がします。本プログラムで得た学びを生かしながら、アクターとして再会できるよう頑張りたいです。

（文教育学部言語文化学科 3 年　矢野紗彩）

グループワークの様子

ウガンダからの研修員との 1 枚

(4) 徽音祭（大学祭）における展示・発表

2024 年 11 月 9 日・10 日の 2 日間開催された徽音祭（大学祭）の学術企画として、お茶の水女子大学生による国際協力活動の報告（発表及び展示）を行った。具体的には、1) 海外実習科目「国際共生社会論実習」の報告、2）五女子大学合同国内スタディツアーの報告（お茶の水女子大学から参加した 2 名）、3)JICA 東京インターンシッププログラム参加報告、4）お茶大パレスチナを想う会の活動報告、5）公益社団法人セカンドハンドで活動する学生の活動報告　を行った。

【学生による報告】（グローバル協力センターのホームページ記事より抜粋）

1）海外実習科目「国際共生社会論実習」成果発表（第 75 回徽音祭学術企画）

①徽音祭発表（ブータン）

11 月 9 日(土曜日)に、徽音祭にてブータンでの現地調査の成果を報告しました。会場に展示するポスターを各自作成し、当日展示しました。また、履修生で協力してブータン写真集と現地調査の様子を紹介する動画を作成し、ポスターとともに展示・放映しました。口頭での発表では、ブータンという国の紹介をしたあとに、現地調査の様子、そして履修生一人ひとりの調査結果を報告しました。会場は満席となり、実りのある発表ができたと思います。今回足を運んでくださった一人でも多くの方に、ブータンに興味をもっていただけたら嬉しいです。

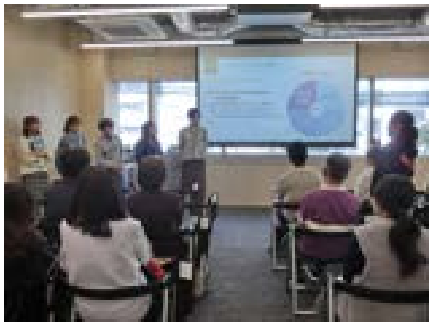
ブータンという国は日本での認知度が低く、どこに位置しているのか分かる人は多くないのではないかと感じています。その中で、履修生はまずブータンという国について学ぶことから始め、その過程でブータンが抱えているさまざまな課題を知りました。そして、各自の興味に応じた「教育」「建築」「宗教」という観点から調査を行いました。その調査結果は各自が予想していた結果とは違うものもありましたが、その一面も含めて文献調査のみでは得ることのできない

ブータンの一面を伝えることができました。現地調査の重要性も含めて、有意義な調査結果を報告できたと思っています。

私自身、このような機会がなければブータンという国について知る機会はなかったと思います。現地調査を通して、ブータンの人々の温かさを肌で感じ、ブータンという国の良さをより多くの方に知ってほしいと強く感じました。本授業は 6 月から事前学習が始まり、8 月に現地調査、帰国後の 10 月に事後学習を行いました。約 5 ヶ月間の活動を通して、ブータンという国に対する理解はもちろん、自分自身の内面での成長を実感することができました。本授業の集大成として開かれた報告会は、自分自身が感じたことをさらに深く理解する非常に良い機会となりました。今回の経験を無駄にせず、さらに高みを目指して努力を続けたいと思っています。

（文教育学部人間社会科学科 2 年　渡辺夢子 ）

クイズの様子



質疑応答の様子

②徽音祭発表（カンボジア）

11 月 10 日（日曜日）午後 12 時から 12 時 40 分までの 40 分間、国際交流留学生プラザ 2 階多目的ホール C にて「国際共生社会論実習」を履修しカンボジアでのスタディツアーに参加した学生 4 名の調査研究の成果を発表しました。来場してくださった方々に私たちが学んだことについて楽しく知ってもらえるようにクイズや動画を準備しました。また、9 日、10 日の 2 日間にわたり、各自の調査研究テーマの内容をまとめたポスターの展示、カンボジアについての紹介動画を上映しました。

発表では、参加者の方から「調査結果と考察の間に飛躍が感じられる」「言葉の定義が不十分な所がある」という有り難いご指摘をいただきました。短い時間の中で、論理の飛躍が無いように、伝えたいことを過不足無くまとめることの難しさを改めて感じました。カンボジアについての予備知識の無い方に、瞬時に理解してもらうことができるよう、言葉や構成を考えることが大切だと痛感しました。ご指摘をいただくまでは、この成果発表会に対して「単に自分が学んだことを伝えるだけの場」という意識でいました。しかし、このようにフィードバックをいただいたことで、発表とは、自分の学びを他者に共有し、自分の発表から他者に何かを感じてもらったり考えてもらったりする、学びの相互作用の場であるということに気づかされました。自分の学び

を発信することの意義や責任について再認識することができ、有意義な時間を過ごすことができました。

6 月からこの発表会まで、履修生 4 人と共に事前学習、現地調査、事後学習に取り組んできました。ふとした素朴な発見や疑問、お互いの研究テーマについて気軽に話し合うことができ、共に学ぶ仲間がいたからこそ、より深い学びを経験することができたように思います。履修生皆で共に考え、成長できた貴重な時間でした。この授業を通して得られた沢山の「気づき」について、考えることを止めず、さらには新たな自分の行動の原動力にし、今後の人生に活かしていきたいです。自分とは異なる文化や習慣、価値観に触れ、自分の視野が大きく広がる瞬間の「ワクワク」を大切にし、これからも積極的に学んでいきたいです。

（文教育学部人文科学科 1 年　酒井友里）

クイズの様子

発表の様子

２）海士町スタディツアー活動報告

11 月 9 日（土曜日）徽音祭にて、海士町スタディツアーに参加したメンバーのうち、お茶の水女子大学の 2 名が発表を行いました。まず海士町の基本情報やスタディツアーの概要を説明し、6 日間で行ったことを具体的に紹介した後、それぞれが感じたことや学んだことを話しました。隣の部屋ではポスターも掲示していましたが、そこには収まらない学びや感動を、たくさんの写真も交えてお話しました。

2 人が共通して感じたことは、海士町の居心地の良さと前向きさでした。海士町は海に囲まれ稲作も盛んな自然豊かな土地で、風景の美しさをスライドの写真からも感じていただけたかと思います。また、すれ違った人誰とでも気軽にあいさつできる人の温かさも感じました。そして海士町には、マイナスなことも発想の転換でプラスにかえて生きる「ないものはない」精神があります。海岸清掃でゴミの中から貝を見つける楽しさを見いだしていたエピソードや、町役場の幹部の方の「何もないなら面白いことをみんなでしよう」という考え方も紹介しました。

スタディツアー参加後、海士町の魅力を多くの人に知ってもらいたいと思っていたため、徽音祭で発表の機会をいただくことができ光栄でした。会場の方から鋭いご質問があり、回答に少々

困る場面もありましたが、発表を聞いて興味をもっていただけて嬉しかったです。スタディツアーを通して考えた「豊かさとは何か」は、今後の学生生活でも、社会人になってからも追究していきたいと思います。

（生活科学部人間生活学科生活文化学講座３年　山田有紗）

海士町スタディツアー参加者による活動報告

質疑応答の様子

３）徽音祭展示報告（セカンドハンド）

徽音祭にて、カンボジアの女性が作った縫製品の展示と活動報告を行いました。ここでは、私が活動を始めたきっかけを中心に、徽音祭に出展・発表した感想について書かせていただきます。

カンボジアは、個人的に思い入れのある国でした。中学生の時、人生で初めての海外旅行として行った場所がカンボジアだったからです。その時、カルチャーショックという言葉で片付けることができないほどの衝撃を受けたことを今でも覚えています。小さな女の子が一生懸命にマグネットを売り続けてきたこと、至るところで聞こえる若者たちの笑い声、バイクで溢れかえる活気に満ちた街並みと歴史を感じさせる静謐な遺跡群、その全てに圧倒され、目にした光景が脳裏に焼きついて離れませんでした。

大学に入った私は「もう一度カンボジアを訪れ、その現状を自分の目で見たい」と思うようになりました。そこで、グローバル協力センター企画のカンボジアスタディツアーに参加し、調査テーマを携えてカンボジアに再訪することになりました。私は普段ジェンダーについて学んでいることもあり、「カンボジアにおける女性活躍」をテーマに選びました。調査を通して、現地の女性たちが仕事と家庭の両立に奮闘しながらも、仕事でスキルを身につける機会の少なさに苦しんでいる現状を目の当たりにし、帰国後もインタビューした女性たちの姿が頭から離れませんでした。

この経験をきっかけに、私は香川県の公益社団法人「セカンドハンド」の活動に参加することにしました。この団体は、カンボジアの女性たちに縫製技術を教えたり、女性が作った縫製品を

日本で販売したりすることで、女性の経済的自立を支援しています。私は今回、徽音祭でその縫製品を展示・紹介するとともに活動報告を行いました。

イベントでは、多くの方が足を止め、普段目にしない製品に興味をもってくださいました。会話を通じて、お客様一人ひとりが考える国際協力や、カンボジアに対する印象を知ることができ、参加したことの意義を強く感じました。また、同じブースではパレスチナ支援やスタディツアーの展示も行われており、さまざまな形で国際協力に取り組む学生たちが交流する場としても本当に素敵な機会だったと思っています。

カンボジアへのスタディツアーをきっかけに自分の毎日がこんなにも変わるとは、正直想像もしていませんでした。視野を広げてくれる機会を提供してくださったこと、今でもずっと感謝しています。この場を借りて、関わってくださったすべての方に心よりお礼を申し上げます。また、これからもスタディツアーや徽音祭の出店が続き、多くの人の交流の場があり続けることを願っています。

（生活科学部人間生活学科 3 年　三枝馨）

セカンドハンドの活動報告をする筆者

カンボジアの女性が作った縫製品の展示の様子

4）JICA 東京インターンシッププログラム参加報告

夏休みに開催された JICA 東京の特設インターンシッププログラムに参加させていただきました。5 日間のインターンシッププログラムは、JICA 事業を説明していただいたり、職員さんとの座談会に参加させてもらったり、開発途上国から来日した研修員向けの福利厚生プログラムで日本文化を一緒に楽しんだり、短期研修の場に同席させてもらったり、海外に派遣された教師の方々が行う授業の検討会に参加させてもらったりするなど、実践的で有意義な内容となっていました。

インターンシッププログラムを通して、JICA は国際協力に関わる人のつなぎ役になっていることを強く感じました。研修員を、企業を、教員を、個人をつなぎ、国際協力の輪をつくる先頭を走るのが JICA であると思います。このような「つなぐ」役割は、長きにわたる研修や質の高

い事業を通して多くの人や組織からの信頼を得てきたJICAであるからこそできる国際協力の形であるとも思います。国際協力は様々な強みを持ったアクターがそれぞれに活動することで成り立っているものであるため、他のアクターはどんな活動をしているかも興味が湧きました。また、私の専攻分野である教育と国際協力についての専門性を高めていきたいと思います。

また、インターンシップでの活動について、徽音祭で発表をしました。徽音祭での発表を通して、5日間で学んだことを整理したり言語化したりすることができました。ただ体験するだけではなく、振り返って伝えることで自分ごとの経験として残るものだと気付きました。また、発表後の質疑応答で答えられないものがあったため、知識不足を実感しさらに学んでいかなければと身が引き締まる思いでした。発表を聞いた友人からは、「具体的過ぎて少しついていけなかった」という反応をもらいましたが、様々なことを経験し学んだからこそ何を切り取って伝えるのか、どう伝えるのかは少し難しく思います。

至らない点が多く見つかった時間でもありましたが、この気づきや難しさを大学生活や課外活動に活かしていきます。

（文教育学部人間社会科学2年　片倉心響）

JICA東京特設インターンシップ
プログラム参加者による活動報告

活動報告をする筆者

Ⅳ．開発途上国の女子教育・幼児教育に関する支援事業（教育・研究成果の国際社会への還元）

Ⅳ．開発途上国の女子教育・幼児教育に関する支援事業（教育・研究成果の国際社会への還元）

１．乳幼児ケアと就学前教育研修（独立行政法人国際協力機構（JICA）課題別研修）

1.1　概要

本学では、JICA（独立行政法人国際協力機構）の委託を受け、「中西部アフリカ幼児教育研修」を 12 年間（2006～2017 年度）行ってきた。2018 年度からは、それまでの成果を継続するかたちで対象地域を拡大し「乳幼児ケアと就学前教育（アフリカ・中東）」として実施し、2023 年度は対象地域にアジア 2 ヵ国も含めた。今年度は新たに始まった研修 3 か年計画の初年度にあたり、アフリカ・中東・アジア 11 ヵ国を対象に実施した。

研修終了時のアンケートでは、研修で掲げた 6 つの目標（①所属組織での問題点を発見・整理し、解決すべき課題を抽出する、②ECD（Early Childhood Development）の概念・内容・動向に対する理解を深める、③ECD における格差問題と是正策について理解を深める、④子どもの発達に応じた適切な保育内容・保育方法について理解を深める、⑤教員養成・研修のシステムに対して理解を深める、⑥ECD における評価について理解を深める）について、いずれも高い達成度・満足度が示され、効果的な研修となった。研修員は、帰国後、今回の研修成果を活かし自国の乳幼児ケア・就学前教育の改善に取り組んでいく予定。

1.2　研修背景

開発途上国においては財源不足と政府関係者の ECD（early childhood development: 乳幼児ケアと就学前教育）に関する意識の低さから、国家政策として ECD 分野を推進する専門人材が不足している状況がある。こうした状況を踏まえ、本研修では、特に ECD へのアクセスや質の改善が急務の課題となっているアフリカ・中東・アジア地域を対象にその整備・普及を図るため、同分野の行政官や視学官、指導主事など指導的な立場の人材の育成と能力向上を行う。

1.3　2024 年度の実施内容

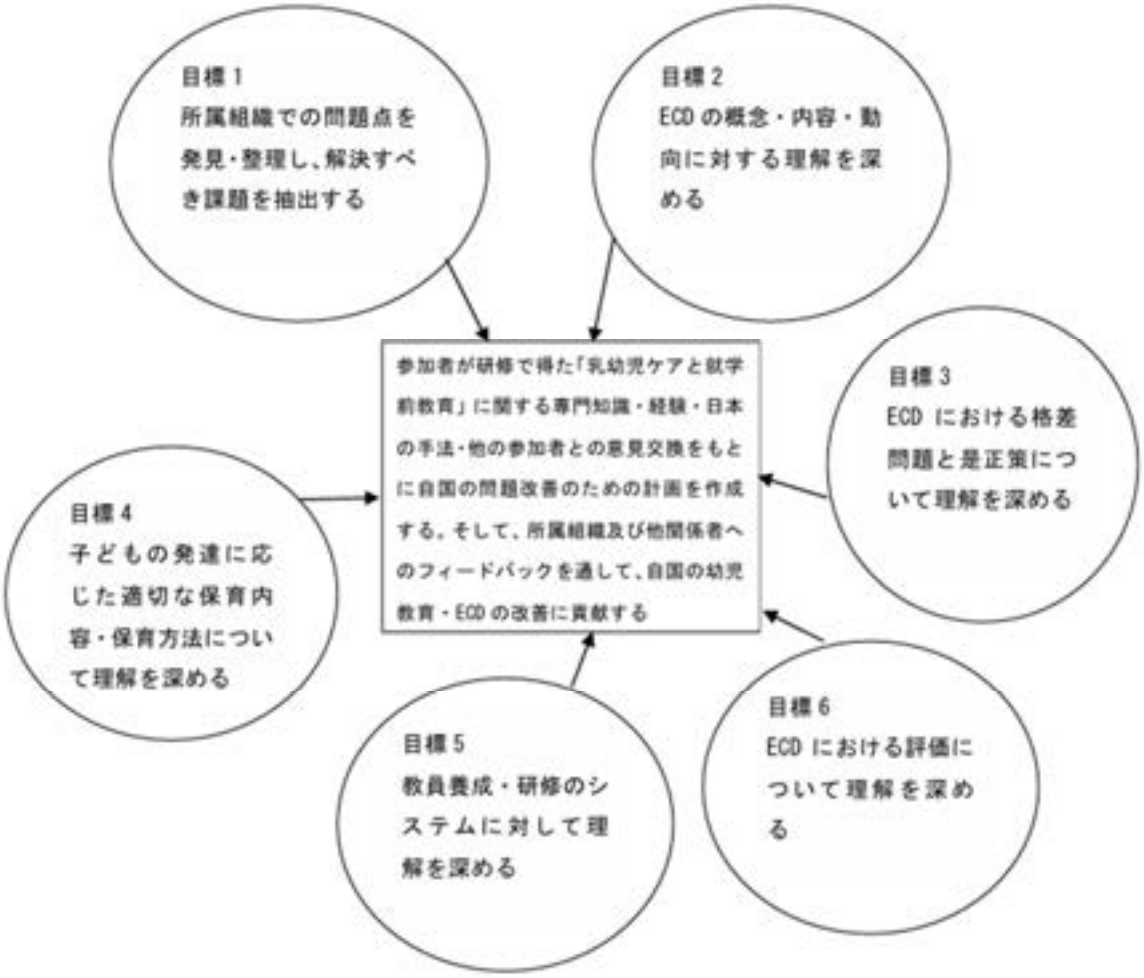
- 参加研修員：中央・地域の教育省や子ども省等、政策・実務レベルで幼児教育や就学前教育を監督する機関の行政官や視学官、指導主事など 14 名（インドネシア、カンボジア、ラオス、ベトナム、バングラデシュ、スリランカ、エジプト、マラウイ、ブルキナファソ、シエラレオネ（各 1 名）、ジョージア（4 名））
- 研修期間：2024 年 11 月 11 日（月）～12 月 6 日（金）
- 研修形態：対面

【プログラム概要】

以下の 6 つの目標に沿って、講義、教育機関視察、教員養成・研修機関視察、遊びを通じた教育や教材作成のワークショップ、研修員によるプレゼンテーション等を実施した。研修員の理解を確実なものにするため、定期的に振り返りも実施した。

■　主な訪問先（順不同）：聖隷クリストファー大学、聖隷クリストファー小学校、聖隷クリストファー大学附属クリストファーこども園、発達支援事業所むく、ながかみこども園、東京学芸大学附属幼稚園竹早園舎、筑波大学附属大塚特別支援学校、ふじようちえん、東京おもちゃ美術館、お茶の水女子大学附属幼稚園・小学校

乳幼児ケアと就学前教育研修　6つの単元目標



【日程表】

日付	時刻			形態	研修内容	講師又は見学先担当者等	
						氏名 （敬称略）	所属先及び職位名
11/11(月)	13:30	～	14:15		開講式		
	14:15	～	15:00	視察	お茶の水女子大学	平山雄大	お茶の水女子大学・講師
	15:00	～	16:30	講義	日本の幼児教育（1）制度と政策	浜野隆	お茶の水女子大学・教授
11/12(火)	10:00	～	12:00	講義	日本の教員養成	小原優貴	東京大学・准教授
	13:30	～	16:30	講義	論理的思考の芽生え	坪川紅美	幼児教育ネットワーク
11/13(水)	午前				インセプションレポート・プレゼン準備		
	13:00	～	15:00	講義	母子保健	尾崎敬子・大町檀	JICA・国際協力専門員・アソシエイト専門員
11/14(木)	9:30	～	11:30	視察	日本の幼稚園教育（東京学芸大附属幼稚園竹早園舎）	八木亜弥子	東京学芸大附属幼稚園竹早園舎
	14:00	～	16:30	講義	障害児保育	齊藤彩	お茶の水女子大学・助教
11/15(金)	9:00	～	17:00	発表	インセプションレポート発表	平山雄大	お茶の水女子大学・講師
11/18(月)	13:00	～	13:20		聖隷クリストファー大学訪問（挨拶）	大城昌平	聖隷クリストファー大学・学長
	13:30	～	14:00	視察	学内施設・歴史資料館見学	太田雅子・今西野百合	聖隷クリストファー大学・教授
	14:40	～	16:00	講義	創造性を育む保育・教育—音楽	二宮貴之・モーテンヴァテン	聖隷クリストファー大学・准教授・助教
11/19(火)	9:00	～	9:30	講義	こども園の保育について	武田真理子	クリストファーこども園・園長
	9:30	～	12:00	視察	こども園（視察・交流）	武田真理子	クリストファーこども園・園長
	13:25	～	14:45	講義	子どもの保健・衛生・発育・栄養等について	市江和子	聖隷クリストファー大学・教授
	15:15	～	16:30	講義	主体性を育む保育・環境構成について	太田雅子	聖隷クリストファー大学・教授
	16:30	～	17:00	討議	シェアリングタイム１	（司会：研修員）	

11/20(水)	9:00	～	11:30	視察	こども園（障害児保育）視察	久保田幸年	ながかみこども園・園長
	12:00	～	12:50		ランチ交流	太田雅子	聖隷クリストファー小学校・校長
	13:25	～	14:45	視察	小学校との接続　聖隷クリストファー小学校低学年クラス授業見学	山下浩	聖隷クリストファー小学校
	15:00	～	16:30	実習	ワークショップ　造形	梅村康子	聖隷クリストファー小学校
	16:30	～	17:00	討議	シェアリングタイム 2	（司会：研修員）	
11/21(木)	8:50	～	10:20	講義	「教職実践演習」　日本の保育者・教員養成—実習について	鈴木光男	聖隷クリストファー大学・教授
	10:45	～	11:45	視察	発達支援事業所	伊藤信寿	発達支援事業所（むく）・理事長
	12:00	～	13:00		ランチ交流	副専攻学生・グローバル教育推進センター	
	13:25	～	14:45	講義	子どもと健康	和久田佳代	聖隷クリストファー大学・准教授
	15:00	～	16:00	講義	保育内容（環境）	杉山沙旺美	聖隷クリストファー大学・助教
	16:00	～	16:30	討議	シェアリングタイム 3	（司会：研修員）	
11/22(金)	9:30	～	11:00	視察	自然を生かした保育	渡邊拓真	聖隷クリストファー大学・助教
	11:15	～	13:00		ミカン狩り　ランチ	太田雅子・渡邊拓真	聖隷クリストファー大学・教授・助教
	13:30	～	14:00	討議	浜松での研修のまとめ	太田雅子	聖隷クリストファー大学・教授
11/24(日)	10:00	～	17:00	実習	幼児教育ネットワークワークショップ	坪川紅美	幼児教育ネットワーク
11/26(火)	9:30	～	12:00	視察	お茶の水女子大学附属小学校	小松祐子・片山守道	お茶の水女子大学附属小学校長・副校長
	13:00	～	15:00	講義	日本の幼児教育（2）保育の質その他	浜野隆	お茶の水女子大学・教授
	16:00	～	18:00	討議	帰国研修員との意見交換	浜野隆	お茶の水女子大学・教授
11/27(水)	9:30	～	12:00	視察	お茶の水女子大学附属幼稚園	小玉亮子・高橋陽子	お茶の水女子大学附属幼稚園長・副園長

	13:30	～	16:30	講義	子ども中心の保育	内田伸子	IPU・環太平洋大学・教授
11/28(木)	9:30	～	12:00	視察	筑波大学附属大塚特別支援学校	佐藤知洋	筑波大学附属大塚特別支援学校・副校長
	14:00	～	17:00	講義	ECD の理念と国際動向	三輪千明	広島大学・准教授
11/29(金)	9:30	～	12:30	講義	幼児教育における評価（QOL を中心に）	松本聡子	ベネッセ教育総合研究所・研究員
	13:30	～	16:30	講義	子どもの言葉を育む保育	ドー小山祥子	昭和女子大学・特命教授
12/2(月)	10:00	～	11:30	視察	ふじようちえん	加藤久美子	ふじようちえん・副園長
	14:30	～	17:00	講義	保育内容と保育計画（領域「環境」を中心に）	松島のり子	お茶の水女子大学・講師
12/3(火)	10:00	～	10:20		スケジュール説明	花房佳奈	東京おもちゃ美術館・ディレクター
	10:20	～	11:00	講義	認定 NPO 法人芸術と遊び創造協会が行う取り組み／東京おもちゃ美術館とは	貝原亜理沙	東京おもちゃ美術館・チーフディレクター
	11:15	～	12:30	視察	館内視察	花房佳奈	東京おもちゃ美術館・ディレクター
	13:30	～	14:30	実習	【ワークショップ】身近な素材でおもちゃを作ろう	天野乃慧	東京おもちゃ美術館・ディレクター
	14:50	～	15:50	討議	「遊び力が身につくおもちゃ実践論」	岡田哲也	東京おもちゃ美術館・ディレクター
12/4(水)	終日				アクションプラン作成		
12/5(木)	9:00	～	17:00	発表	アクションプラン発表	小田亜紀子	お茶の水女子大学・特任准教授
12/6(金)	10:00	～	11:15	講義	日本の幼児教育（3）	浜野隆	お茶の水女子大学・教授
	11:30	～	12:00	討議	評価会		
	13:30	～	14:00		閉講式		

【研修員からのコメント（抜粋）】
※改善要望については、次年度の研修計画策定において配慮する予定。

- プログラムは非常に有益で、よく構成されており、自分の仕事に活かせる貴重な知識と経験を得ることができた。
- 得られた知識や経験は、自身の仕事に直接関連するものであり、所属する組織における ECD 向上への貢献を大きく高めるものである。
- このプログラムを通して、貴重な知識と経験を得られたと思う。これから自国で実践していくうえで重要な見識を得ることができた。
- 講義、見学、ディスカッションの組み合わせがすばらしかった。
- 理論と実践のバランスの取れたアプローチは、深い理解を促し、明確な結論を導き出しやすかった。
- 講師が各分野で非常に優れており、講義に実践的な課題や演習が含まれていて楽しめた。
- 全体的に、コースはとてもよく構成されていた。特に、理論的なセッションと観察が交互に行われたこと、また観察場所が多様であったこと（教育レベルや提供者が異なる）を高く評価した。
- （研修期間中、毎日プログラムの内容について）日誌（ジャーナル）をつける、というリフレクションの実践はとても興味深い経験だった。このプロセスは私に多くのことを教えてくれた。自らのリフレクションを見返したとき、コースの始めから終わりまでに、自分がどれだけ成長し変化したかを実感した。特にリフレクション・ジャーナルの 2 つ目の質問（2. What do you think are the useful points from today's lecture/visit to improve early childhood education in your country?）は、自身の行動計画の一部となりうる課題に焦点を絞るうえで非常に役に立った。日々の振り返りの実践は、このコースの強みのひとつだと考えている。
- 理論的な講義の中に、より実践的な活動を取り入れるとより良い。講義時間が長いため、集中力を維持するのが難しいケースもあった。実践的な作業やグループ活動を取り入れることで、集中力が大幅に高まったと思う。さらに実践的な課題があれば、講義中に得た理論的知識をよりよく理解し、応用することができただろう。
- 幼児教育への技術導入や、資源が限られた環境での課題への取り組みに関する内容があれば、より充実したプログラムになったと思う。
- 教員の準備と資格に関してはもっと深くカバーしてほしかった。具体的には、一般的な理論だけでなく、教員養成の実践的な実施方法についてもっと詳しく掘り下げてほしかった。

【写真】

開講式

静岡県浜松市でのプログラム

幼児教育ネットワークによるワークショップ

お茶の水女子大学附属幼稚園視察

お茶の水女子大学での講義

ふじようちえん視察

東京おもちゃ美術館

閉講式

２．アフガニスタン向け絵本作成・配布（野々山基金）

【背景】

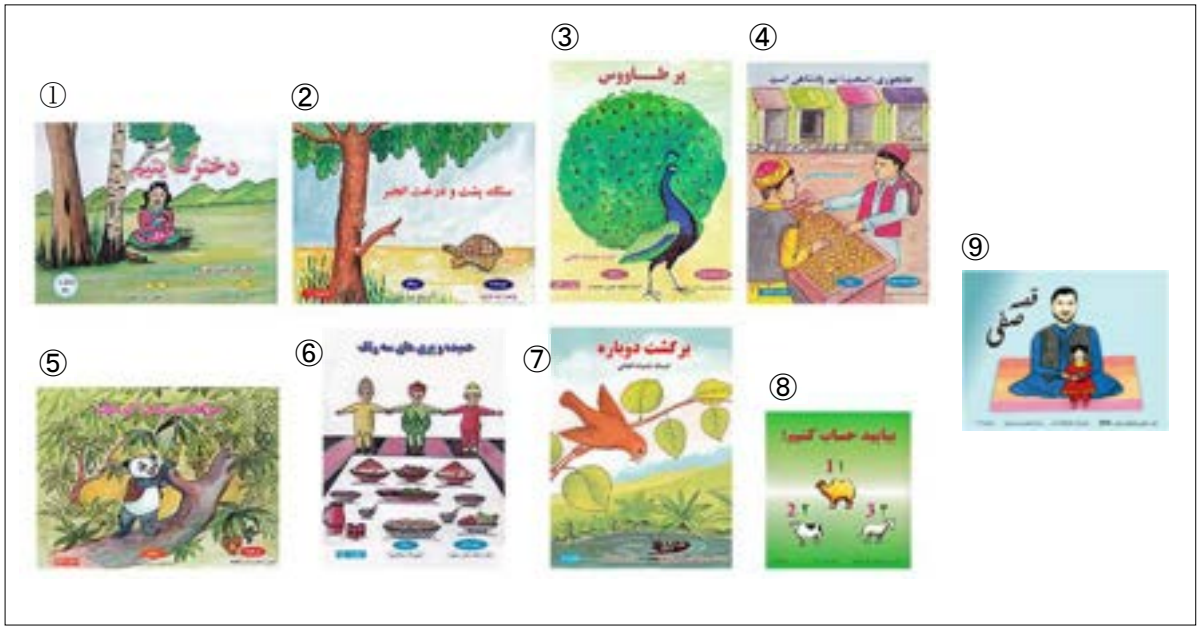
内戦を経て復興に取り組むアフガニスタンにおいては、女子の就学を含めて教育の復興が国家再建の重要な課題となっている。しかし識字率や就学率は依然として低い状況にあり、学校や教材の整備も十分に整備されていない。この状況に鑑み、グローバル協力センターでは、アフガニスタンの児童のための図書（絵本）の作成・印刷・配布を、同国において絵本・図書館事業を実施している公益社団法人シャンティ国際ボランティア会に委託し実施することとした。本事業は平成 24（2012）年度に開始され、令和３（2021）年のアフガニスタン政変後も継続して実施された（2023 年度まで）。事業実施に係る資金は、アフガニスタンをはじめとする開発途上国における女子教育に関する事業への支援を行うことを目的として平成 23（2011）年度に設置された「アフガニスタン・開発途上国女子教育支援事業野々山基金」により充当されている。

【内容】

- 対象地域：アフガニスタン・イスラム共和国カブール州、ナンガハル州、ラグマン州
- 作成絵本実績：9 タイトル、ダリ語とパシュトゥ語で各 1,200 冊（計 2,400 冊、合計 21，600 冊：2025 年３月現在）
- 絵本配布先：カブール州、ナンガハル州、ラグマン州内の小学校 175 校、公共図書館 12 館、シャンティ国際ボランティア会運営図書館（ナンガハル州ジャララバード市子ども図書館）
- 現地スタッフ向け研修の受益者：省庁職員、公共図書館員、教員養成校教員計 53 名
- 移動図書館活動の受益者：延べ 4,739 名の子ども
- 子ども図書館の受益者：延べ 4 万 1,159 名の子ども（2023 年 1 月～12 月）

これまでに作成した絵本（通し番号は以下の絵本の表紙番号に対応）

出版年	タイトル
2013	①　『孤児の女の子』
2014	②　『亀とイチジクの木』
2015	③　『クジャクの羽』
2016	④　『幸せの半分は健康から』
2017	⑤　『パンダの冒険』
2018	⑥　『ハミダと栄養三兄妹』
2019	⑦　『恩返し／Pay Back』
2020	⑧　『数をかぞえよう』
2023	⑨　『サフィの物語』



これまでに出版された絵本の表紙

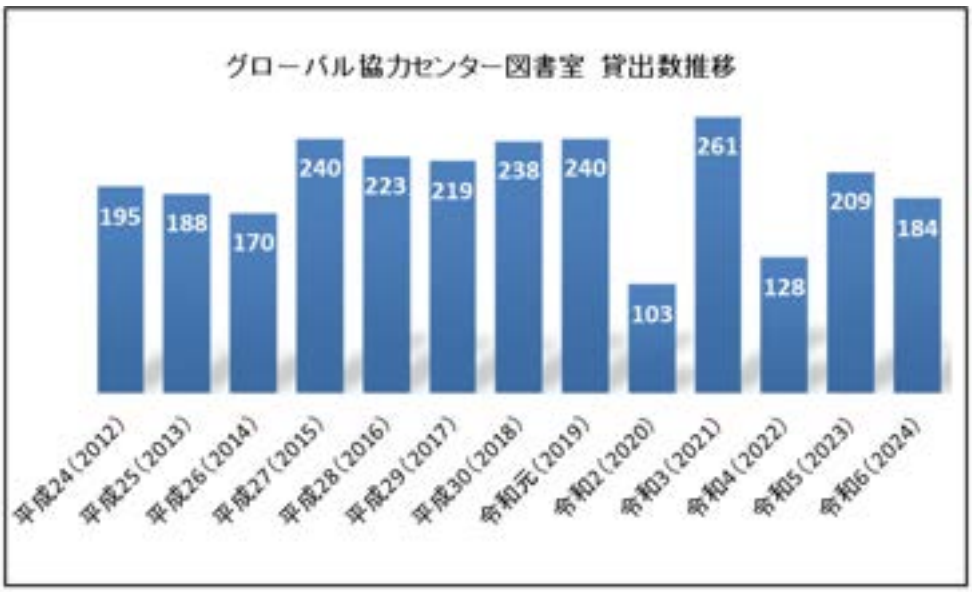
V. その他

Ⅴ．その他

１．グローバル協力センター図書室運営

グローバル協力センター図書室は平成 23（2011）年から開室しており、国際協力、平和構築、開発に関する教育・研究、学習に必要な図書およびその他の資料を収集・管理し、お茶の水女子大学学部生、大学院生、附属高校性、卒業生および教職員の利用に供するように務めている。2024 年度は 48 冊図書を受入れ、2025 年３月 7 日時点で 2,265 冊蔵書している。開室時間は祝祭日、夏季・冬季一斉休業日を除く月曜日から金曜日の 10：00～16：00としているが、センタースタッフが対応可能な場合は時間外でも利用が可能である。貸出方法はセンターに利用登録をし、直接貸出、返却をする。年間開室日について、2024 年度は 226 日であった（一部予定）。2024 年度の延べ利用者数は 58 人で、内訳は学部生 43 人、大学院生 9 人、教職員 6 人（複数回利用者あり）で 184 冊の貸出があった（2025 年３月 7 日時点）。新規利用登録は 22 人であった（同）。平成 23（2011）年のセンター図書室開室以来延べ 2,624 冊の貸出を行ったこととなる（2025 年３月 7 日時点：下記図参照）。

利用者は、附属図書館の蔵書検索 OPAC で資料を検索し来室している。センター図書室の貸出期間は学部生でも 4 週間（貸出予約がない場合は貸出延長可）であり、返却ボックスをセンター室前に設置し、利用者の都合のよい時間に返却ができるよう工夫している。貸出本については、台帳と Access で管理し、利用者にはメールで返却のリマインドを行い、長期未返却の利用者が生じないよう注意を払っている。



２．情報発信（ウェブでの発信、パンフレット更新など）

2.1　ホームページによる情報発信

グローバル協力センターのホームページは、センターが主催・協力する各種イベント（公開講座、講演会、大学間連携イベント、履修説明会など）の学内外への通知・案内と活動報告を中心とした情報を掲載している。

2024 年度はグローバル協力センターが主催するイベント等（SDGs セミナー10 回、途上国研究・国際協力分野海外調査支援、「国際共生社会論実習」（海外スタディツアー）、学生自主活動、ブータン連続セミナー15 回等）の開催情報を日本語で 49 件、英語で 12 件、新着情報（実施報告）を日本語で 51 件、英語で 14 件掲載した（いずれも 2025 年３月７日時点）。また、2023 年度からは五女子大学コンソーシアム連絡協議会が再開されたことに伴い「五女子大学コンソーシアム」の活動紹介ページをホームページ内に開設し、関連情報を掲載している。活動報告は、「共に生きる」スタディグループメンバーをはじめとするイベント参加学生、及びグローバル協力センター所属教員・スタッフが執筆している。

2.2　メーリングリストによる情報発信

2024 年度の「共に生きる」メーリングリストへの登録者は 150 名（2025 年３月７日時点）となった。メーリングリストでは、学内及び学外（国連機関、JICA、NGO 等が主催するもの）のイベント情報や「共に生きる」スタディグループの活動情報を 118 件（2025 年３月７日時点）発信し、関連するイベント等への関心を高めるきっかけを作った。

2.3　大学メールマガジン、公式 SNS 等による情報発信

上記以外の広報手段として、学内者に向けてイベント情報を発信する場合は大学メールマガジン（OchaMail）、学内掲示板及び電子掲示板（Digital Signage）、Slack（Ochat）を利用し、一般向けに広く発信する場合は大学ホームページ、X（旧 Twitter）、Instagram を利用する等、よりタイムリーかつ広範囲にグローバル協力センターの活動や取組みを発信することに努めた。加えて、毎月１回、全職員・教員（附属学校園含む）宛メール、及び「共に生きるメーリングリスト」宛に、グローバル協力センターウェブサイトの更新情報リンクをまとめて発信し、センター活動の周知に努めた。

2.4　パンフレットによる情報発信

グローバル協力センターでは、2022 年度以降、コンパクトな A4 版のパンフレットの更新・編集・印刷を行っており、今年度も日本語版の更新、英語版の作成・印刷を行った。更新したパンフレット PDF 版はグローバル協力センターホームページに掲載済である。

パンフレットは、大学院オープンキャンパス（4 月開催）や学部オープンキャンパス（7 月開催）の来訪者、海外スタディツアーにおける訪問先等に配布し、その活動や取組みを発信している。

【日本語パンフレット】（３枚折・表）

（３枚折・裏）

【英語パンフレット】（３枚折・表）

About us

The Global Collaboration Center was founded as the Center for Women's Education and Development, in July 2000 to promote the University's international cooperation in support of women's education. Renamed the Global Collaboration Center in April 2008, the Center has since pursued the broader mission of planning and coordinating the University's educational, research, and social action programs related to peace-building and international collaboration. Since 2017, the Center has also been providing opportunities to deepen discussions around the "the 2030 Agenda for Sustainable Development" and the Sustainable Development Goals (SDGs), and are committed to the University's international cooperation.

Access Map

- 1 minute walk from Myogadani Station on the Tokyo Metro Marunouchi Subway Line
- 6-minute walk from Gokokuji Station on the Tokyo Metro Yurakucho Subway Line
- 1 minute walk from Otsuka 2-chome bus stop on the Toei Bus

Living Together in a Global Community

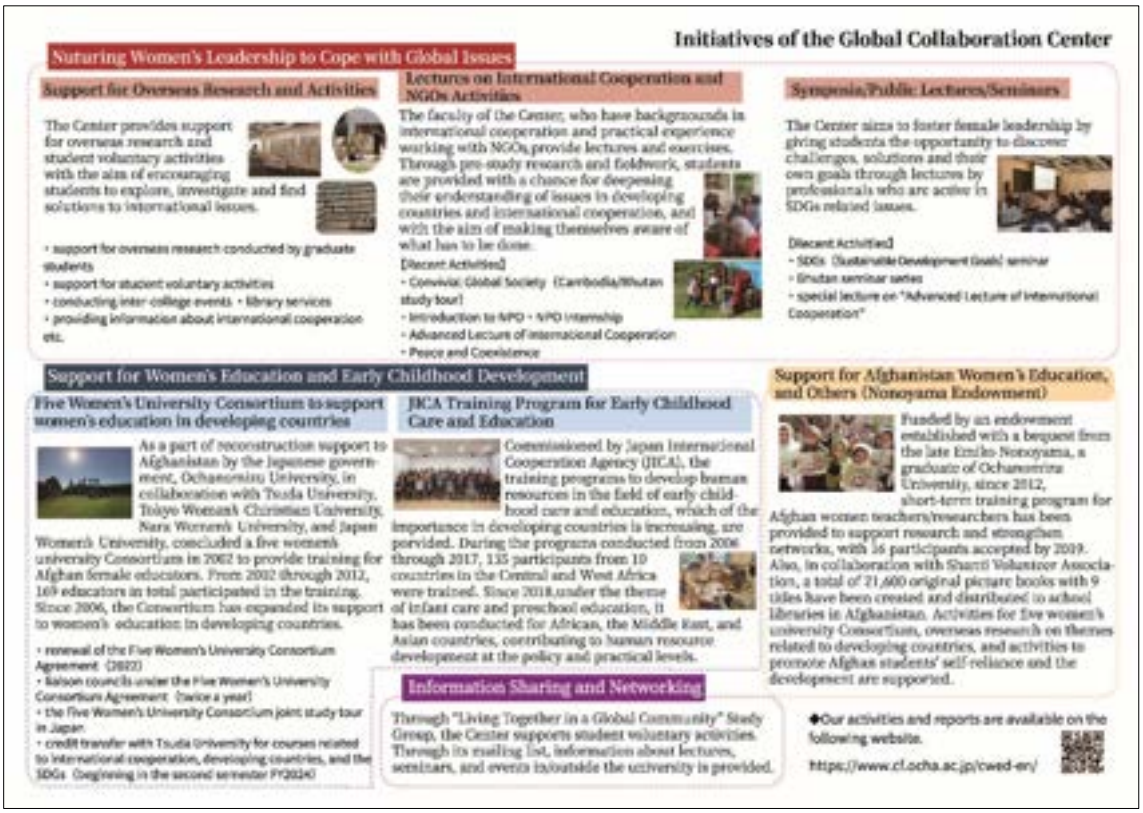
Ochanomizu University
Global Collaboration Center(GCC)
2-1-1 Otsuka, Bunkyo-ku, Tokyo 112-8610
(3rd Floor, Student Service Building)

TEL/FAX : +81-3-5978-5546
E-mail : info-cwed@cc.ocha.ac.jp
https://www.cf.ocha.ac.jp/cwed-en/

Global Collaboration Center

Ochanomizu University

（３枚折・裏）



Initiatives of the Global Collaboration Center

Nuturing Women's Leadership to Cope with Global Issues

Support for Overseas Research and Activities

The Center provides support for overseas research and student voluntary activities with the aim of encouraging students to explore, investigate and find solutions to international issues.

- support for overseas research conducted by graduate students
- support for student voluntary activities
- conducting inter-college events
- library services
- providing information about international cooperation

etc.

Lectures on International Cooperation and NGOs Activities

The faculty of the Center, who have backgrounds in international cooperation and practical experience working with NGOs, provide lectures and exercises. Through pre-study research and fieldwork, students are provided with a chance for deepening their understanding of issues in developing countries and international cooperation, and with the aim of making themselves aware of what has to be done.

[Recent Activities]
- Convivial Global Society (Cambodia/Bhutan study tour)
- Introduction to NPO・NPO Internship
- Advanced Lecture of International Cooperation
- Peace and Coexistence

Symposia/Public Lectures/Seminars

The Center aims to foster female leadership by giving students the opportunity to discover challenges, solutions and their own goals through lectures by professionals who are active in SDGs related issues.

[Recent Activities]
- SDGs (Sustainable Development Goals) seminar
- Bhutan seminar series
- special lecture on "Advanced Lecture of International Cooperation"

Support for Women's Education and Early Childhood Development

Five Women's University Consortium to support women's education in developing countries

As a part of reconstruction support to Afghanistan by the Japanese government, Ochanomizu University, in collaboration with Tsuda University, Tokyo Woman's Christian University, Nara Women's University, and Japan Women's University, concluded a five women's university Consortium in 2002 to provide training for Afghan female educators. From 2002 through 2012, 169 educators in total participated in the training. Since 2006, the Consortium has expanded its support to women's education in developing countries.

- renewal of the Five Women's University Consortium Agreement (2022)
- liaison councils under the Five Women's University Consortium Agreement (twice a year)
- the Five Women's University Consortium joint study tour in Japan
- credit transfer with Tsuda University for courses related to international cooperation, developing countries, and the SDGs (beginning in the second semester FY2024)

JICA Training Program for Early Childhood Care and Education

Commissioned by Japan International Cooperation Agency (JICA), the training programs to develop human resources in the field of early childhood care and education, which of the importance in developing countries is increasing, are provided. During the programs conducted from 2006 through 2017, 135 participants from 10 countries in the Central and West Africa were trained. Since 2018, under the theme of infant care and preschool education, it has been conducted for African, the Middle East, and Asian countries, contributing to human resource development at the policy and practical levels.

Support for Afghanistan Women's Education, and Others (Nonoyama Endowment)

Funded by an endowment established with a bequest from the late Emiko Nonoyama, a graduate of Ochanomizu University, since 2012, short-term training program for Afghan women teachers/researchers has been provided to support research and strengthen networks, with 16 participants accepted by 2019. Also, in collaboration with Shanti Volunteer Association, a total of 21,600 original picture books with 9 titles have been created and distributed to school libraries in Afghanistan. Activities for five women's university Consortium, overseas research on themes related to developing countries, and activities to promote Afghan students' self-reliance and the development are supported.

Information Sharing and Networking

Through "Living Together in a Global Community" Study Group, the Center supports student voluntary activities. Through its mailing list, information about lectures, seminars, and events in/outside the university is provided.

◆Our activities and reports are available on the following website.

https://www.cf.ocha.ac.jp/cwed-en/

VI. 資料

Ⅵ. 資料

１．各種イベント・案内のポスター

【持続可能な開発目標（SDGs）セミナー（第 38-47 回）】

ちいさな声に
耳をすます世界を
—“よりそうとは何か”を問い続ける—
◆ 全体概要：
◆ 日時：
2024年6月10日（月）13:20～14:50
◆ 場所：
本館126室
◆ 講師：
石川 歩 氏
◆ 後援：
◆ 問合せ：
SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS

国際協力最前線：
カンボジアでの教育スタートアップの取り組み
講師 渡邉 大貴 氏
6月19日 10:40 ~12:10
形式：オンライン（Zoom）
対象：お茶の水女子大学学生・関係者、関心のある一般の方

ブータンの開発課題と
日本の国際協力
◆ 全体概要：
◆ 日時：
2024年7月10日（水）13:20～14:50
◆ 形式：
オンライン
（Zoomによるリアルタイム配信）
◆ 講師：
須藤 伸 氏
（JICAブータン事務所 企画調査員）
◆ 後援：
◆ 問合せ：
SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS

JICA 海外協力隊セミナー
11月1日（金）
16:40 ~ 18:10
会場：お茶の水女子大学国際交流留学生プラザ
2階多目的ホール
【プログラム】
・JICA 海外協力隊 概要説明 16:40 ~ 17:00
・協力隊経験者 体験談発表 17:00 ~ 17:40
・質疑応答 17:40 ~ 18:10
体験談発表者
川口 恵 氏
職種：環境教育
派遣国：セントルシア

「モザンビーク国新しい学校教育制度に対応したカリキュラム普及プロジェクト」－JICAによる開発途上国の現場での具体的な取り組み－
講師
太田 美穂 氏
株式会社コーエイリサーチ＆コンサルティング 主席コンサルタント
2024.
11.13（水）16:40-18:10
会場 お茶の水女子大学文教育学部１号館 301 室
対象 お茶の水女子大学学生・教職員及び一般の方
事前申込（11/11 まで）
こちらからお申込みください

12/4
16:40～
18:10
文教育学部１号館 301 室
平和と開発－JICAのミンダナオ和平支援－
講師
落合 直之 氏
事前申込（12/3 まで）
こちらからお申込み下さい

【2024 年度ブータン連続セミナー】

お茶の水女子大学グローバル協力センター
日本ブータン研究所
共催
2024年度 第5回
ブータン連続セミナー
◆ 全体概要：
◆ 日時：
2024年7月19日（金） 15:00～16:30
◆ 形式：
オンライン（Zoomによるリアルタイム配信）
◆ 題目：
映像作品を通してブータンの諸相を学ぶ（50）
◆ コメンテーター：
平山雄大
◆ 協力：
海を越えてブータンプロジェクト、日本ブータン友好協会
◆ 問合せ：
グローバル協力センター講師
事前申込・参加費無料
参加申込はコチラ

お茶の水女子大学グローバル協力センター
日本ブータン研究所
共催
2024年度 第6回
ブータン連続セミナー
◆ 全体概要：
◆ 日時：
2024年8月9日（金） 15:00～16:30
◆ 形式：
オンライン（Zoomによるリアルタイム配信）
◆ 題目：
映像作品を通してブータンの諸相を学ぶ（51）
◆ コメンテーター：
森下航平 氏
＋平山雄大
◆ 協力：
海を越えてブータンプロジェクト、日本ブータン友好協会
◆ 問合せ：
グローバル協力センター講師
事前申込・参加費無料
参加申込はコチラ

日本ブータン研究所
共催
2024年度 第7回
ブータン連続セミナー
◆ 全体概要：
◆ 日時：
2024年9月13日（金） 15:00～16:30
◆ 形式：
オンライン（Zoomによるリアルタイム配信）
◆ 題目：
映像作品を通してブータンの諸相を学ぶ（52）
◆ コメンテーター：
菊川翔太 氏
＋平山雄大
◆ 協力：
海を越えてブータンプロジェクト、日本ブータン友好協会
◆ 問合せ：
グローバル協力センター講師
事前申込・参加費無料
参加申込はコチラ

共催
2024年度 第8回
ブータン連続セミナー
◆ 全体概要：
◆ 日時：
2024年10月11日（金） 15:00～16:30
◆ 形式：
オンライン（Zoomによるリアルタイム配信）
◆ 題目：
映像作品を通してブータンの諸相を学ぶ（53）
◆ コメンテーター：
野口ウゲンチョデイ 氏
＋平山雄大
◆ 協力：
海を越えてブータンプロジェクト、日本ブータン友好協会
◆ 問合せ：
グローバル協力センター講師
事前申込・参加費無料
参加申込はコチラ

お茶の水女子大学グローバル協力センター
日本ブータン研究所
共催
2024年度 第⑨回
ブータン連続セミナー
◆ 全体概要：
◆ 日時：
2024年10月25日（金） 15:00～16:30
◆ 形式：
オンライン（Zoomによるリアルタイム配信）
◆ 題目：
映像作品を通してブータンの諸相を学ぶ（54）
◆ コメンテーター：
石内良幸氏
平山雄大
◆ 協力：
◆ 問合せ：
要事前申込・
参加費無料
参加申込はコチラ

お茶の水女子大学グローバル協力センター
日本ブータン研究所
共催
2024年度 第⑩回
ブータン連続セミナー
◆ 全体概要：
◆ 日時：
2024年11月22日（金） 15:00～16:30
◆ 形式：
オンライン（Zoomによるリアルタイム配信）
◆ 題目：
映像作品を通してブータンの諸相を学ぶ（55）
◆ コメンテーター：
平山雄大
◆ 協力：
◆ 問合せ：
要事前申込・
参加費無料
参加申込はコチラ

お茶の水女子大学グローバル協力センター
日本ブータン研究所
共催
2024年度 第⑪回
ブータン連続セミナー
◆ 全体概要：
◆ 日時：
2024年12月13日（金） 15:00～16:30
◆ 形式：
オンライン（Zoomによるリアルタイム配信）
◆ 題目：
映像作品を通してブータンの諸相を学ぶ（56）
◆ コメンテーター：
平山雄大
◆ 協力：
◆ 問合せ：
要事前申込・
参加費無料
参加申込はコチラ

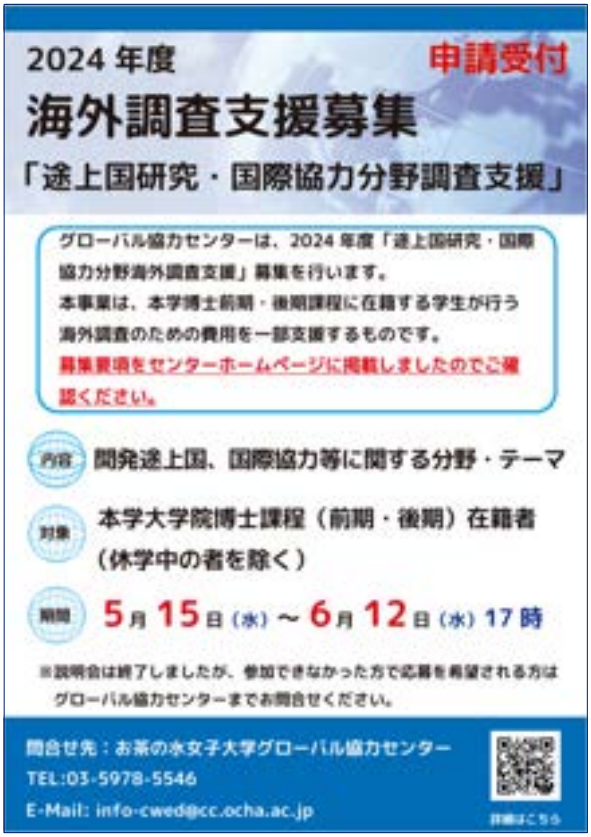
お茶の水女子大学グローバル協力センター
日本ブータン研究所
共催
2024年度 第⑫回
ブータン連続セミナー
◆ 全体概要：
◆ 日時：
2024年12月27日（金） 15:00～16:30
◆ 形式：
オンライン（Zoomによるリアルタイム配信）
◆ 題目：
映像作品を通してブータンの諸相を学ぶ（57）
◆ コメンテーター：
平山雄大
◆ 協力：
◆ 問合せ：
要事前申込・
参加費無料
参加申込はコチラ

お茶の水女子大学グローバル協力センター
日本ブータン研究所
共催
2024年度 第⑬回
ブータン連続セミナー
◆ 全体概要：
◆ 日時：
2025年1月17日（金） 15:00～16:30
◆ 形式：
オンライン（Zoomによるリアルタイム配信）
◆ 題目：
映像作品を通してブータンの諸相を学ぶ（58）
◆ コメンテーター：
山野晴暁 氏
平山雄大
◆ 協力：
◆ 問合せ：
参事前申込・
参加費無料

お茶の水女子大学グローバル協力センター
日本ブータン研究所
共催
2024年度 第⑭回
ブータン連続セミナー
◆ 全体概要：
◆ 日時：
2025年2月14日（金） 15:00～16:30
◆ 形式：
オンライン（Zoomによるリアルタイム配信）
◆ 題目：
映像作品を通してブータンの諸相を学ぶ（59）
◆ コメンテーター：
平山雄大
◆ 協力：
◆ 問合せ：
参事前申込・
参加費無料

お茶の水女子大学グローバル協力センター
日本ブータン研究所
共催
2024年度 第⑮回
ブータン連続セミナー
◆ 全体概要：
◆ 日時：
2025年3月7日（金） 15:00～16:30
◆ 形式：
オンライン（Zoomによるリアルタイム配信）
◆ 題目：
映像作品を通してブータンの諸相を学ぶ（60）
◆ コメンテーター：
平山雄大
◆ 協力：
◆ 問合せ：
参事前申込・
参加費無料

3. 途上国研究・国際協力分野海外調査支援（春募集・秋募集）



4. その他

2024 年度後期
津田塾大学との単位互換
聴講生募集
気になる津田塾大学の授業を受けてみませんか？
対象
授業料等
どんな科目があるの？
どのように申請するの？
出願のスケジュール

五女子大学コンソーシアムスタディツアー
地方創生×国際協力を学ぶ！日本海の離島での「国内スタディツアー」募集
スタディツアー実施時期：
9月2日（月）～7日（土）
場所：
島根県隠岐郡海士町（あまちょう）
対象：本学学生（休学中の者を除く）
定員：2名まで
募集時期：
4月8日（月）～5月10日（金） 17：00
詳細を知りたい方、応募を希望される方は、右記QRコードからメールをしてください。募集要項、応募申請書類をお送りします。
【お問合せ】グローバル協力センター info-cwed@cc.ocha.ac.jp（学生センター棟3階508室）

２.「途上国研究・国際協力分野海外調査支援」採択者報告書（本文Ⅲ．３．３参照）

2024 年花蓮地震における
被災者の生活ニーズが満たされた避難所運営体制とボランティアの支援活動について
Evacuation shelter management and volunteer activities which met evacuees' need of living in 2024 Hualien Earthquake

大学院人間文化創成科学研究科
ライフサイエンス専攻 D2 佐藤寛華

１． 要約

（和文）

日本及び低・中所得国では、避難所や難民キャンプにおける被災者の生活ニーズが満たされず、心身ともに支障をきたすことが報告されている。そこで、本研究では、2018 年の震災の教訓をもとに、2024 年に迅速かつ充実した避難所対応に成功した台湾の花蓮県の運営体制を調査し、避難先の環境に問題のある低・中所得国において、どのような改善や工夫が必要なのか考察することを目的とした。本研究では、「台湾仏教慈済慈善事業基金会」（以下、「慈済基金会」）の本部職員 2 人から、花蓮県での避難所運営システムや 2018 年からの改善内容を、実際に避難所で支援を行ったボランティア 3 人から、2024 年の花蓮地震を中心とした支援活動の内容を、グループインタビューにより聞き取った。調査の結果、花蓮県政府は、2018 年以降ボランティア団体を積極的に活用し、事前の役割分担まで行っており、支援物資の迅速で安定した供給を可能にしていた。また、2018 年の避難所では被災者のプライバシー空間が確保されなかったことから、花蓮県政府は、慈済基金会と共に 1 分以内で開設可能なテントを開発した。これにより、避難先で着替えや授乳の問題を抱える女性も人目を気にせず生活できると考えられる。さらに、訓練されたボランティアが、被災者や救助隊員に対してカウンセリングを実施していた。生活のための最低限のニーズを満たすだけでなく、精神面でのケアも、安心して生活できる環境づくりのために必要である。

（英文）

In Japan and some low- or middle-income countries, evacuation shelters or refugee camp failed to meet the living needs leading to physical or mental health issues. Hualien County, Taiwan, has learned from its failure in 2018 and achieved rapid and comprehensive support in evacuation shelters after 2024 Hualien Earthquake. This study aimed to examine how to improve the shelter environment in those countries by investigating its management in Hualien County. In the current study, two staff and three volunteers from "Buddhist Tzu Chi Foundation" (Tzu Chi) were recruited for group interviews, respectively. The former group was asked about evacuation shelter management in Hualien earthquake

with the improvement from 2018, while the latter group told their volunteer activities focused on 2024 Hualien Earthquake. As a result, Hualien County government makes use of the potential of volunteer organizations and assigns their roles in emergency beforehand after 2018 Hualien Earthquake, which allows rapid and stable material supply. Since privacy space was not secured in 2018, the Hualien County government and Tzu Chi developed tents which can be opened less than 1 minute. This allows female evacuees to change clothes or breastfeed without worrying about public eye. In addition, trained Tzu Chi volunteers delivered counselling to cope with mental issues of evacuees and rescue personnel. Mental care as well as minimum needs for living is important to create an environment where all of them can live with peace of mind even in emergency.

２． 現地調査期間：2024 年 8 月 6 日～8 月 9 日

３． 調査背景

近年、気候変動により自然災害が多発・激甚化している。2023 年最大規模の震災とされたトルコ・シリア地震では約 1,800 万人が被災し、フィリピンで発生した国全体の洪水・地すべりでは約 210 万人に被害が及んだ (CRED, 2023)。また、紛争や迫害などにより居住地を失った人々は、2023 年末時点で約 1 億 1,730 万人であり、その 75%は他の低・中所得国が受け入れている (UNHCR, 2023)。日本や低・中所得国を中心とした、自然災害や紛争による被災者の避難先では、プライバシーが守られない居住空間（Aburamadan R, et al 2020, Lines, et al 2022）、雑魚寝 （i24 NEWS 2018, CNN 2021）、水や衛生設備 （i24 NEWS 2018）、栄養（Kalyoncu Atasoy, et al 2023, Sakamoto, et al 2024） 不足が課題としてあげられている。さらに、女性は、授乳や着替えにおいてプライバシーが守られる空間が必要であり（外務省 2022）、避難先で性暴力の被害に遭うリスクも指摘されている (外務省 2022、Lee, et al 2023)。被災者や難民に対して、性別、年齢、障がいの有無にかかわらず避難者の権利を尊重し、生活を支援することが必要であり （Sphere Association 2018）、上記の課題がある国では、避難先の環境改善が求められる。

台湾の花蓮県では、2018 年に大地震に見舞われたが、避難所開設に 2 日かかり、プライバシー空間が確保されず、被災者から不満が募った。この教訓をもとに、花蓮県政府は「台湾仏教慈済慈善事業基金会」（以下、「慈済基金会」）等のボランティア団体とともに避難所運営体制を確立し、2024 年の花蓮地震では、震災後 3 時間以内にプライバシーに配慮したテントを設置したり、震災直後から温かい食事やリラクゼーションサービスを提供するなど、充実した支援を実施することに成功した （The Japan News 2024）。

４． 調査目的

本研究では、台湾で最大規模のボランティア団体であり、今回の災害で活躍が取り上げられた慈済基金会において、①避難所運営者からは、2018 年からの避難所環境や体制の変化

を、②避難所で生活支援をしたボランティアメンバーからは、活動内容を聞き取り、台湾の花蓮県における避難所運営の実態を包括的に把握することを目的とした。アメリカ、カナダ、イタリアなど、既に避難所環境が充実している先進国 （Frontline Press 2019）をモデルにするのではなく、直近の災害における課題から、根本的な避難所環境改善を図った花蓮県のモデルは、日本や低・中所得国が被災者対応を見直すための重要な知見になると思われる。

５． 調査方法

（１）参加者

本研究では、慈済基金会の本部職員、2024 年花蓮地震で支援を実施したボランティアメンバーに対し、それぞれグループインタビューを実施した。本部職員からは人事、渉外、物資調達、避難所管理の担当者各 1 人、ボランティアメンバーからは避難所開設（テント、トイレ、シャワー設置など）、食事、健康、衛生（洗濯、換気など）担当者各 1 人から聞き取ることを計画し、参加者の募集は慈済基金会に依頼した。その結果、慈済基金会では上記のような分担はなく 1 人が複数の役割を担っていたため、当初の計画より少ない人数で行うこととなり、本部職員 2 人、ボランティアメンバー3 人（以下、参加者 A, B, C）に聞き取りをした。

（２）インタビューの内容

本部職員には 2024 年 8 月 8 日、ボランティアメンバーには 2024 年 8 月 9 日に、それぞれ 90 分～120 分間、表 1、2 に示した質問項目を含め、半構造化グループインタビューを実施した。インタビュアーは著者が担当し、参加者の発言（中国語）の通訳は、英語圏地域に滞在経験のある慈済基金会の職員が行った。

表 1. 慈済基金会本部職員に対するグループインタビュー質問項目 （一部）

質問 1	現在の台湾の避難所運営について、災害関連の法律、マンパワーなどの観点からお聞かせください。
質問 2	2018 年花蓮地震以前と現在の避難所運営の違いをご教示ください。なぜ、過去にできなかったことが、現在できるようになったのでしょうか。
質問 3	台湾における災害ボランティアの位置づけを教えていただきたいです。ボランティアは、行政からの指示を待たずに避難所を設置できるのでしょうか。
質問 4	ボランティアをどのように募集、訓練、配置しているのでしょうか。

表 2. 2024 年花蓮地震で支援活動を行ったボランティアに対するグループインタビュー質問項目 （一部）

質問 1	ボランティア活動に関わったきっかけを教えてください。
質問 2	今回の災害では、どのような支援を実施しましたか。
質問 3	ボランティア活動は、あなたの専門や職業を生かした内容ですか。

（３）分析

グループインタビューはIC レコーダーで録音し、文字起こしを専門業者に依頼した。本報告書では、花蓮県での避難所運営システム、ボランティアの活動経験に分けて、結果をまとめることとした。

（４）倫理的配慮

本研究は、お茶の水女子大学人文社会科学研究の倫理審査委員会の審査を受け、承認を得て実施した（通知番号 2024-49）。研究実施前に、依頼文・同意書、インタビューガイドをメールで送り、慈済基金会職員が中国語に翻訳したものを、参加者に事前に配布した。

６． 調査結果

慈済基金会本部職員から聞き取った（1）避難所運営システム、ボランティアから聞き取った（2）活動経験に分けて、本調査の結果を報告する。

（１）避難所運営システム

① 官民連携体制

花蓮県の政府は、2018 年の震災後、避難所環境改善の必要性を認識し、慈済基金会などのボランティア団体のスキルを積極的に活用することとした。また、各ボランティア団体の役割が明確に定められ、各団体が互いの役割を事前に理解し合えているので、迅速に必要な支援を提供できる体制を整えるようになった。慈済基金会は、本団体が有する備蓄倉庫からテントなどの必要物資を提供し、被災者に食事を用意することを担当している。災害発生後、花蓮県の政府が避難所を開設するが、ボランティア団体は、政府の指示を待たずに被災者支援を開始することが認められている。

② 避難所で設置されるテント

2018 年の震災において、被災者はプライバシー空間のない場所で雑魚寝をさせられていた。このような被災者の生活環境を改善するため、慈済基金会がマテリアルリサイクルによって写真 1 のテントを開発し、2024 年の震災では備蓄倉庫から持ち出して避難所に設置した。テントは、写真 2 のように折りたたまれた状態から、1 分以内で写真 1 のように設置することができ、使用後も同程度の時間で簡単にしまうことができる。なお、2024 年の震災時、テントの入り口はチャックで開閉する作りになっていたが、車椅子使用者も自力で開閉できるよう、カーテン式の入り口に改良された。

写真 1. 避難所内で設置されたテント

写真 2. テントを折りたたんだ状態

③ ボランティアの訓練・活動

台湾政府は、災害対応職員の育成を推進しており、国内の複数の組織が、平常時からボランティア訓練を実施している。慈済基金会では、2 年間、月 8 時間の訓練を修了した者が、ボランティアの資格を取得することができる。慈済基金会は、災害時に特化した組織ではなく、平常時から支援活動を実施している。災害時には、救助活動など、最前線の危険な活動はせず、被災者及び救助隊の生活をサポートする。また、避難所では、被災経験でショックを受けた避難者や救助隊員に対し、ボランティアがカウンセリングを行うこととなっている。

（2）ボランティアの活動経験

① ボランティア活動を始めたきっかけ

ボランティアに参加したきっかけは、3 人共に慈済基金会の活動の影響を受けたからであった。参加者 A は妻が難産、参加者 B は夫が病を患った際に、慈済基金会のボランティアから献身的なケアを受けたことから、自らも誰かの助けになりたいと思い、ボランティア活動をするようになった。また、参加者 C は、慈済基金会主催の”Great Love Mothers”プログラムを通して、「他人に対しても、自分の子どものように愛しましょう」という、創始者 Master Cheng Yen の教えに感銘を受け、ボランティア活動を始めた。

② 2024 年花蓮地震での活動内容

参加者 A は、退職前は警察官として働いていた経験があり、政府関係者とどのようにコンタクトをとるか知っていたため、2024 年花蓮地震の後は、他地域から駆け付けた政府職員との連絡調整を担当した。これにより、警察官や消防隊が、500～600 人の被災者のもとへヘリコプターで、救助や物資調達などの支援を行うことができた。参加者 B は、専門職

をもっていなかったが、慈済基金会で様々な支援を経験しており、今回の災害では被災者のメンタルケアを行っていた。参加者 C は、かつて接客業を行っていたことから、普段は高齢者等と交流する活動を担当しており、今回の災害の避難所では、ボランティアとして出勤できる人のシフトを作成したり、被災者が睡眠、食事をとれ、プライバシーを守れるような環境づくりを行っていた。なお、参加者 A～C は避難所のコーディネーターとして毎日勤務していたが、それ以外のボランティアは 1 人が半日間の支援活動になるよう、活動時間が調整されていた。

７． 考察

（１）ボランティアの活用

台湾の花蓮県では、地方政府が慈済基金会などのボランティア団体に対して、災害時の支援の役割を与え、協力を要請していることがわかった。日本では、避難所業務全てを自治体が担うことが常態化しており、自治体職員の負担が大きい （讀賣新聞 2024）。2024 年の能登半島地震での避難所は、栄養管理 （Sakamoto, et al 2024）や衛生管理 （Itatani, et al 2024）が不十分であり、被災者の健康問題が指摘されていた。また、トルコでは、2023 年のトルコ・シリア地震において、政府機関の Disaster Emergency Management Presidency （AFAD）と、トルコ赤十字社である Turkish Red Crescent （KIZILAY）による災害管理の調整が遅く、食料配分が不均等であり、地元民が食事準備を主に担っており、食事内容が栄養的に不足していると推定された （Kalyoncu Atasoy ZB, et al 2024）。イランの National Disaster Management Organization は、事前に計画されていない受動的な支援に頼ることが多い （Ainehvand S, et al 2019a）。イランでは NGO 団体が重視されておらず （Salmani, et al 2019）、政府は管理上の弱点を隠し、実際のニーズを超える食糧支援を行うことで人々を満足させようとする傾向にあり （Ainehvand S, et al 2019a）、高齢者が食べられないような食品が提供されたことが報告されている （Ainehvand S, et al 2019b）。物資の過剰供給は被災地で無駄になるだけでなく、被災者のニーズを満たせず QOL を下げる場合がある。以上のことから、政府機関だけで支援を完結させるのではなく、台湾のようにボランティアの力を最大限に活用し、その上で、被災時に何を供給してもらうかを事前に調整することにより、効率的かつ無駄のない支援が実現できると考えられる。特に、参加者 A のような専門スキルを有するボランティアは、既存の知識を生かして、円滑な支援の促進につなげられる貴重な人材だと考えられる。また、参加者 3 人とも、過去に慈済基金会の支援の恩恵を受けてボランティア活動をし始めたことから、平常時からのボランティア団体の活躍が人々に影響を与え、災害も含めたボランティアメンバーを増やし、充実した支援を行うことが期待できる。

（２）プライバシーに配慮したテントの設置

日本や低・中所得国の避難所、ウクライナの難民収容所では、プライバシー空間の必要性が訴えられていた （i24 NEWS 2018, Frontline Press 2019, CNN 2021, Lee ACK 2023）。特に女

性は、人前で着替えることに抵抗があり （東京新聞 2024）、避難先でプライバシー空間がないことは母乳育児を妨げる原因となっている （Ratnayake Mudiyanselage S, et al 2022）。慈済基金会で開発されたテントは、コンパクトに収納でき、かつ広げるのにも時間がかからないので、備蓄や持ち運びがしやすく、人目を気にせず生活することが可能になる。さらに、車椅子利用者も自分で出入りし、入り口を容易に開閉できる構造になっているので、特に高齢化が進み（World Economic Forum 2021）、かつ自然災害の多いアジア地域の国々 （Bündnis Entwicklung Hilft 2023）では、このようなテントの導入が求められる。

（３）被災者・支援者への精神的配慮

アジアの国々では、自然災害後の被災者へのメンタルヘルスケアが不十分で、過去には避難者の間で、PTSD、うつ病、不安症などの精神疾患が引き起こされていたことが報告されている （Udomratn P 2008）。また、避難所や難民キャンプでは、性暴力の被害に遭うリスクが高まる等、女性への心身の負担が大きくなる （外務省 2022, Lee ACK 2023）。台湾の避難所では、事前に訓練されたボランティアが、避難所内でスペースを設けてカウンセリングを行っており、被災者が安心して生活できるよう、他国の避難所及び難民キャンプでも参考にするべき取り組みであると考えられる。

訓練を十分受けていない場合や、支援期間が長い場合、ボランティア自身も燃え尽き症候群や疲労など、心理的問題が発生しやすいことが示されている （Hendriati N 2024）。2024 年花蓮地震では、慈済基金会が 1 人半日間の活動になるようシフトが調整され、全体のコーディネーター（本研究の参加者 A～C）のみ長期間の支援活動を行っていた。支援者の健康に支障をきたさないように活動計画を考えることも、持続的な支援のために重要である。

８． 今後の研究への展望

本研究の成果は、日本のみならず、避難所環境に課題のある低・中所得国や、難民キャンプ受け入れ国にも役立つ知見だと考えられる。そのため、自然災害による被災者や、難民への支援の改善や向上を目的とした国際誌、International Journal of Disaster Risk Reduction に論文を投稿する予定である。

今回は、日程の都合上、慈済基金会のボランティア訓練や平常時の活動を視察することができなかった。避難所支援の訓練内容や、平常時の活動がどのように災害対応に生かされているのかを実際の現場で知ることは、日本及び低・中所得国がボランティアの育成や事前の備えをするうえで役立つため、再び現地調査に行って視察を行いたいと考えている。

参考文献

Aburamadan R, et al (2020) “Designing refugees’ camps: temporary emergency solutions, or contemporary paradigms of incomplete urban citizenship? Insights from Al Za’atari”. City Territ Archit 7:12

Ainehvand S, et al (2019) a “Natural disasters and challenges toward achieving food security response in Iran.” J Educ Health Promot. 8:51.

Ainehvand S, et al (2019) b “The characteristic features of emergency food in national level natural disaster response programs: A qualitative study.” J Educ Health Promot. 8:58.

Bündnis Entwicklung Hilft (2023) WorldRiskReport 2023, Berlin: Bündnis Entwicklung Hilft.

CNN (Cable News Network) (2021) “Super Typhoon Rai slams into the Philippines as rescue operations get underway.” https://edition.cnn.com/2021/12/16/asia/super-typhoon-rai-philippines-intl-hnk/index.html （2024/08/13 アクセス）

CRED (Centre for Research on the Epidemiology of Disasters) (2023) Disasters in Numbers, Brussels: CRED.

Hendriati N, et al (2024) “The role of burnout and coping in the quality of life among disaster emergency volunteers during the Cianjur earthquake.” Int J Disaster Risk Reduct. 105:104362.

Itatani T. et al (2024) “Operational management and improvement strategies of evacuation centers during the 2024 Noto Peninsula Earthquake - a case study of Wajima City.” Safety. 10(3): 62.

i24 NEWS (2018) “Sick, hungry Indonesia tsunami survivors cram shelters.” https://www.i24news.tv/en/news/international/asia-pacific/191710-181225-sick-hungry-indonesia-tsunami-survivors-cram-shelters （2024/08/13 アクセス）

Kalyoncu Atasoy ZB, et al (2024) “Evaluation of the emergency nutrition response in Malatya after Türkiye–Syria earthquake.” Br J Nutr. 131(7): pp.1244-1258.

Lee ACK, et al (2023) “Ukraine refugee crisis: evolving needs and challenges.” Public Health. 217: pp.41-45.

Lines R, et al (2022) “Progression through emergency and temporary shelter, transitional housing and permanent housing: A longitudinal case study from the 2018 Lombok earthquake, Indonesia.” Int J Disaster Risk Reduct. 75:102959.

Ratnayake Mudiyanselage S,et al (2022) “Infant and young child feeding during natural disasters: A systematic integrative literature review.” Women Birth. 35(6): pp.524-531.

Sakamoto T, et al (2024) “Meals in shelters during Noto Peninsula Earthquakes are deficient in energy and protein for older adults vulnerable to the disaster: challenges and responses.” Nutrients.16(12):1904.

Salmani I, et al (2019) “Conceptual model of managing health care volunteers in disasters: a mixed method study.” BMC Health Serv Res.19(1):241.

Sphere Association (2018) The Sphere Handbook, Humanitarian Charter and Minimum Standards in Humanitarian Response. Geneva: Sphere Association（2024/08/12 アクセス）

The Japan News (2024) “Taiwan’s Public-Private Cooperation Allowed City to Act Quickly After Quake; Taiwan Modeled Disaster Response After Japan’s System.” https://japannews.yomiuri.co.jp/society/general-news/20240414-180170/ （2024/08/18 アクセス）

Udomratn P (2008) “Mental health and the psychosocial consequences of natural disasters in Asia.” Int Rev Psychiatry. 20(5):441-444

UNHCR (The Office of the United Nations High Commissioner for Refugees) (2024) Global Trends Forced Displacement in 2023. Copenhagen: UNHCR

World Economic Forum (2021) “Is Asia-Pacific ready to get age gracefully?” https://www.weforum.org/agenda/2021/10/is-asia-pacific-ready-to-be-the-world-s-most-rapidly-ageing-region/ （2024/08/17 アクセス）

外務省 (2022) 『WAW!2022 コンセプトノート「女性と防災」』 https://www.mofa.go.jp/mofaj/fp/hr_ha/page22_003954.html （2024/08/17 アクセス）

Frontline Press (2019)『ざこ寝、プライバシーなし……「避難所の劣悪な環境」なぜ変わらないのか』 https://frontlinepress.jp/1248 （2024/08/18 アクセス）

讀賣新聞 (2024) 「避難所運営 自治体頼み」 https://www.yomiuri.co.jp/local/kansai/feature/CO072836/20240529-OYTAT50032/ （2024/08/18 アクセス）

東京新聞 (2024)『女性につらい避難所生活「仕切りなく着替えられない」男女共用トイレ「夜は行けない」授乳室や生理用品は…』https://www.tokyo-np.co.jp/article/304151 （2024/08/17 アクセス）

トンガ王国・エウア島における短期還流型労働者がもたらす多面的な影響

Multifaceted Impacts of Short-Term Seasonal Workers in ‘Eua Island, Kingdom of Tonga

大学院人間文化創成科学研究科
ジェンダー社会科学専攻 M2 伊藤有未

1. 要約

（和文）

トンガ王国（以下、トンガ）をはじめ、南太平洋島嶼国の一部地域において、一定期間を国外で過ごし稼ぎを得て母国へ戻るといった労働移動を繰り返す「短期還流型労動」が盛んである。これによる稼ぎは、国内に住む人々の生活に直結しており、生活費や学費といった日常的に発生する支出だけでなく、短期間に大金を得られるとの理由から、大金を要する物品購入や献金の際に大きく貢献している。短期還流型労働がもたらす多面的な影響が、今後のトンガの開発とどのように関わってくるかを調べることを本調査の目的とした。調査は、トンガの離島の 1 つであるエウア島にて、半構造化インタビューと参与観察を行った。インタビュー結果として、短期還流型労働者によって、トンガの人々の生活は豊かになっているといえるが、その豊かさは当該の世帯ないし親族単位にとどまり、トンガ社会全体の開発に貢献しているとは言い難い。労働者の国外流出はトンガ国内の労働力不足にも影響を及ぼしているが、今後は世帯間での格差を広げる一因になることも推測できる。このような状況が、若年層をさらに国外労働へ向かわせる要因となり、世代を超えて還流的な移動が継続していると考察できるだろう。

（英文）

In the Kingdom of Tonga and some other South Pacific Island countries, "short-term seasonal work" is a popular labour mobility to earn money outside of their countries. Earnings from this labour mobility are directly related to livelihoods, and it contributes greatly not only to daily expenses but also to the purchase of expensive goods and some social obligations, because of the large amount of money that can be earned in a short period of time. The purpose of this study is to investigate how the multifaceted impact of the short-term seasonal work leads to the future development of the Kingdom of Tonga. In this research, the researcher conducted semi-structured interviews and observations on the ‘Eua Island, one of the outer islands in the Kingdom of Tonga. As a result of the interviews, the individual lives have been improved by the short-term seasonal workers, but this improvement is for the households or kinship units, so it is difficult to say that this mobility contributes to the development of the whole society. Due to this labour mobility, labour shortage has been a serious problem in the Kingdom of Tonga. At the same time, it is surmised that gaps among households are widened, which

can strengthen the desire to work outside the country, especially among the younger generation.

2.　現地調査期間：2024 年 7 月 30 日～9 月 18 日

3.　調査背景

トンガ国外に住む定住者と豪州やニュージーランド（以下、NZ）との往来を繰り返して稼ぎを得る季節労働者[3]からの送金はトンガ国内で暮らす人たちの生活を支える重要な財源となっている。2022 年時点で、トンガにおける GDP に対する個人送金の受取額の割合は 45.0%（THE WORLD BANK 2024）であり、トンガから海外への労働移動は、1960 年代頃から現在に至るまで、派遣形態を変えながらも続いている。現在、トンガ内務省を通して管理されている労働者派遣プログラムは、認定季節雇用者スキーム（Recognised Seasonal Employer：RSE）という NZ への派遣と太平洋・豪州移住労働制度（Pacific Australia Labour Mobility scheme：PALM）という豪州への派遣の 2 パターンが存在する。

首都ヌクアロファのあるトンガタプ島に限らず、この労働移動は、トンガの各島から起きており、トンガの人々の生活を維持・向上するための大切な役割を担っている。Tonga Statistics Department（以下、トンガ統計局）が 2021 年に公表した国勢調査によると、トンガの離島であるエウア島全 931 世帯のうち 275 世帯からトンガ国外へ労働者が派遣され、当島から労働移動へ参加する世帯は約 30%にまで及び、世帯数に対する労働移動への参加は、他の主要 4 島（トンガタプ、ヴァヴァウ、ハアパイ、ニウア）と比較して、1 番高い数値となっている。そして、国際情勢が安定しない今日、労働受入国が機械化を促進して雇用機会の創出に消極的となれば、その人件費削減の波は、短期還流型労働者を多く送出する太平洋島嶼国の人々の生活に直接影響してくると考えられる。

4.　調査目的

筆者は、2024 年 2 月 20 日から 3 月 8 日の 18 日間、予備調査としてトンガへ渡航した。2022 年 1 月 15 日に発生したフンガ トンガ・フンガ ハアパイ海底火山噴火（以下、HTHH 噴火）の発生および新型コロナウイルス感染症（以下、COVID-19）規制緩和以降初めての渡航ということもあり、予備調査では、これらの出来事が人々の日常生活にどのような影響を及ぼしているのかを調査の焦点とした。これらの影響によって、COVID-19 や噴火以前から続く定住移民や短期還流型労働者の動きに、どのような変化が見られたのかを重点的に考察した。予備調査を踏まえ、本研究では、数多くあるトンガの離島の中でも、首都のあるトンガタプ島から近くて人口の多い離島・エウア島にて、短期還流型労働者の経験や暮らしぶりに着目し、短期還流型労働移動によるトンガ社会への多面的な影響について調べることを目的とした。

---

[3] 本稿では、就労目的で 1 年のうちの数ヶ月を海外で過ごして母国に戻るという移動を、2 年以上繰り返している人たちを、「短期還流型労働者」として定義する。

5. 調査方法

調査方法は、主に現地における参与観察とインタビュー調査である。前者は、エウア島においてトンガ人宅に住み込むことで、短期還流型労働者のいる日常生活のあり様とそれを取り巻く状況について観察した。また、2024 年 2 月の段階からどの程度 HTHH 噴火の復興が進んでいるかについても、エウア島内を複数回巡回した。インタビュー調査は、お茶の水女子大学人文研究科学研究の倫理審査委員会の承認を得たうえで（承認番号 2023-148）、2024 年 8 月 12 日から 9 月 14 日の間に、エウア島に住む短期還流型労働者本人あるいはその家族 10 人を対象に半構造化インタビューを行った。調査者は、2018 年 6 月から 2020 年 4 月まで、JICA 海外協力隊（以下、協力隊）として、農業・食料・林業省エウア支局女性開発部で活動していた。協力隊当時および予備調査時において築いた人脈を活かして、今回の調査協力者の選定には、スノーボールサンプリングを適用した。インタビューは、調査協力承諾書での同意を得て、基本調査協力者の自宅敷地内で実施したが、状況に応じて、職場での実施 1 人と 2 度目の追加調査を 1 人屋外で行っている。筆者が事前に作成した質問票に基づきながらインタビューをし、その内容をフィールドノートに記録しながら、ボイスレコーダーで録音データを残した。インタビューの所要時間は協力者により異なるが、1 人の協力者に対して複数回インタビューを実施しており、1 人当たり数時間程度に及んだ。

上記に加え、短期還流型労働者の実態をより詳細に理解するため、トンガタプ島にある中央省庁（農業・食料・林業省、内務省、人事院、トンガ統計局、貿易・経済・開発省、教育省）を訪問した。同上の理由で、エウア島滞在期間中は、内務省エウア支局、島内に 2 校ある中高等教育学校、Women Children Crisis Centre（以下、WCCC）などを訪れた。

6. 調査結果

（1）調査協力者の概要

今回は、エウア島に住む 28 歳から 63 歳の男女 10 人に半構造化インタビューを実施した。インタビューは、調査協力者の語学力に応じて英語およびトンガ語にて対応した。調査協力者の属性は、表 1 にまとめたとおりである。10 人のうち、C 氏、D 氏、I 氏は短期還流型労働者の親族であった。短期還流型労働者の経験をもつ C 氏の夫、D 氏の娘にも話を聞いたが、主に聞き取り調査を行ったのが親族であったため、表 1 ではその結果を示している。次の表 1 では、一部のインタビュー項目の結果のみを記している。D 氏と I 氏の家族からは、1 人以上の短期還流型労働者を派遣しているが、表 1 では、インタビュー時点で 1 番渡航経験の多い人の回数を表記している。

表 1 調査協力者の属性とインタビュー内容

	A氏	B氏	C氏	D氏	E氏
年齢	52	48	46	63	28
性別	男性	女性	女性	女性	女性
労働者本人か	本人	本人	夫	子	本人
行先	NZ	NZ	豪州	NZ・豪州	豪州
現在の渡航	継続中	終了	終了	継続中	継続中
渡航回数	14	3	5	4	2
短期還流型労働者となった目的	子どもたちの学費を工面するためと食費の確保。	家族を助けるため。	自分たちはとても貧しく、畑とカヴァを育てて生計を立てていたが、収穫までに時間がかかる。いい家に住んでいるわけでもなく、十分なお金がなかった。寒い時期になると、寒気や雨が入ってくるような家だった。	①短期間で大金が得られ、家族での集まりやニーズへの助けとなる。②息子に豪州やNZの素晴らしい環境を見てほしかった。	教会や村といったコミュニティに対する社会的責任に近い献金（*kavenga*）など、短期還流型労働に行くことで家族の助けとなる。
国外に定住しない理由	家族全員で移住できるならしたいけど、NZの移住のプロセスやルールがあるわけで、トンガタプ島とエウア島の移動というわけにはいかない。	トンガで暮らすのが好き、トンガではただでご飯にありつけるが、NZでは滞在費や食費などすべてにお金がかかる。	NZや米国など国外での生活は時間感覚が異なる。国外ではホームレスになってしまうが、トンガでは自分たちの土地で農作物や家畜があり、十分なお金がなくとも生きていける。	移住でなく行き来の方がよい。豪州やNZでは買い物しかり、すべてのことにお金がかかるが、トンガでは無償でどうにかなる。	豪州やNZの市民権を得るプロセスを知らない。どのくらいの期間やその方法が難しい。もしその手続きが容易であれば、すでに移り住んでいるかもしれしれない。

	F氏	G氏	H氏	I氏	J氏
年齢	42	35	57	55	43
性別	女性	女性	男性	女性	男性
労働者本人か	本人	本人	本人	夫、子	本人
行先	NZ・豪州	豪州	豪州	NZ	豪州
現在の渡航	終了	継続中	終了	継続中	終了
渡航回数	4	2	2	17	7
短期還流型労働者となった目的	家族のためにお金を稼ぎ、車の購入、（家財道具の購入も含む）家の建築、ビジネス展開にあてること。	学費など子どもたちを育てていく上での助けとなり、家族の助けとなるため。	①車の購入、②社会的責任に近い献金（*kavenga*）への資金工面、③豪州を見て新しい視野を広げたかった、④新しい人たちや環境の中で共存してみたかった。	家族、教会、村（への資金援助）を助けるため。	①収入を得ることで、家族を助けるため。②トンガ国外へ出て、どのような環境であるのかを単純に見てみたかった。
国外に定住しない理由	トンガでも生活することができる。	家族とトンガに住んでいて、両親を国外に行かせたくない。	トンガに住む方が好き。国外ではすべてにお金がかかる。トンガには（自身の）土地や家があるが、NZはすべてに支払いが発生する。NZでは大金を稼げるが大きな支出を伴うことになる。	－	（短期還流型労働の経験を経て、）トンガ国外で働くことについて理解しているし、トンガに住む方がよい。豪州では時間どおりの行動が求められるがトンガはそうでない。

※年齢は 2024 年から生まれ年を引いて算出している。

※現在の渡航は、インタビュー時点での渡航状況を示している。

出所：インタビュー内容を基に筆者作成

（2）短期還流型労働者としての渡航目的

調査協力者の労働移動で稼いだ収入の使用目的は、家の建設・増築、車の購入、学費の支払い、冠婚葬祭や教会への献金など多岐にわたるが、彼らがこれらを下支えする 「家族への金銭的支援」 という理由で労働移動を決断している点は共通していた（表 1)。そして、トンガで生活する上で日常的に発生する生活費や学費、社会的役割を果たすための各所への献金といった多額の支出に充てることだけでなく、よりよい生活を求めて、①家の建築・増築、②車の購入、③ビジネス展開というように支出目的には段階性がみられた。③のビジネスに関しては、トンガ内務省海外雇用部門が運営する Facebook に、短期還流型労働の成功例として、季節労働ないし短期還流型労働を経て、現在トンガ国内でビジネスを行っている人たちのインタビュー動画が定期的に紹介されている。今回の調査協力者の中にも、その動画の存在を知る者もいた。また、「トンガには仕事が少ない」、「給与が低い」や「短期還流型労働により大金を一瞬にして手に入れることができる」という発言も多く、多くの調査協力者が自らの意思で渡航を選択していた。

次に、将来的な国外移住を目指すのでなく、なぜ短期還流型労働を選択するのかという理由について、「労働受入国である豪州やニュージーランドでは家賃を払うがトンガではその必要がなく、豪州や NZ では働かなくては食べることもできないが、トンガではそのような事態には陥らない」という回答が目立った（表 1)。

調査協力者本人からは、トンガの物価高を指摘する声はあまり聞かれなかった。しかし、参与観察の中で、筆者が協力隊として在任していた期間と比較すると、農作物の値段も大幅に上がっている。例えば、4 年前に 3 パアンガ（約 180 円）だった野菜は、現在 5 パアンガ（約 300 円）となっていた。農業・食料・林業省によれば、トンガの主食であるイモ類に関しても、サイズや量で調整されていたり、全体的な販売価格が上がったりしているという。

（3）半年間（2024 年 3 月から同年 8 月）での HTHH 噴火復興具合

2022 年 1 月 15 日（土）に発生した HTHH 噴火により、ハアパイ諸島およびエウア島を含むトンガタプ諸島を中心に、火山灰だけでなく一部沿岸地域では深刻な津波の被害を受けた。トンガタプ島北東に位置し、被害に遭ったマンゴ島の人々に対しても救済措置が取られ、今もなお一部の住民はエウア島内の仮住居で暮らしている。2024 年 2 月の予備調査時は、マンゴ島の人々の新しい生活拠点となるエウア島最北部のホウマ村とタアンガ村との間の地区の開発は、ほぼ更地に近い状態であったが、半年経った今回の訪問では、すでに家の骨組みと外壁が終わっていた（写真 1 および 2)。当復興支援プロジェクトの担当者に話を聞いたところ、今年 11 月頃の完成を目指しており、「今年のクリスマスは、この家で家族みんなで過ごしてほしい」と話していた。しかし、2024 年 9 月 30 日付けの新聞 Matangi Tonga Online によると、「作業員不足のため、建設が遅れている。多くの国内労働者が季節労働雇用プログラムに参加し、人手不足により全体の着工の遅れとなっている」という。

また、エウア島で最も被害が深刻であった島西部の沿岸地域で住居が全壊した人々は、予

備調査の段階で、オホヌア村でも高台に位置しているトンガ政府が支援した住居に生活拠点を移していた。半年間の変化として、そこで暮らす人たちの中には、自分自身で家の増築や家の周りに草木を植える様子が見られた（写真 3）。半年間で見られたもう 1 つの変化は、HTHH 噴火の津波により全壊した政府機関の建物である。現在、一部の政府機関は、学校の一部屋や教会のコミュニティホールを仕切って業務を行っているが、噴火から 2 年半以上が経った今、海沿いから離れた地域に新オフィスの建設作業が進んでいた（写真 4）。

HTHH 噴火の復興と直接的には関係しないが、エウア島で見られた変化として、エウア島滞在期間中に Caledonian Sky という客船の停泊が 2 度あった（2024 年 8 月 30 日および 9 月 2 日）。港への着岸はできず、乗客たちは小型のゴムボートに乗り換えて、エウア島に上陸していた。島民の話では、客船がエウア島に来るのは初めてのことだという。客船を見に港へ行く人たちや出店を構える人など、一時の話題となっていた（写真 5）。

写真 1_マンゴ地区（2024.2）

写真 2_マンゴ地区（2024.8）

写真 3_家の一部を増築@オホヌア村

写真 4_建設中の政府機関の建物

写真 5_客船と移動するゴムボート

写真 6_トンガの畑の様子

（4）トンガ中央省庁や諸団体が認識している短期還流型労働の利点と問題点

短期還流型労働者に関する研究を進めるにあたり、各機関への訪問は、トンガにおける短期還流型労働者の実態を知るだけでなく、各省庁が認識している短期還流型労働の影響を理解することにつながった。それぞれに得られた情報の概要は、表 2 のとおりである。

表 2 訪問先とインタビュー概要

訪問先	インタビュー概要
首相官邸リーダーシップ部門	（研究調査および査証申請の手続き）
農業・食料・林業省	当省が認識している短期還流型労働者の利点と問題点
内務省（トンガタプ本局）	短期還流型労働者の推移や派遣フローの確認
人事院	トンガ政府職員の待遇や雇用概要
トンガ統計局	国勢調査内にある季節労働者に関する項目
貿易・経済・開発省	当省が認識している短期還流型労働者の利点と問題点
教育省	当省が認識している短期還流型労働者の利点と問題点
国土・天然資源省	トンガタプ島およびエウア島の地図の依頼
内務省（エウア支局）	調査協力者の選定依頼、季節労働者派遣のフロー
エウア中高等教育学校	トンガ公立学校の学費および当校の T-VET 制度 日本語教育の授業見学
ホウファンガハウ 中高等教育学校	トンガ宗教系学校の学費および当校の T-VET 制度
WCCC エウア支部	女性や子どもを中心に起きている社会問題とは何か
JICA トンガ支所	現在の JICA 海外協力隊の活動
トンガ国内の研究者 2 名	（労働移動を研究テーマとする 2 名より情報収集）

出所：インタビュー内容を基に筆者作成

7. 考察

（1）数十年前と変わらない渡航目的

比嘉（2016）は、2004 年から 2010 年の間に、通算約 1 年 3 ヶ月間トンガに滞在し、季節労働者[4]14 人に聞き取り調査を実施している。ここにおいても、季節労働に従事する理由として、14 人中 4 人が自宅の増改築と回答している。また、多くの人が学費の工面もその理由に挙げている。このように、調査対象地は異なるにせよ、数十年前から現在まで短期還流型労働に従事する理由にあまり大きな変化が見られない。この渡航理由に大きな変化が見られないことで、一見トンガの経済や開発は停滞した状態にあるかのように映る。しかし、

[4] 14 人各々の渡航回数は記載されていないため、ここでは「季節労働者」と表記した。

ミクロの視点からみれば、この数十年で起こる世帯成員の変化や消費財の買い替えなど、世帯ないし親族単位での変化は確実に起きている。つまり、数十年と渡航目的自体が変わっていなくとも、短期還流型労働の恩恵を受ける人や購入する製品などは時代の変化に合わせて異なっているといえそうである。世代を超えて、短期還流型労働者の存在が、トンガで暮らす人たちの生活に日々貢献していることが分かる。

また、短期還流型労働者たちが「トンガには雇用が少ない」という一方で、トンガ国内に求人がまったくないわけではない。例えば、トンガで商業農家をしている K 氏によれば、「従業員を募集しても、働き手が集まらない」と話す。予備調査および本調査時、筆者はトンガタプ島にある商店（*fale koloa*）の店前に貼られた手書きの従業員募集の紙を見ている。つまり、職を求める人たちと待遇をできるだけよくして働き手を待つ企業の間に、雇用条件のミスマッチが起きている。これは、6. 調査結果（3）に紹介した Matangi Tonga Online による労働力不足の指摘とも関連してくる。労働力を獲得するため、国内の雇用主も賃金を上げるなどの対策を講じているようだが、現時点では十分な人材確保には至っていない。仮にトンガで豪州や NZ と同額の給与を得られるとしたら、その労働力は他国へ流れずにトンガの発展に直結するのかという点については、今後改めて検討しなければならない課題である。

（2）国外移住でなく、短期還流型労働を繰り返す理由

トンガでは、憲法で定められた土地は、王、貴族、政府のいずれかの管轄地となっている。須藤（2008:88）によると、「土地の使用権は、貴族に借地料、政府に税金を納めている限り、永久に使用が認められ、長男相続が優先された」という。長年住み続けているエウア島への愛着もあると推測するが、将来的な国外移住を目指さずに短期還流型労働者としての移動を繰り返す背景には、「トンガでは土地代や家賃を払う必要がない」という調査協力者の発言からも、このトンガの歴史的な土地制度が大きく関係していることが考えられる。

また、トンガの人たちの多くは、自分自身の所有する畑（写真 6）で採れる農作物があるだけではない。貨幣経済とは異なって、彼らは食料が無償で手に入るような物資調達ネットワークを形成・維持している。教会への献金や家族行事など社会・慣習的に一定の多額の支出がある中で、トンガの人たちにとって、家賃や食費をできるだけ抑えることのできる環境は、移動という労力を繰り返しながらも失いたくない、最低限度の生活を営むための大切な財産とも言えるだろう。この生活基盤だけでなく、トンガからの短期還流型労働者は、トンガ国外に定住する親族や世帯ないし兄弟から短期還流型労働者などセーフティネットに守られた状態で渡航できる。これらの理由からトンガを離れることへの抵抗が少ないと考えられる。つまり、短期還流型労働者とは、世帯ないし親族内における資金・物資調達を主目的とした派遣員であり、トンガ社会全体への貢献や還元とはならず、現状は還流的な世帯ないし親族間での消費レベルにとどまっている。

（3）短期還流型労働者を辞める分岐点

短期還流型労働を 10 回以上繰り返し、NZ にいる雇用主との間で次タームの派遣チームの調整を行う「レジェンド」のような人たち（特に A 氏と I 氏の夫）は、彼らの家族成員からも短期還流型労働者を輩出する傾向にある。一方で、すでに短期還流型労働を辞め、トンガで生活基盤を築いている人たちの多くには、トンガ国内でのビジネス展開や安定した職にプラスして副収入を得られるような日々の生活での工夫が見られた。また、上記の「レジェンド」2 人に対して、「仮に NZ がトンガからの労働派遣を求めなくなった場合、どのようにして生活していくのか」と尋ねると、両者共に「畑での農作物等で生計を立てていく」と答えた。これは、彼らが短期還流型労働者となる前に戻ることを意味する。彼らの子どもたちも短期還流型労働者として働き、自身の年齢的な問題もあるだろうが、上記（2）で述べた最低限のインフラとこれまでの短期還流型労働の稼ぎによる物品購入により生活基盤の向上に成功しているため、トンガでの再就職を試みるような様子はなかった。したがって、短期還流型労働経験者たちは、短期還流型労働の経験を社会で活かすというよりは、トンガでの起業・経営展開も含めて、「個々でどのように生活を豊かにしていくか」といった点に焦点が当たっている。

短期還流型労働をどのくらい繰り返すかは、短期還流型労働者の労働移動への考え方によって異なる。具体的には、トンガ国外で働くことを楽しむ人、生活が安定するまでの忍耐の期間として捉える人など様々である。また、その繰り返しの回数は、短期還流型労働者本人のモチベーションだけでなく、その短期還流型労働者を支えているトンガ国内の家族の意向や彼らの節約・貯金術とも関係してくるようである。

そして、短期還流型労働による次なる影響として考えられるのは、「格差」であると推測する。国内外に張り巡らされた親族ネットワークにより、極度の貧困に陥るといったことはない。しかし、現状ではトンガ全体での生活の質の改善とは言い難く、インタビューでの結果をみても、短期還流型労働者の稼ぎは、主に家の建設・増築や車の購入などに費やされ、世帯ないし親族単位での生活の質の向上となっており、今後特に消費財の内容や量といった物質的な差異がより顕著に表れてくるのではないかと考えられる。二次的影響として、この目に見える変化が若年層を中心に、短期還流型労働者に行きたいと思わせる可視的なきっかけを生み出しているのかもしれない。

（5）小括

上述した内容に共通する点は、短期還流型労働者によって、人々の生活は徐々に豊かになっているといえるが、その豊かさは当該の世帯ないし親族単位にとどまっているのではないかと考察できる。つまり、短期還流型労働は、各々がトンガ国内外に張り巡らされた人脈を駆使して、自らのあるいは家族の生活を豊かにしようとの個々の試みと化し、現時点においては、国家としての経済発展にまでつながらないため、最終的にトンガ全体に大きな経済的変化が起きているようにはみられない。今後、トンガ政府が短期還流型労働者による社

会還元をどこまでどのように求めるかが、将来のトンガの開発を考える上での 1 つの指標となるのではないかと考える。

トンガの人々の生活を豊かにするというポジティブな理由の一方で、短期還流型労働者の派遣に伴い、トンガ国内に残る家庭が抱える課題も問題視されている。トンガの人々の生活に直結する労働移動であるがゆえ、政策動向などを引き続き注視する必要がある。

8. 今後の研究への展望

今回の調査は、トンガの短期還流型労働者に着目した。トンガで調査を進めていくと、短期還流型労働者を取り巻く状況として、更なる研究調査を要する項目が出てきた。具体的には、①個人資本のステータスを示すともいえるトンガの家と短期還流型労働者による稼ぎとの関係性、②トンガ独自の土地所有制度からみるトンガ国内の労働力と産業の発展具合、そして、③個人が所有する家の建設・増築や畑事業の拡大によってもたらされる社会問題などである。短期還流型労働という研究題目 1 つでも、このように短期還流型労働者とトンガ国内の開発に連動する要素が数多く残っている。以上の点も交えて、短期還流型労働の持続可能性とトンガの開発との関係性について、さらに研究を進めていきたい。

参考文献

須藤健一 2008.『オセアニアの人類学―海外移住・民主化・伝統の政治』風響社.

比嘉夏子 2016.『贈与とふるまいの人類学 トンガ王国の〈経済〉実践』京都大学学術出版会.

Matangi Tonga Online 2024 Building of new homes at 'Eua for Mango community delayed by labour shortage. https://matangitonga.to/2024/09/30/building-new-homes-eua-mango-community-delayed-labour-shortage （最終閲覧日：2024 年 10 月 2 日）

THE WORLD BANK 2024. Personal remittances, received (% of GDP) - Tonga https://data.worldbank.org/indicator/BX.TRF.PWKR.DT.GD.ZS?locations=TO （最終閲覧日：2024 年 10 月 22 日）

開発途上国における個別排水処理（On-Site Sanitation）の周辺土壌のウイルス調査

Investigation of virus in soil around On-Site Sanitation in developing countries

大学院人間文化創成科学研究科
生活工学共同専攻 M1 井上 眞菜

１．要約

（和文）

し尿排水処理方法として、途上国や中進国では個別排水処理（On-Site Sanitation systems；以下 OSSs）が普及しており、この中でも底のない筒にし尿を流し込み土壌浸透させる型を Pit latrine という。Pit latrine は本来非水洗のトイレに接続されることを想定しているが、昨今はトイレの水洗化が進みトイレ排水量の増加に適応しできず病原微生物リスクの抑制が不十分である可能性がある。これに付随して、実際の OSSs 処理、および土壌浸透による病原リスク低減効果がどの程度なのかは明らかではなく、実態に沿って調査する必要がある。そこで本研究では、実際の運用中 OSSs の周辺土壌に対しヒト糞便汚染指標ウイルス PMMoV（Pepper Mild Mottle Virus）を測定することで、周囲の土壌へのウイルスの伝搬状況を調査することを目的とした。以前研究室では PMMoV 濃度を定量 PCR にて測定してきたが、本調査において農業分野で土壌からの PMMoV の検出として用いられている ELISA（Enzyme-Linked Immuno-Sorbent Assay）を試みることとする。調査方法として、OSSs の普及するスリランカにて家庭用 Pit Latrine および似た型である Soakage pit のそれぞれ 2 カ所を対象とし、各 OSSs 近傍にて 0.5 m および 1.0 m の深さで土壌を採取し PMMoV 濃度を測定した。結果は、複数の個別排水処理施設にて PMMoV が検出され、地点によって差があることがわかった。また、深さ 0.5 m よりも深さ 1.0. m の方が検出量の高い傾向にあった。これらの調査結果を踏まえ、今後の調査では採取地点を絞り OSSs 近傍および距離をとった位置の土壌を採取することで、OSSs からの距離に応じウイルスがどのように輸送されるのか推定する予定である。

（英文）

In many parts of the developing countries, On-Site Sanitation (OSS) systems is prevalent for treating human wastewater. Among them, pit latrines are one of the common types and designed for use with non-flushing toilets. However, with the increasing adoption of flush toilets, the pit latrines are unable to handle the increased wastewater volumes, potentially leading to insufficient control of pathogen risks. The effectiveness of OSS systems in reducing pathogen risks through soil infiltration remains unclear, necessitating further investigation. This study aimed to investigate the propagation of viruses in the soil surrounding operational OSS systems by measuring the presence of the human-specific fecal contamination indicator virus, PMMoV (Pepper Mild Mottle Virus). Previous studies in our

laboratory have quantified PMMoV using quantitative PCR, but this research attempted to use ELISA (Enzyme-Linked Immuno-Sorbent Assay), a method commonly used for detecting PMMoV in agricultural field. In this study, soil samples were collected from two depths at household OSS sites in Sri Lanka, a country with widespread OSS use, and PMMoV concentrations were measured. The results showed that PMMoV was detected at some OSS sites, with variations between locations. Additionally, higher concentrations were generally found at a depth of 1.0 m compared to 0.5 m. Based on these findings, future research will focus on selecting sites to collect soil samples both near and far from the OSS systems to estimate how viruses are transported with distance from the source.

２． 現地調査期間：2024 年 10 月 15 日～10 月 29 日

３．調査背景

WHO とユニセフの報告書[1]によると世界では約 7 億 300 万人が安全な水にアクセスできず、36 億人が適切な衛生設備（他世帯と共有せずに使用され、かつ排泄物が適切に処理される設備）を欠いている。2000 年以降多くの水・衛生環境が改善されたものの、未だ適切なサービスを得ることのできない人々のいる現状に対し、持続可能な開発目標（Sustainable Development Goals；SDGs）では 2030 年までに「すべての人々の水と衛生の利用可能性と持続可能な管理を確保する」[1]ことを目標に掲げており、水・衛生環境に関して改善が求められている。し尿排水処理方法として、日本の都市部では下水道が主に使用されているが、世界的にみると、特に途上国や中進国では個別排水処理（On-Site Sanitation systems；以下 OSSs）が普及している。OSSs とは、家庭などから排出されたし尿排水を処理槽内に貯蔵し嫌気環境下で消化処理を行う仕組みであり、家庭で使用される OSSs には主に図 1 の種類が挙げられる。2000 年以降、下水道接続人口は増加し続けているものの OSSs の増加率はより高く、2020 年には OSSs 使用人口が下水道接続を使用する人数を初めて上回った[2]。この要因としては、国連の主導により世界的に屋外排泄をなくす取り組みが行われている中、OSSs が下水道と比較して費用が安く済み、かつ共同体でまとめて処理を行うことも可能であるため、特に農村部にて積極的に導入されていることが挙げられる。

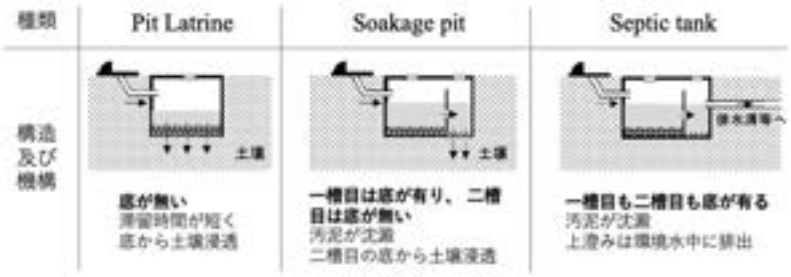


図 1　OSSs の主な種類

このうち、低・中所得国を中心とした約 17 億人は非水洗式トイレ用の OSSs である Pit

latrine を使用しており[3]、これは底がない筒に流入したし尿排水が比較的短い期間のうちに土壌に浸透する仕組みをとっている。また、Septic tank にて処理を行った後 Pit latrine にて土壌浸透を行う Soakage pit 型も存在する。特に Pit latrine は本来非水洗のトイレに接続されることを想定しているが、昨今はトイレの水洗化が進みトイレ排水量の増加に適応できず病原微生物リスクの抑制が不十分である可能性がある。しかし、個々の OSSs によって設計や運用状況が異なるため、実際の OSSs 処理による病原リスク低減効果がどの程度なのかは明らかでない。また、OSSs 処理に加え土壌浸透による病原リスクの低減効果について不明な点が多く、特に飲み水として井戸水が使用されている地域では地下水の汚染からの水系感染症の要因となる可能性があると考えられる。土壌浸透によるウイルスの伝搬は水文学的、そして土壌の条件に大きく依存することから、OSSs のみならず周囲の地理的な要因も含めて実態を探ることが必要である。

４．調査目的

本研究では実態を探るため、実際に途上国で運転している OSSs からの糞便由来病原微生物の流出状況推定を目的とし、現地で OSSs 周辺土壌を採取し土壌中の糞便汚染指標を測定した。ヒト糞便汚染の指標微生物としては大腸菌が一般的に使われるが、この指標は病原細菌の挙動を表しているものの、病原ウイルスの挙動を示しているかは疑わしい。特に OSSs 内の処理効率や土壌中の挙動は、サイズおよび粒子としての特性が大きく異なると考えられる。そこで本研究では、非病原性かつヒト糞便由来ウイルスである PMMoV（Pepper Mild Mottle Virus）を測定することで病原ウイルスの挙動を推定することとした。以前研究室では PMMoV 濃度を定量 PCR にて測定してきたが、共存物質の影響や定量限界値が高いことから、農業分野で土壌からの PMMoV の検出として良く用いられている ELISA（Enzyme-Linked Immuno-Sorbent Assay）を試みた。今回の渡航にて複数の形式や状態が異なる OSSs を対象とした調査を行うことで、今後の研究における調査の方向性を見出していくことを目的とした。

５．調査方法

調査期間 2024 年 10 月 15 日から 10 月 29 日内に、スリランカ国のゴール県にて OSSs 周辺の土壌を採取し、ヒト糞便汚染指標ウイルスを測定した。また、土壌含水量についてもオーブン乾燥を行い前後の重量を調べることで測定した。

本調査は共同研究を行っている Ruhuna 大学（スリランカ国、ゴール県）と協力して進め、サンプリングは Ruhuna 大学の学生の協力のもと行った。また、ウイルスの測定は Ruhuna 大学の実験室にて行った。

（１）調査対象国・地域について

スリランカ国は、人口 2204 万人、国民 1 人当たり GDP が 3474 米ドル[4]であり、中所得

国[5]に分類される。熱帯地域に属しているが、面積が約 6 万 5000 m^3 と比較的小さいにも関わらずそれぞれの場所の地理的条件に応じて気候が大きく異なっている。今回調査対象としたゴール県はスリランカの南部に位置し、年平均気温は 28 ºC 、年平均降水量は 2485.6 mm であり、湿度が約 80 % と高温多湿の気候となっている[6]。明確な区切りはないものの乾季と雨季が存在し、1 月から 3 月にかけては特に降水量が少なく、10 月から 12 月に降水量が多くなっている。

衛生施設に関しては、下水道接続は人口のおよそ 2.4 % にとどまっており、その整備は主に西部州を中心に整備されている[7]。人口のほとんどは OSSs を使用しており、表 1 に示したスリランカ国の衛生施設に係る型別の割合によると、人口のうち 83.1 % が水洗トイレに接続される Pit Latrine にてし尿を処理している。これに関し、非水洗トイレの接続が想定されている Pit latrine への水洗トイレの接続は不十分な処理を引き起こす可能性があり、さらにスリランカでは飲用水における地下水のカバー率が約 40 % [8] となっていることから、スリランカにおいて OSSs 由来の成分による地下水の汚染や、飲用水への影響の可能性が考えられる。

表 1 スリランカ国の衛生施設に係る型別の割合

Table 2.2 Household sanitation facilities

Percent distribution of households and de jure population by type and location of toilet/latrine facilities, according to residence, Sri Lanka 2016

Type and location of toilet/latrine facility	Households				Population			
	Urban	Rural	Estate	Total	Urban	Rural	Estate	Total
Improved, not shared facility								
Flush/pour flush to piped sewer system	11.1	1.8	2.6	3.3	11.3	2.0	0.6	3.4
Flush/pour flush to septic tank	4.5	1.5	3.7	2.1	4.6	1.5	3.3	2.1
Flush/pour flush to pit latrine	72.1	84.6	72.0	82.1	72.3	85.9	73.4	85.1
Ventilated improved pit (VIP) latrine	1.1	1.5	2.1	1.4	1.3	1.5	2.1	1.5
Pit latrine with slab	1.9	0.9	0.3	1.0	2.0	0.9	0.4	1.1
Composting toilet	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
Total	90.8	90.3	78.7	89.9	91.5	91.7	79.8	91.2
Shared facility[1]								
Flush/pour flush to piped sewer system	1.0	0.2	0.1	0.4	1.0	0.2	0.1	0.4
Flush/pour flush to septic tank	0.6	0.1	0.4	0.2	0.5	0.1	0.4	0.2
Flush/pour flush to pit latrine	5.5	7.2	16.3	7.3	4.6	6.1	15.6	6.3
Ventilated improved pit (VIP) latrine	0.0	0.0	0.2	0.0	0.0	0.0	0.2	0.0
Pit latrine with slab	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1
Total	7.2	7.6	17.0	8.0	6.2	6.6	16.3	6.9
Unimproved facility								
Flush/pour flush not to sewer/septic tank/pit latrine	1.1	0.3	0.6	0.4	1.2	0.2	0.5	0.4
Pit latrine without slab/open pit	0.1	0.2	0.1	0.2	0.1	0.2	0.0	0.2
Bucket	0.0	0.0	0.0	0.0	0.1	0.0	0.0	0.0
No facility/bush/field	0.4	1.2	3.0	1.2	0.4	1.1	2.6	1.0
Other	0.4	0.2	0.6	0.2	0.5	0.2	0.7	0.2
Total	2.0	2.0	4.3	2.1	2.2	1.7	3.8	1.8
Total	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
Number	4,309	21,778	1,122	27,210	17,212	82,864	4,492	104,569

[1] Facilities that would be considered improved if they were not shared by two or more households.

出典：Department of Census and Statistics : Sri Lanka Demographic and Health Survey.（2016） 2.1.3 Sanitation

（2）調査対象 OSSs について

ゴール県の許可を得た一般家庭にて、実際に運転中の 4 ヵ所の OSSs を対象とした。各

OSSs は、大抵が庭などに活用されている家のすぐ側の土地に埋められる形で設置されている。4 ヵ所のうち 2 ヵ所は Soakage pit（以下 L1、L2）、他 2 ヵ所は Pit latrine（以下 L3、L4）の型であった。Soakage pit を対象とした 2 家庭は、どちらもゴール県の南部にある Hapugala 地区に位置しており、位置を図 2 に示す。Ruhuna 大学工学部 Pit latrine を対象とした 2 家庭は、ゴール県の南部にある Kathaluwa 地区にあり海に面した地域である。位置を図 3 に示す。調査対象としたそれぞれの OSSs につき、以下記述する。また、記載する OSSs の情報は Ruhuna 大学の学生の協力のもと、所有者に口頭での聞き取り調査を行った結果である。

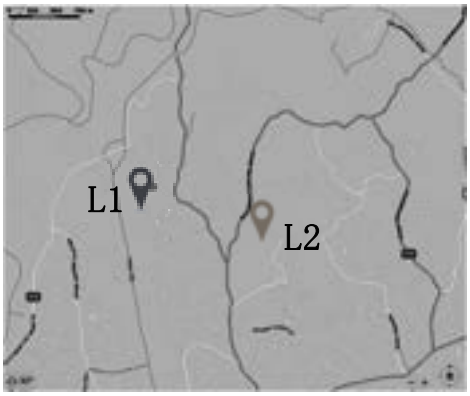


図 2 L1、L2 の位置（Hapugala 地区）

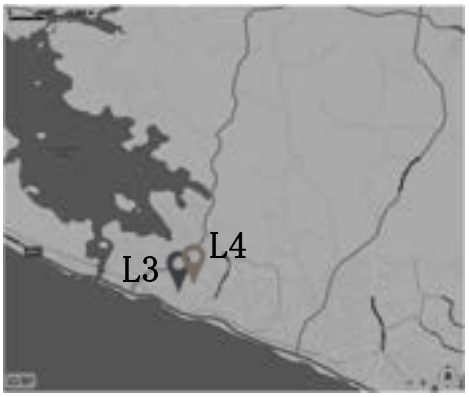


図 3 L3、L4 の位置（Kathaluwa 地区）

① Soakage pit

対象とした 2 ヵ所（以下 L1、L2 とする）はどちらもゴール県 Hapugala 地区の家庭用 Soakage pit である。Hapugala 地区は海岸から 3 km ほど離れており、住宅地や小さな商店が見られる地域である。調査協力を依頼した Ruhuna 大学の工学部キャンパス中央に位置している。

L1 は、Ruhuna 大学敷地内に位置する大学職員の住宅脇に設置されている。正方形の形をした Soakage pit であり、家屋から数 m 離れた斜面の下に埋められている。その幅は 2m、深さは 3 m であり、設置年数は 10 年である。土壌を採取する様子を図 4 に示す。周囲は雑草で埋め尽くされており、あまり人の立ち入らない場所であった。

L2 は一般家庭の正方形の形をした Soakage pit であり、家屋のすぐそばにある庭に設置されている。その幅は 1.5 m 、深さは 2.5 m であり、設置年数は 2 年である。土壌を採取する様子を図 5 に示す。Soakage pit の真上は人の通り道となっていた。所有者はガーデニングを行なっており、Soakage pit のすぐ横では多くの植物が育てられている様子であった。

図 4 L1 にて土壌採取の様子

図 5 L2 にて土壌採取の様子

② Pit latrine

対象とした 2 ヵ所はどちらもゴール市 Kathaluwa 地区の家庭用 Pit latrine である。両方とも同じ所有者を持ち、同じ家の庭にて数 m 離れた土地にある。Kathaluwa 地区は海に面した地区であり、対象家庭は海岸線からおよそ 300m 離れた地点にある。2002 年のスマトラ沖地震の際には津波の被害を受けており、海から近いため地下水位も高く土壌中の含水率が高いのではないかと予測された。

L3 は一般家庭にて運用中の Pit latrine である。その幅は 1.5 m 、深さは 2.5 m であり、設置年数は 60 年である。設置当時より非常に長い年月が経過しており、所有者によると大雨により度々タンクから内部の水が溢れてしまうことが懸念となっており、近く新しいタンクへ変更する予定である。採取の数日前にも大雨が降っており、測定に影響が出ている可能性がある。土壌を採取する様子を図 6 に示す。

L4 は、L3 と同じ家庭のもつ Pit latrine であり、その幅は 1.0 m 、深さは 2.5 m、設置年数は 40 年である。L3 とは近い距離にあるが、所有者によるとこちらは大雨により溢れるなどの現象は起きていないとのことであった。土壌を採取する様子を図 7 に示す。

どちらもガーデニングが行われている庭内にあり、真上もしくはその側には多様な植物が植えられていた。

図 6 L3 にて土壌採取の様子

図 7 L4 にて土壌採取の様子

（２）土壌の採取方法

各 OSSs の近傍 0.2m 地点から、深さ 1.0m および 0.5m をハンドオーガーDIK-100A（大起理化工業）を用いて垂直に掘削し土壌を採取した。採取した土壌はプラスチック製の袋に密閉して保管し、採取後は Ruhuna 大学の実験室にて 4 ºC で保管した。

（３）土壌サンプルからのウイルス抽出方法

以下に土ウイルス抽出方法を示す。

① 各土壌サンプルを 2 g をはかりにて計測し、先行研究 [9] にて提案された抽出液（0.1%Tween20 含む pH7.0 リン酸緩衝液）8 mL を加えた。
② 遠沈管に入れ、3 分間手振りの撹拌を行った。
③ 遠心機（Gemmy 社 TABLE TOP CENTRIFUGE PLC-02）にて 2300g で 4 分間遠心にかけた。
④ 上澄みを数 mL 採取し、4 ºC で保存した。

（４）ウイルス抽出液の PMMoV 測定方法

以下に PMMoV の測定方法を示す。手順は DAS-ELISA キット（日本植物防疫協会製）に従って行った。なお、手順⑧における測定の手順は、本来マイクロプレートリーダーでの測定が想定されているが、現地でのプレートリーダーへの適応が困難であったため、ポータブル吸光光度計 DR1900 を用いて吸光度の測定を行った。吸光度の測定に関し、帰国後日本にて別途問題がないか確認する実験を行い、精度に問題のないことを確認した。

① ELISA 用 96well プレート（以下プレート）の各 well に希釈済みコーティング液（ウサギ γ-グロブリン、0.05％ NaN_3）200μL を入れ、密閉したのち 37 ºC で 3 時間静置した。

② プレートを PBS-T を用いて３～４回洗浄した。

③ プレートの各 well に各サンプルのウイルス抽出液を 200 μL 入れ、密閉したのち 37 ºC で 2 時間静置した。

④ プレートを PBS-T を用いて３～４回洗浄した。

⑤ プレートの各 well に希釈済みコンジュゲート液（アルカリフォスファターゼ標識ウサギ γ-グロブリン、1%牛血清アルブミン、0.05% NaN_3）200μL を入れ、密閉したのち 37 ºC で 3～4 時間静置した。

⑥ プレートを PBS-T を用いて３～４回洗浄した。

⑦ 10%ジエタノールアミン溶液に p-ニトロフェニルリン酸二ナトリウム（1 mg/mL）を溶かしたものを基質溶液とし、プレートの各 well に入れ密閉したのち、アルミホイルに包み 30 分間静置した。

⑧ プレート内の各 well から 200μL を採取し、純水を用いて 20 倍希釈を行った。希釈後速やかにポータブル吸光光度計 DR1900 を用いて、波長 405nm で吸光度測定を行った。

６．調査結果

（１）PMMoV の測定結果

以下図 8 に各地点、サンプルごとの PMMoV の測定結果を示す。

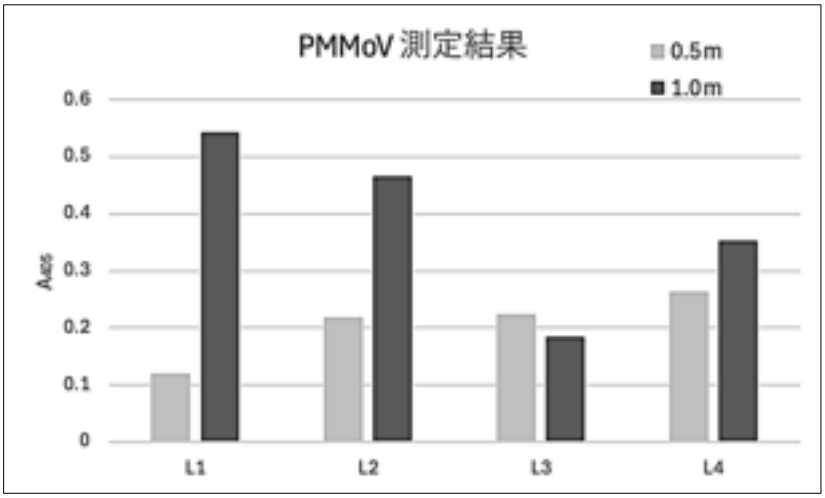


図 8 各地点での深さ 0.5 m、1.0 m の土壌における PMMoV の測定結果

（２）含水率の測定結果

以下図 9 に各地点、サンプルごとの含水率の測定結果を示す。

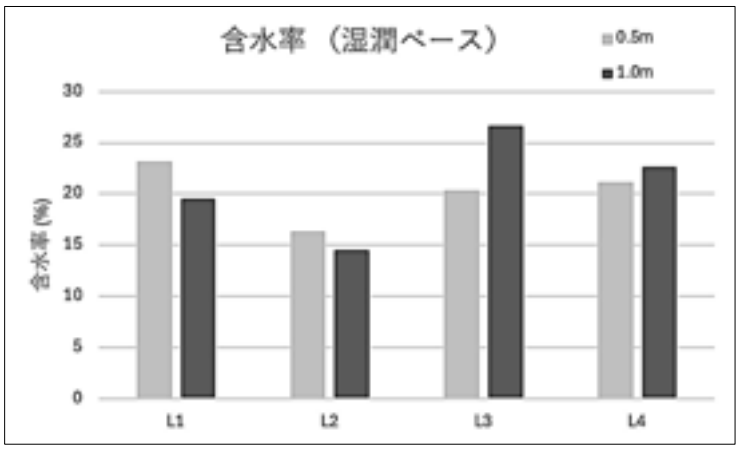


図 9 各地点での深さ 0.5 m、1.0 m の土壌における含水率の測定結果

７．考察

L3 以外のどのサンプルも、深さ 1.0 m のポイントから採取したサンプルの方が PMMoV の濃度が高かった。これは、Soakage pit および pit latrine の構造よりタンクから土壌に浸透する部分（底部）により近いほどウイルスの濃度は高いと想定されていたことと相反しない結果である。反面、L3 では深さ 1.0 m のポイントの方が PMMoV 濃度は低かった。これは、この Pit latrine が最近の現象として内部の水が溢れてしまうほど設置から非常に長い年月が経っていたことで、土壌のウイルス移動に影響を及ぼしていることが考えられる。また、そのような氾濫現象が起きているにも関わらず、他の場所と比較して PMMoV 濃度が低かったことも予想に反する結果であった。このような Pit latrine は汚泥を引き抜くか、もしくは埋めて新しい OSSs を作ることが推奨されており、実際に近いうちに建て直す意向を所有者から伺った。

L1、L2 と L3、L4 を比較すると、前者の Soakage pit は前段階として Septic tank による処理が行われるため、Pit latrine よりも処理効率が良好であると考えられるが、結果から Soakage pit の方が周囲の土壌からより多くの PMMoV が検出されていた。予想に反した結果となったが、実際に Soakage pit の方が処理として pit latrine ほど有効でないのか確かめるためにも、引き続き調査を行う必要があると考えられる。

含水率に関しては、L1、L2 では深度が深くなるほど含水率が低くなり、反対に L3、L4 では高くなる傾向が見られた。土壌の水分量は気候、土壌条件等様々な要因によって変化するものであるが、後者は一因として海に近いことから地下水位が高い可能性が挙げられる。

７．今後の研究への展望

今回の調査により、2 種類の型、そして使用年数が異なる 4 つの OSSs についてヒト糞便汚染指標ウイルス PMMoV の濃度を測定することができた。これにより、スリランカの土壌にて DAS-ELISA を適用したウイルス測定方法が可能であると確認するとともに、結果を

もとに次回の調査に役立てたいと考える。また、現在 ELISA における PMMoV ポジティブ・コントロールを用いた定量が可能であるかを確認しており、今後活用したいと考える。次回の調査内容として、今回の採取ポイントのうち複数ポイントを選択し、OSSs の近傍だけでなく OSSs 中心より複数方向へ離れたポイントから土壌を採取し PMMoV を測定することを想定している。このことにより、OSSs からの距離に応じウイルスがどのように輸送されるのか推定することが期待できる。同時に、今回のタンクの情報等に加え、家族構成や流入量などから、普段どのように運用されているのかを詳しくヒアリングする予定である。また、スリランカでの調査とは別に、日本にて実験的に異なる組成の土壌を用意し、それらを対象にウイルスの吸着量を測定する実験を行うことで、土壌のウイルス阻止能力に関わる要因を探ることを今後の展望とする。

注

1. 外務省国際協力局 「持続可能な開発目標（SDGs）と日本の取組」（2025/1/3 アクセス）
   https://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/sdgs/pdf/SDGs_pamphlet.pdf
2. WHO, JMP, UNICEF (2021) : PROGRESS ON HOUSEHOLD DRINKING WATER, SANITATION AND HYGIENE 2000-2020 FIVE YEARS INTO THE SDGs
   https://data.unicef.org/wp-content/uploads/2022/01/jmp-2021-wash-households_3.pdf
3. Graham, J.P., Polizzotto, M.L (2013) “Pit latrines and their impacts on groundwater quality: a systematic review. Environmental Health Perspect” 121, 521–530.
   https://doi.org/ 10.1289/ehp.1206028.
4. 外務省 「スリランカ民主社会主義共和国基礎データ」（2025/1/3 アクセス）
   https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/srilanka/data.html
5. JICA 「主要国所得階層別分類（国連及び世銀の分類による。）」（2025/1/3 アクセス）
   https://www.jica.go.jp/activities/schemes/finance_co/about/standard/class2012.html
6. time and date 「Climate & Weather Averages in Galle, Sri Lanka」（2025/1/12 アクセス）
   https://www.timeanddate.com/weather/sri-lanka/galle/climate
7. JICA「スリランカ国下水セクター開発計画策定プロジェクト(第 I 期) (2017)」（2025/1/3 アクセス）
   https://openjicareport.jica.go.jp/pdf/12307880_01.pdf
8. Suresh Indika, Yuansong Wei, et al (2022)“Groundwater-Based Drinking Water Supply in Sri Lanka: Status and Perspectives” Water 2022, 14(9), 1428
   https://www.mdpi.com/2073-4441/14/9/1428
9. 井西一葉（2023）「途上国における個別排水処理(オンサイトサニテーション) の周辺土壌からのウイルス抽出方法の検討」 令和 5 年度お茶の水女子大学卒業論文

参考文献

Sri Lanka Demographic and Health Survey 2016（2025/1/3 アクセス）
https://www.statistics.gov.lk/Health/StaticalInformation/DHS#gsc.tab=0
柴尾映里奈（2022）「オンサイトサニテーション由来の病原指標微生物の状況調査 〜スリランカ・ベトナムの事例〜」令和 4 年度お茶の水女子大学卒業論文

グローバル社会における平和構築のための大学間ネットワークの創成
―女性の役割を見据えた知の国際連携―
令和６（2024）年度　実施報告書

2025 年 3 月
発行：お茶の水女子大学グローバル協力センター

〒112-8610　東京都文京区大塚 2-1.1
Tel＆Fax：03-5978-5546
E-mail：info-cwed@cc.ocha.ac.jp

グローバル社会における平和構築のための大学間ネットワークの創成

ー女性の役割を見据えた知の国際連携ー

令和６（2024）年度　実施報告書

お茶の水女子大学
Ochanomizu University